

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第410集

環境整備構造確認調査

# 板付遺跡

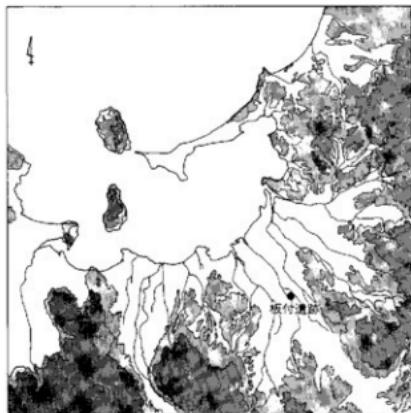
1995

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第410集

環境整備構造確認調査

# 板付遺跡



平成 7 年

福岡市教育委員会



姿をあらわした環濠（南西上空から）

## 序

アジアの拠点都市を目指して都市づくりが進んでいる福岡市には、日本における稲作農耕文化の発祥の地である板付遺跡や古代の迎賓館である鴻臚館に代表されるように、海外との盛んな交流を示す遺跡や文化財に恵まれています。

板付遺跡は、大正6年、中山平次郎博士によって初めて学会に紹介され、昭和26年には日本考古学協会の手によって発掘が行われました。その後、明治大学・九州大学、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会へ発掘調査が引き継がれ、教科書を塗りかえるような数々の発見が相次ぎました。中でも「縄文水田」や「二重環濠の発掘」は、これまでの学説の再検討を迫ることになりました。

昭和51年には、国史跡に指定され、環境整備に先立って考古学や造園学などの専門家で構成した「板付遺跡調査整備委員会」（委員長：横山浩一・福岡市博物館長）を設置し、基本計画の検討を重ねました。

本書は、環境整備の基本的な資料を揃えて遺構復元を正確に行うために、史跡地内と外環濠推定地、および南台地において実施した遺構確認調査の報告書です。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また弥生時代研究の資料として活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、昭和26年の発掘調査以来、発掘作業や用地買収、そして整備工事にご協力いただいた地元のみなさま方には、心から謝意を表します。

平成7年3月

福岡市教育委員会  
教育長 尾花 剛

## 例　言

- 本書は史跡板付遺跡（福岡市博多区板付2、3丁目）の環境整備にともない、昭和63年度から平成5年度まで実施した遺構確認調査の報告書である。
- 昭和63年度から平成元年度は山崎純男と吉武学、平成元年度から平成2年度は二宮忠司、平成3年度から平成5年度は力武卓治が発掘担当した。本書の執筆は、三人が担当区ごとに分担し、力武が編集合本した。
- 目次、図版、挿図目次は、通しとしないで各担当発掘区ごとにつけている。
- 遺構確認調査に関わる図面、写真などの記録類と出土物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される。

## 目　次

第1篇　はじめに	1
1　調査に至るまで	1
2　これまでの調査	2
第2篇　内環濠の調査（第54・59次調査）	5
第3篇　外環濠の調査（第60・61次調査）	25
第4篇　南台地・外環濠の調査（第63～66次調査）	79

発掘調査表

調査番号	8866	8990	9050	9051	9052	9141	9266	9330	9331
遺跡略号	ITZ-54	ITZ-59	ITZ-60	ITZ-61	ITZ-62	ITZ-63	ITZ-64	ITZ-65	ITZ-66
調査地	史跡地	史跡地	外環濠	外環濠	外環濠	南台地	南台地	外環濠	南台地
調査面積	9,300	9,300	800	100	80	750	200.5	81	120
調査年度	昭和63	平成元	平成2	平成2	平成2	平成3	平成4	平成5	平成5
担当者	山崎 吉武	山崎 吉武	二宮	二宮	二宮	力武	力武	力武	力武

# 第1篇

## 第1章 はじめに

### 1 調査に至るまで

板付遺跡は、昭和25年、中原志外顕氏によって発見された。翌年から日本考古学協会が実施した発掘調査によって、弓状の溝と貯蔵穴などが検出され、炭化米や板付I式土器についた糊痕、収穫用石器などから、弥生時代開始期から稲作が行われていたことが確認された。その後、同協会農業部会（代表杉原莊介明治大学教授）によって、環濠になることが明らかになった。昭和40年代後半になると、田園風景の広がる板付遺跡周辺にも都市化の波が押し寄せ、その開発行為は板付遺跡の中心である通津寺の台地にも及ぶような切迫した状況となつた。このため福岡市教育委員会は、板付遺跡の保存と活用を図るために昭和48年度から公有地化事業を進め、昭和51年6月21日に国史跡に指定された。史跡地の用地買取と家屋の移転が、昭和61年度に完了したので、引き続き史跡整備の準備をスタートさせた。その基本計画の立案にあたって、考古学、造園学、水工土木学などの専門家の意見を聞き、指導を仰ぐために「板付遺跡調査整備委員会」を設置した。委員会での検討結果、板付遺跡の環境整備の基本テーマとして「弥生時代初めころの板付ムラの再現」が決定して、年度ごとに実地設計を作成し、整備工事を進めた。ところで、板付遺跡の発掘は、弥生時代研究に対して多くの資料を提供し、その解明に貢献したが、板付遺跡の全貌が把握されていたわけではない。例えば台地を一周するという環濠は、トレンチを図上に繋いで推測したものであったし、環濠内側も昭和44年にわずかに一度発掘されたにすぎなかった。また、板付遺跡周辺で実施してきた緊急調査で得られて資料の蓄積とその再検討をする過程で、台地縁の各所で見つかっていた弥生時代の用水路が台地を巡って二重環濠となるという新たな説が提起され、学会の注目を集めた。またこれまで発掘例のなかった南台地の調査も課題となつた。

遺構確認調査は、これらの解明を第一の目的とした。さらに発掘作業自体を展示物として見学や発掘体験の場に活用するように「板付遺跡調査整備委員会」より指導を受けた。現地説明会や発掘作業を通して、環境整備の趣旨や目的、そして板付遺跡の将来などについて、地元の方々の理解を得るように努めた。



Fig. 1 再現工事中の「板付弥生のムラ」 平成7年2月

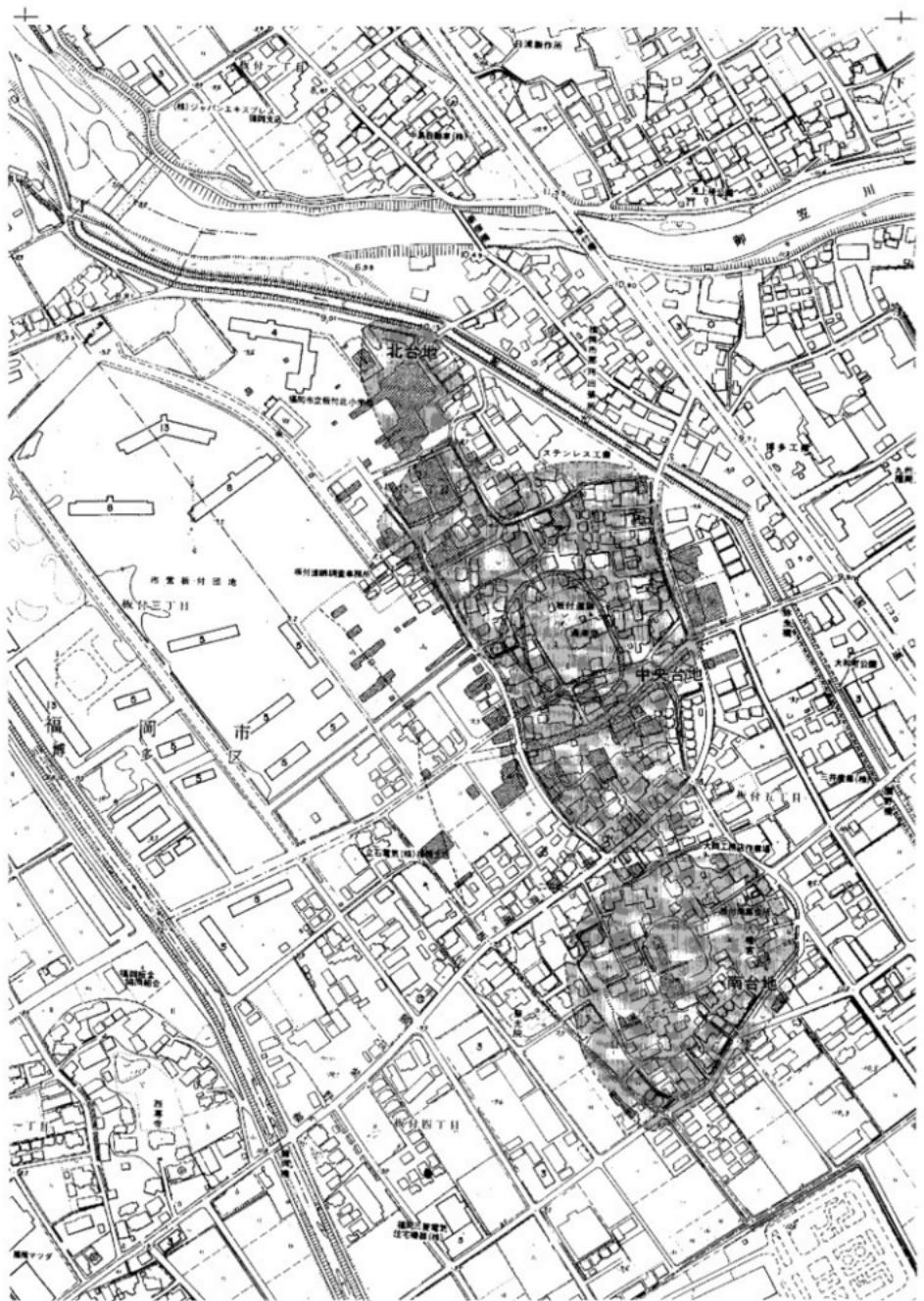


Fig. 2 板付遺跡の発掘調査地点



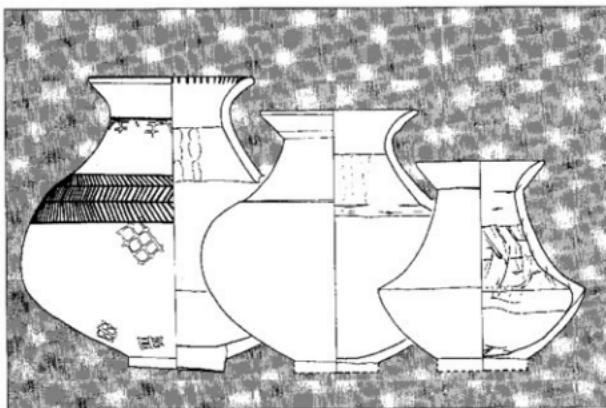
Fig. 3 板付道路の航空写真

Fig. 3 板付遺跡発掘調査表

調査番号	調査名	次番	地点	調査原因	調査種別	調査区域	所在詳細	調査面積	測量開始日	測量終了日	調査終了日	担当者	報告書番号	
5101	板付遺跡	1		学術調査	博多	板付2丁目	880	51.52.53				秀吉学園会	1002	
6804	板付遺跡	2		学術調査	博多	板付2丁目	120	68				村原紅介	明治大	
6907	板付遺跡	3		確認調査	博多	板付2丁目	160	690725	690812	下條敏行		8		
6910	板付遺跡	4		学術調査	博多	板付2丁目	16	690800	690890	竹原弘介				
7011	板付遺跡	5		確認調査	博多	板付2丁目	80	701016	71022	島	浜崎亮光			
7102	板付遺跡	6		典故調査	公	共	博多	板付2・3丁目	7,266	710816	740410	佐藤桂介	35	
7309	板付遺跡	7	H-8	専任建設施設	博多	板付4丁目	48	730700	730700	後藤、山口	29			
7310	板付遺跡	8	D-6・7	専任建設施設	博多	板付5丁目	32	730900	730900	後藤、山口	29			
7311	板付遺跡	9	第2工区	専任建設施設	公	共	博多	板付4丁目	68	730700	730800	後藤、武	29	
7408	板付遺跡	10	F-9-a	専任建設施設	博多	板付5丁目	150	740520	740620	後藤能	31			
7409	板付遺跡	11	D-E-9	専任建設施設	博多	板付5丁目	100	740601	740629	後藤能	31			
7417	板付遺跡	12		学術調査	博多	板付2丁目						寺原		
7507	板付遺跡	13	F-8-a	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	30	750423	750523	横山、山口他	36		
7608	板付遺跡	14	G-5-a	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	600	730700	730900	横山、山口他	36		
7606	板付遺跡	15	G-6-a	専任建設施設	博	博多	板付2丁目	90	760500	760600	沢、山口他	38		
7607	板付遺跡	16	G-H-5	専任建設施設	博	博多	板付2丁目	530	760409	760621	沢、山口他	38		
7608	板付遺跡	17	H-5	専任建設施設	博	博多	板付2丁目	140	760709	761000	沢、山口他	38		
7609	板付遺跡	18	505号地	専任建設施設	博	博多	板付2丁目	1,110	760705	761019	沢、山口他	38		
7619	板付遺跡	19	505号地	路線踏査	公	共	博多	板付2丁目	761009	761200	山崎、山口他	48		
7713	板付遺跡	20	F-5-a	専任建設施設	博	博多	板付2丁目	80	770500	770600	山崎、沢	49		
7714	板付遺跡	21	F-7-a	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	110	771124	771209	山崎、西川	49		
7715	板付遺跡	22	F-5-b	専任建設施設	博	博多	板付2丁目	100	771109	780400	山崎、沢	49		
7716	板付遺跡	23	F-8-b	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	110	771109	771200	山崎、沢	49		
7717	板付遺跡	24	F-9-a	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	6	771200	771200	山崎、沢	49		
7837	板付遺跡	25	F-5-c	専任建設施設	博	博多	板付2丁目	160	780409	780409	山崎、沢	49		
7838	板付遺跡	26	F-7-b	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	165	780500	780500	山崎、沢	49		
7839	板付遺跡	27	F-6-a	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	340	780406	780915	山崎、沢	49		
7840	板付遺跡	28	F-6-b	専任建設施設	博	博多	板付2丁目	200	780705	780705	山崎、沢	49		
7841	板付遺跡	29	E-9-b	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	80	780400	780500	山崎、沢	49		
7842	板付遺跡	30	G-7-a	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	60	780406	780900	山崎、沢	49		
7843	板付遺跡	31	G-7-b	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	520	780500	780600	山崎、沢	49		
7844	板付遺跡	32	F-7-c	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	230	784009	780409	山崎、沢	49		
7845	板付遺跡	33	F-7-d	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	50	780700	780700	山崎、沢	49		
7846	板付遺跡	34	E-S-6	民間施設	公	共	博多	板付2丁目	910	790709	791104	山崎、村田	73	
7847	板付遺跡	35	G-5-b	専任建設施設	博	博多	板付2丁目	30	800210	800217	横山	65		
8136	板付遺跡	36	E-5-b	専任建設施設	博	博多	板付2丁目	450	8-E-16	810416	鶴沢、二宮	83		
8137	板付遺跡	37	E-5-c	公民館建設施設	博	博多	板付2丁目	50	810422	810500	鶴沢、二宮	83		
8139	板付遺跡	38	G-8-a	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	50	810526	810530	横山	83		
8140	板付遺跡	39	D-7-a	宅地造成	民	民	博多	板付5丁目	480	810805	810913	鶴沢、二宮	83	
8223	板付遺跡	40	F-7-e	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	116	820601	820618	鶴沢、山崎	98		
8437	板付遺跡	41	G-7-d	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	370	840724	840806	鶴沢、村山	115		
8438	板付遺跡	42	F-7-f	専任建設施設	博	博多	板付5丁目	255	840809	840917	鶴沢、村山	115		
8439	板付遺跡	43	E-7-a	下水理設	公	共	博多	板付5丁目	80	840914	840922	鶴沢、村山	135	
8440	板付遺跡	44	F-5-d	下水理設	公	共	博多	板付2丁目	120	841027	850131	鶴沢、村山	135	
8531	板付遺跡	45	G-Gb-5	下水理設	公	共	博多	板付2丁目	135	850708	850812	小畠	135	
8542	板付遺跡	46	F-5-e	下水理設	公	共	博多	板付2丁目	122	850817	851023	小畠	135	
8607	板付遺跡	47	H-8-g	専任建設施設	博	博多	板付5丁目2-2	227	860519	860507	吉野			
8614	板付遺跡	48	F-8-f	専任建設施設	博	博多	板付2丁目12-1	56	860624	860729	山口、吉野			
8624	板付遺跡	49	下水理設	下水理設	公	共	博多	板付2丁目8内	140	860728	861011	横山	171	
8654	板付遺跡	50	E-8		博多	板付5丁目2-3	83	870117	870179	山口、吉野				
8661	板付遺跡	51	F-8-f		博多	板付5丁目7-1	5	880806		杉山				
8711	板付遺跡	52			博多	板付4丁目4-4	200	870612	870622	山口、吉野				
8737	板付遺跡	53			道路建設	公	博多	板付2丁目10-	129	871109	871112	川口、東牧	206	
8866	板付遺跡	54	F-5-5	確認調査	市	東	博多	板付2丁目5-2	9300	881201	890331	山崎・吉野	410	
8901	板付遺跡	55	F-5-i	専任住宅	博	博多	板付2丁目12-	163	890408	890422	山口・瀬波	362		
8907	板付遺跡	56	F-8-9	共同住宅	民	連	博多	板付4丁目9-2	729	890417	890610	山口・瀬波		
8999	板付遺跡	57	F-5-6	確認調査	市	東	博多	板付2丁目	9,360	890817	891228	二宮・瀬波	410	
9050	板付遺跡	58	G-4-5	確認調査	市	東	博多	板付2丁目9	800	901105		二宮北司	410	
9051	板付遺跡	59	E-6-c	確認調査	市	東	博多	板付5丁目5-2	100	901201		二宮北司	410	
9052	板付遺跡	60	G-4-b	確認調査	市	東	博多	板付2丁目7-1	80	901214		二宮北司	410	
9141	板付遺跡	61	E-8	確認調査	市	東	博多	板付5丁目7-6	750	911104	920331	力式卓治	410	
9226	板付遺跡	62	E-8	史跡整備	市	東	博多	板付5丁目7-6	200	920401	920601	力式卓治	410	
9330	板付遺跡	63	F-8	確認調査	市	東	博多	板付5丁目2-1	81	930510	930531	力式卓治	410	
9400	板付遺跡	64	E-8	確認調査	市	東	博多	板付2・3丁目	120	930601	930730	力式卓治	410	
		65							940601	940731	白井也			

## 第2篇

### 第54・59次調査



## 本文目次

第1章 第54、59次調査 .....	1
1. 調査経過 .....	1
2. 調査体制 .....	1
第2章 調査区の概要 .....	2
第3章 遺構と遺物の概要 .....	4
1. 環濠の調査 .....	4
2. 住居跡の調査 .....	10
3. 壺棺墓の調査 .....	13
4. 小銅鐸の調査 .....	17
第4章 まとめにかえて .....	20

## 挿図目次

Fig. 1 調査区遺構全体図 .....	3
Fig. 2 板付遺跡環濠全景と各部写真 ①全景 ②環濠内側 ③環濠北側発掘区 ④環濠出入口 ⑤環濠断面 ⑥環濠内の貝層 ⑦環濠遺物出土状況 .....	5
Fig. 3 環濠断面実測図 .....	6
Fig. 4 環濠出土遺物実測図 I (土器) .....	7
Fig. 5 環濠出土遺物実測図 II (土器) .....	8
Fig. 6 環濠出土遺物実測図 III (石器) .....	9
Fig. 7 住居跡実測図 .....	11
Fig. 8 住居跡出土遺物実測図 .....	12
Fig. 9 小兒壺棺墓分布図 .....	14
Fig.10 小兒壺棺墓全景 (西より) .....	14
Fig.11 小兒壺棺墓実測図 .....	15
Fig.12 小兒壺棺墓と副葬遺物出土状況 .....	16
Fig.13 小兒壺棺墓実測図 .....	16
Fig.14 小兒壺棺墓副葬品実測図 .....	17
Fig.15 小銅鐸出土状況実測図 .....	18
Fig.16 小銅鐸出土状況 .....	18
Fig.17 小銅鐸実測図 .....	19

## 第1章 第54、59次調査

### 1. 調査の経過

板付遺跡は福岡市博多区板付2丁目から5丁目にかけて広がる大規模な弥生時代遺跡である。江戸時代の終り頃、遺跡の中央に位置する通津寺境内から広形銅矛5口が、大正時代には、通津寺の東に存在した墳丘墓らしい高まりから前期末に属する甕棺群が発見され、数基の甕棺から細形銅劍、細形銅矛各3口が出土し、遺跡の重要性は古くから認識されていた。昭和26年から開始された日本考古学協会、明治大学、九州大学を中心とする発掘調査は、縄文時代から弥生時代への移行過程の問題を解明するのを意図したものであった。その成果は、日本歴史の中で重要な位置を占めるものであった。集落を溝で囲む最古の環濠集落が明らかにされ、大陸系磨製石器や最古の弥生式土器、炭化米等の遺物は最古の農村の姿をうかびあがらせた。以後、しばらくは調査が実施されなかつたが、昭和40年代後半から始まる開発ラッシュは、板付遺跡周辺にも迫ってきて、その対応は福岡市教育委員会が主体となって進めてきた。福岡市教育委員会の調査は遺跡の中心で環濠集落の位置する台地西側の広大な水田地帯に建設された板付団地に伴う調査をはじめとして、いずれも宅地造成に伴う緊急調査であった。しかし、その成果は重要で、台地西側の沖積地では弥生時代の全期間を通しての水田地が確認され、多量の木製農耕具をはじめとする木製品が出土し、弥生時代開始期の姿を如実に示すものであった。また、遺跡の範囲がさらに拡張することも確認され、遺跡の重要性は増々高まることとなった。

昭和51年6月21日には、日本歴史の解明に欠くことのできない重要な遺跡として、遺跡の中心部27796m<sup>2</sup>が国の史跡として指定された。

昭和48年度から始められた遺跡中心域の公有化は、長期にわたる移転交渉を経て、ようやく昭和61年度に終了した。史跡指定地内の公有化終了後は、地元や市民からの早期整備が強く要望され、教育委員会文化課管理係でも、それに答えるべく整備案の策定、整備に先立つ指定地内の遺跡確認調査の具体化を計るための予算化を怠いだ。昭和63年度から整備に先立つ遺構確認調査が認められ、昭和63、64年度は指定地内の調査を実施することとなった。

### 2. 調査体制

文化課から遺構確認調査の依頼を受けた埋蔵文化財課では、増加の一途にある緊急調査で調査人員の確保に苦慮したが、史跡関連の上から関係の深い鴻臚館跡調査担当が、これにあたることとなつた。鴻臚館跡調査担当では、鴻臚館跡調査終了の12月から板付遺跡の遺構確認調査に着手したが、翌年度は鴻臚館、板付の両遺跡を同時に調査することになった。ただし、6月以降は文化課が文化財整備課として組織変更になり、新たに史跡整備担当主査が設置され、調査も同主査に引継すことになった。調査体制は以下の如くである。

調査地区 福岡市博多区板付二丁目、(史跡指定地内)

調査期間 第54次調査 1988年12月1月～1989年3月31日

第59次調査 1989年4月10日～10月31日

調査主査 福岡市教育委員会文化部文化課 教育長 佐藤善郎 教育次長 尾花剛

文化部長 川崎賢次 文化課長 於保清登 管理係長 岩下拓二

庶務：会計 管理係長 岩下拓二 緒方裕之

調査担当 第54次調査 山崎純男（主査） 吉武学（鴻臚館跡調査担当）

第59次調査 山崎純男 吉武学 二宮忠司（史跡整備担当主査）浜石哲也 普波正人

調査補助員 川端正夫（現・甘木市教育委員会）白木英敏（現・宗像市教育委員会）

## 第2章 調査区の概要

調査は指定地の丘陵部、すなわち、弥生時代の集落を対象として実施した。指定地内の中心部に存在した通津寺は江戸時代より続いた寺であり、境内のはほとんどが墓地として利用され、加えて寺の移転に伴い墓の改葬がおこなわれたため、遺構の残存状態が極めて悪いことが予想できた。よって、最初に指定地全域に試掘トレーナーを入れ、遺構の残存状況を確認した。予想どおり境内には遺構の残存は皆無であり、その周辺には遺構が密に分布していることがわかった。試掘の結果、境内に掘削土を置き、他を全面めくり、遺構検出する方針で調査を進めることとした。

検出した遺構は各時期におよんでいる。弥生時代の遺構は環濠、竪穴住居跡、貯蔵穴、井戸、甕棺墓、柱穴等がある。古墳時代から中世にかけては溝（方形に区画される。）土壙等の遺構が確認され、板付の台地上における長い間の継続した人類の歴史を如実に示している。調査の主目的は史跡地内の遺構確認のために、遺構の発掘調査は最小限、必要な部分にとどめた。

Fig. 1は史跡地内全域の表土層除去後の確認遺構全体図である。中央部に環濠が存在する。環濠は日本考古学協会を中心とする調査で確認された形状、規模に変化はないが、濠幅等の細部に若干の差異がある。今回の調査で特記されることは、環濠の南西部において出入口が確認できた。位置はかっての通津寺の前を通る里道と環濠の交点部分である。環濠の北西部には弦状濠と環濠によってつくり出された三日月形の区画が存在する。この区画内で検出される遺構は貯蔵穴のみである。貯蔵穴を区画した特別の地区とみることができる。この区画を除いた環濠内は先述したように墓地として永年にわたって利用されていたために、弥生時代の遺構は数ヶ所の貯蔵穴とあって、福岡市教育委員会の調査によって検出されていた前期後半の竪穴住居跡一棟が存在するにすぎない。環濠外では、環濠南側に貯蔵穴の一群が存在する。この一群は史跡南を走る県道、さらに南の宅地に拡がり、現在まで57基以上の貯蔵穴が確認されている。この地域の貯蔵穴は切り合い関係がなく、一定の間隔をもって分布していることは、切り合い関係の著しい区画内の貯蔵穴とは異なった用途を考えることができる。住居跡は、史跡の北側、東西の台地端の斜面部分に認めることができる。東斜面では円形住居跡1、長方形住居跡6以上、西斜面では円形住居跡3、長方形住居跡9以上が残存する。いずれも削平が少ない斜面に残ったと見られ、削平の著しい台地中央部には住居跡等の浅い遺構は残存していないが、かつては台地全面に拡がっていたとみられる。ただし、これらの住居跡は、いずれも中・後期の所産であり、中央部の環濠とは直接の関係はない。これらの住居跡が形成される頃は、環濠は完全に埋っていたとみられる。ここで注意されるのが、日本考古学協会の調査で確認されていた中期後半のT字形の溝である。この溝は約45mの地点でさらに北側に曲り、コ字形をなすことを確認したが、北側は削平によって消滅している。長方形ないしは方形に区画していた溝の可能性が強い。史跡地内には墓地の形成は顕著でないが、環濠北側に近く7基の前期の小児甕棺墓を確認した。4基に副葬遺物が認められ特別な墓とみることができる。史跡北端部に小児墓地の一端を検出したが、主体部は史跡の北側である。東側で金海式甕棺一基が確認されたが、詳細は不明である。

確認した遺構で、発掘調査を実施したのは整備に必要な資料を得るためにと、これまで未解決の問題

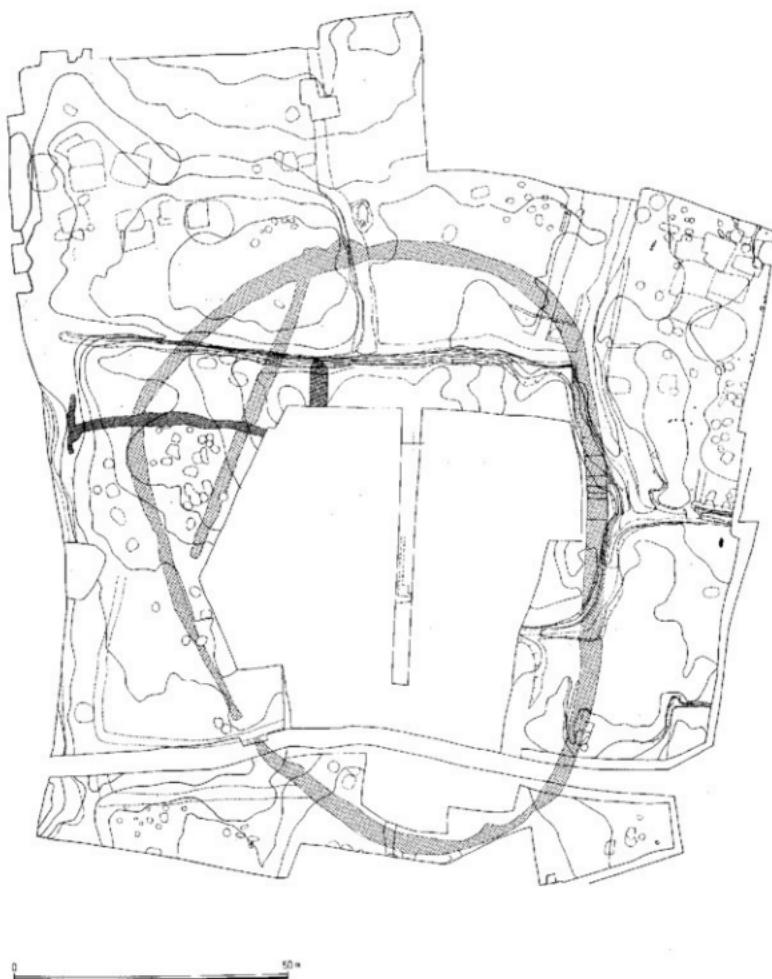


Fig. 1 調査区遺構全図

点を明らかにできそうな遺構を対象とした。一つは環濠の一部であり、他は環濠に隣接した小児墓館墓と円形住居跡とそれと切り合う長方形住居跡である。環濠の調査では、その埋土の状況から土壘の存在が推測できる成果を得ると共に、弥生時代初頭の土器編年で新知見を得ることができた。また、小児墓館墓の調査では、前期前半の埋葬の実態を解明することができ、さらに4基に副葬遺物を検出し、板付遺跡の中で、小児墓地のそれぞれに差があることが判明した。住居跡の調査では円形、長方形に時期差を認め、円形住居跡の柱穴内から埋納された勾玉、石磨丁を検出し、室内祭祀の一端を明らかにすことができた。長方形住居跡では、住居が埋った後、小銅鐸を埋納した遺構を検出した。埋納時期を明確にできたことも大きな成果である。

### 第3章 遺構と遺物の概要

#### 1. 環濠の調査

環濠の調査は、遺跡復原資料収集と弥生時代前期の土器編年を再確認を目的として実施した。環濠の平面形は前述したように日本考古学協会で確認した事実と大差ない。内径で南北径が110m。同様に東西径80mを測る卵形をなすが、東西の最大径は北に片寄っている。環濠への出入口は一ヶ所で南西部に開口している。位置的には通津寺の前を東西に走る里道と環濠の交点部分にあたる。出入口の延長線上には板付I式段階に水路に井堰が設置され、その上部は橋となって水田と集落を結ぶ通路となっていたと思われる。出入口部の幅は5m、環濠の切れる部分は垂直にたちあがる。濠幅は場所によって大きく異なる。これは、削平の度合いによるものと考えられる。環濠周辺に遺存する貯藏穴の状態からみれば、少なくとも1~2mの削平が考えられる。濠の断面の基本形はいずれもV字形を呈しているが、所によってその形体に差異がある。Fig.3の断面実測図はその事実を良く示している。濠幅0.8~3.0m、深さ0.6~2.2mを測るが、実際は濠幅4~6m、深さ2~4mとなり、その規模がかなりのものであったと推測することができる。濠内に埋める埋土の状態はFig.3に示すように、場所によって異なるが、基本的には黒色の有機質粘土層の流れ込みによるレンズ状堆積と濠の掘削によって生じた鳥栖ローム、八女粘土層のブロック層や流れ込み層の互層からなっている。有機質土層は生活によって生じた廐棄物に起因する土層と考えられ、部分的に存在する貝層には、通常、キセル貝等の陸産貝類が寄生するが、今回は一点も検出することができなかったので、濠内は當時、溝水状態であったと推測される。ローム上の堆積土は、濠に沿ってめぐらされた土壠の崩壊・流れ込みとみられる。環濠部分では濠の両側から、弦状濠では西側区画部分の一方からの流れ込みによる堆積である。よって、環濠部では両側に、弦状濠では西側の一側に土塊が築かれていた可能性が強いと推測される。

濠内からは多量の遺物が出土する。土器・石器・装飾品等の人工遺物と貝類・獸骨・炭化物（炭化米などの植物遺体）等の自然遺物がある。いずれも、平面・レベルを記録し、層位的に取り上げているが、量が多く、現在観察整理中であり、詳細は再報告する予定である。ただ、結論的に言えば、下層に古いタイプの遺物が多く、漸次、上層にいくに従い新しいタイプに移る標準的な傾向を示している。濠の掘り直し等はみられず、層位の逆転はない。代表的な遺物を図示した。

土器には壺・甕・高杯・鉢等が基本器形であるが、Fig.5~6・7のような特異な器形も存在する。濠内の遺物はいずれも前期のものばかりによって占められている。壺は小型・中型・大型の三種がある。Fig.4-1~4は板付I式土器、5~7は板付II式土器と從来認識されていたが、層位やセット関係では若干の問題点があるようであり、今後の検討が必要である。1・2は彩文土器。いずれも

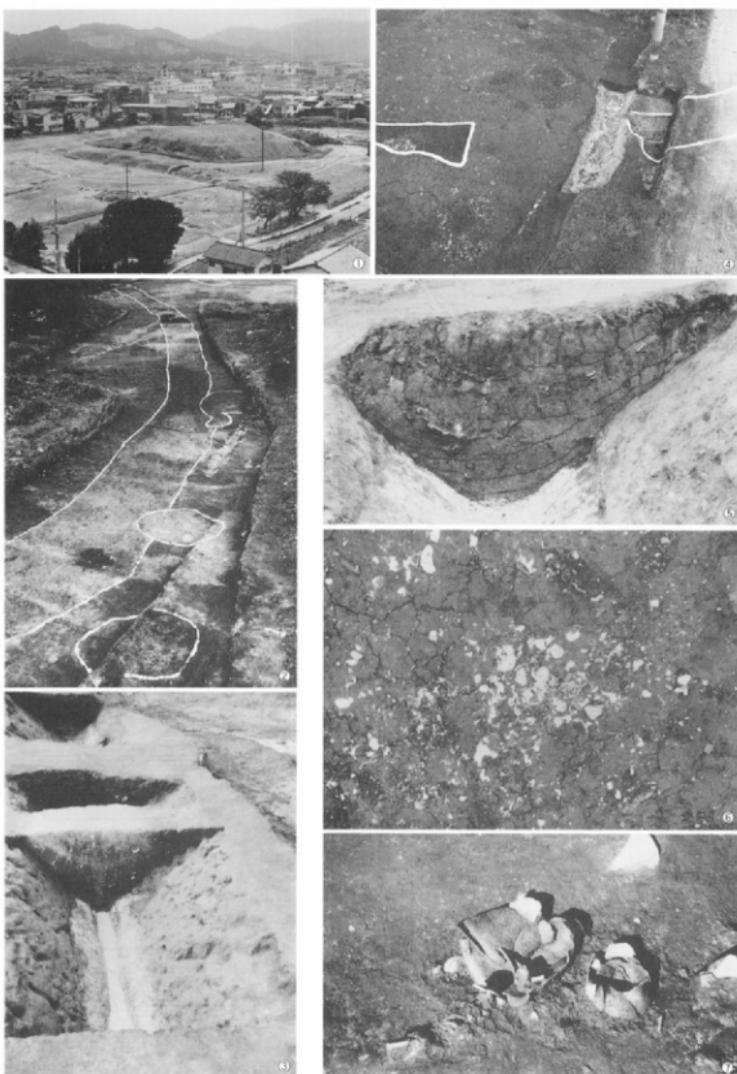


Fig. 2 板付道路環塗全景と各部写真 ①全景 ②環塗内側 ③環塗北側発掘区  
④環塗出入口 ⑤環塗断面 ⑥環塗内の貝屑 ⑦環塗遺物出土状況

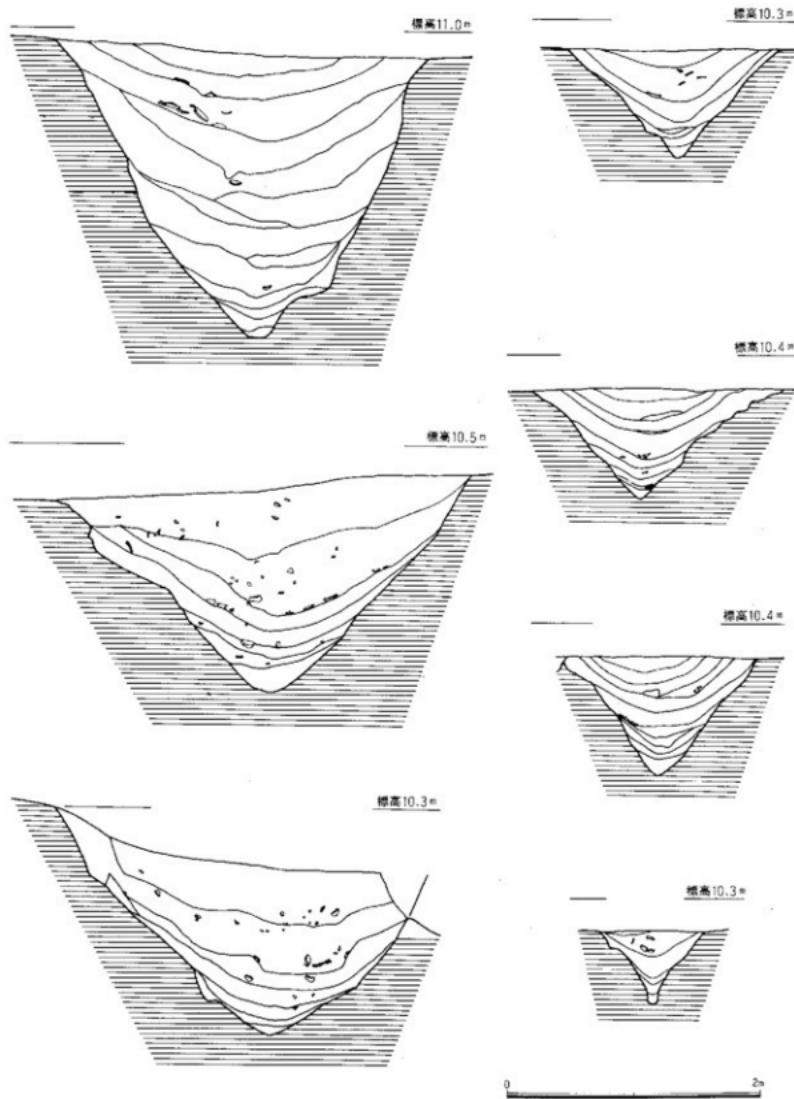


Fig. 3 環濠断面実測図

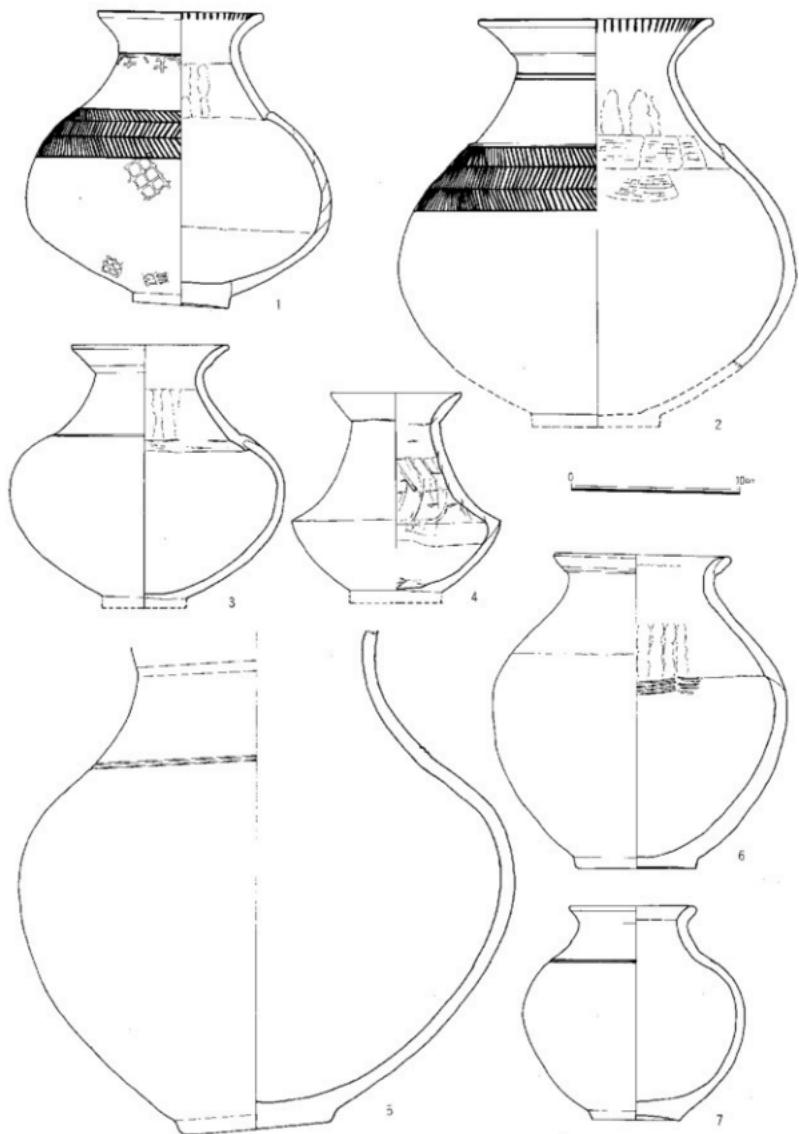


Fig. 4 環漆出土遺物実測図 I (上器)

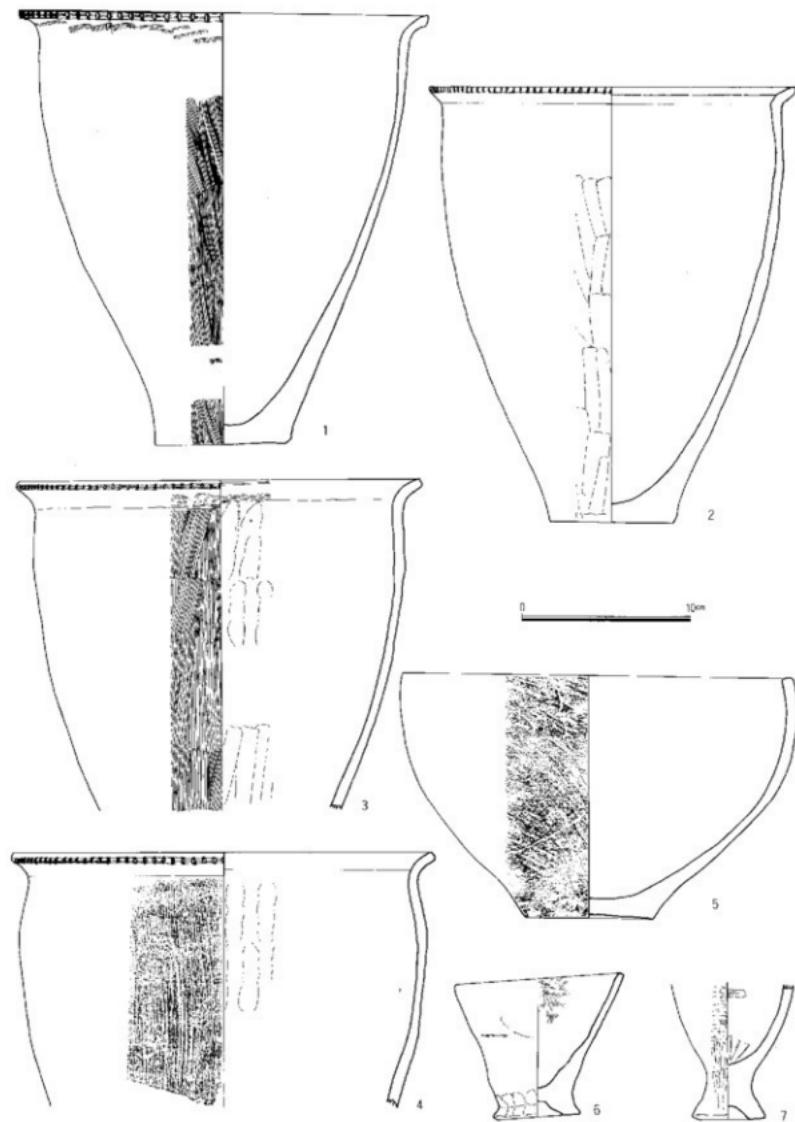


Fig. 5 環濠出土遺物実測図II (土器)

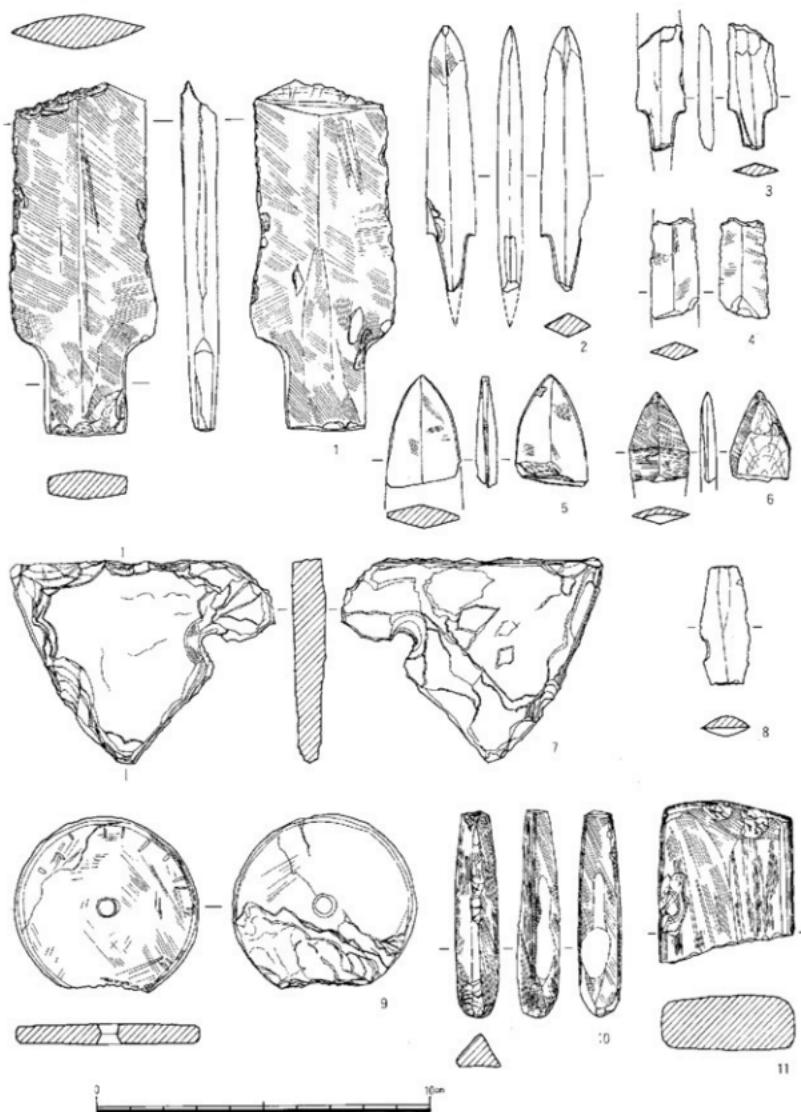


Fig. 6 環濠出土遺物実測図III (石器)

黒色顔料を全面に塗布し、赤色顔料の細線で有袖羽状文を描いている最も多いタイプの彩文である。1には頸部と胴部に縦カゴのスタンプが残っており、懸けて使用されたとみられ、特殊な用途が推測される。4も類例の少ない器形であるが、確実にセットとして存在する。變形土器は一種類のみを図示した。この器形が主体を占め、他は極めて少ない。1・2は刷が張らず、口縁部は如意形に外反し、口縁端部の刻みは端部いっぱいに施される。従来の板付I式土器である。3・4は口縁端部の刻みが下端部に片寄る所謂板付II式土器であるが、3のように胴の張りの少ないものと4のように胴の張りが強いものの二者があり、形体的にも壺同様に再検討の必要性を感じている。5は鉢である。新しい器種で、以前の鉢から系譜を引くものではない。壺胴部を最大径の部分で切り取ったような器形を呈している。

石器には磨製石斧、石庖丁、紡錘車、磨製石劍、磨製石鎌、打製石鎌、穿孔具、砥石等の縄文時代以来の石器といわゆる大陸系磨製石器があるが、量的には、はるかに大陸系磨製石器が優越している。Fig. 6に図示したのは出土石器の一部である。1は磨製石劍、2～6・8は磨製石鎌、2は先端部が研ぎ歯によってかなり短くなっている。5は刃部がつぶされていて、未製品、石劍か石鎌であろう。7は石包丁未製品（失敗品）。打製によって形を整え、敲打によって穿孔途中である。環濠内からはかなりの数の石包丁の失敗品が出土している。頁岩を利用、9は片岩製の紡錘車、前期には土製品を含めて紡錘車が多いことが注目される。10・11は砥石である。

## 2. 住居跡の調査

板付遺跡の台地上で検出されている竪穴住居跡は極めて少なく、その実態も明らかでない。今回は環濠北側に位置する住居跡を調査し、時期や構造の把握につとめた。

調査当初は円形の竪穴住居跡一基を見ていたが、精査の結果は円形住居跡と長方形住居跡が切り合っていることがわかった。切り合い関係は長方形住居跡が円形住居跡を切っている。

### 円形の竪穴住居跡 (Fig. 7-1)

住居跡の北西部の大半を長方形住居跡に切られているが、全形を推測するのは容易である。住居跡は東西径約8.7m、南北径8.8mのほぼ円形。壁の高さは約27cmで、板付遺跡の中では比較的遺存状態は良い。削平を考慮すれば壁はかなりの高さになるとみられる。壁に沿って幅10cm、深さ5cm前後の壁溝が認められるが部分的に存在しない所もある。炉跡は住居跡中央部に存在したものと考えられるか、長方形住居跡及び近世の擾乱によって完全に失われている。一般的には中央部に方形の灰穴が掘り込まれる住居形態である。主柱穴は9～10本が円形にめぐるものと推測されるが、主柱穴の切り合い関係が顕著であり、数回の延び替えが行われたとみられる。この住居跡で注目されるのは規模が大きいこともその一つであるが、主柱穴の二ヶ所に埋納遺物が存在したことである。1ヶ所の柱穴には翡翠製の勾玉、他の1ヶ所の柱穴には立岩産の石包丁完形品各1個が存在した。住居跡の構築時における祭祀行為とみることができよう。

出土遺物は原位置を保つものは上記した2点のみである。他はいずれも住居跡埋土中からの出土である。土器、石器がある。土器はFig. 8-1～6がこの住居跡出土の土器である。いずれも中期後半の時期を示している。1は甕棺破片、2・6は高坏坏部で、両者共に丹塗り磨研の土器である。3～5は甕の破片である。石器には扁平片刃石斧1点と立岩産の石包丁破片1点がある。

### 長方形の竪穴住居跡 (Fig. 7-2)

住居跡の中央部から東半部が近世の擾乱によって失われているが、ほぼ全形を知ることができる。住居跡は長軸方向をほぼ北西にとっている。長軸径6.4m、短軸径4.7mの長方形プランをとる。壁の遺

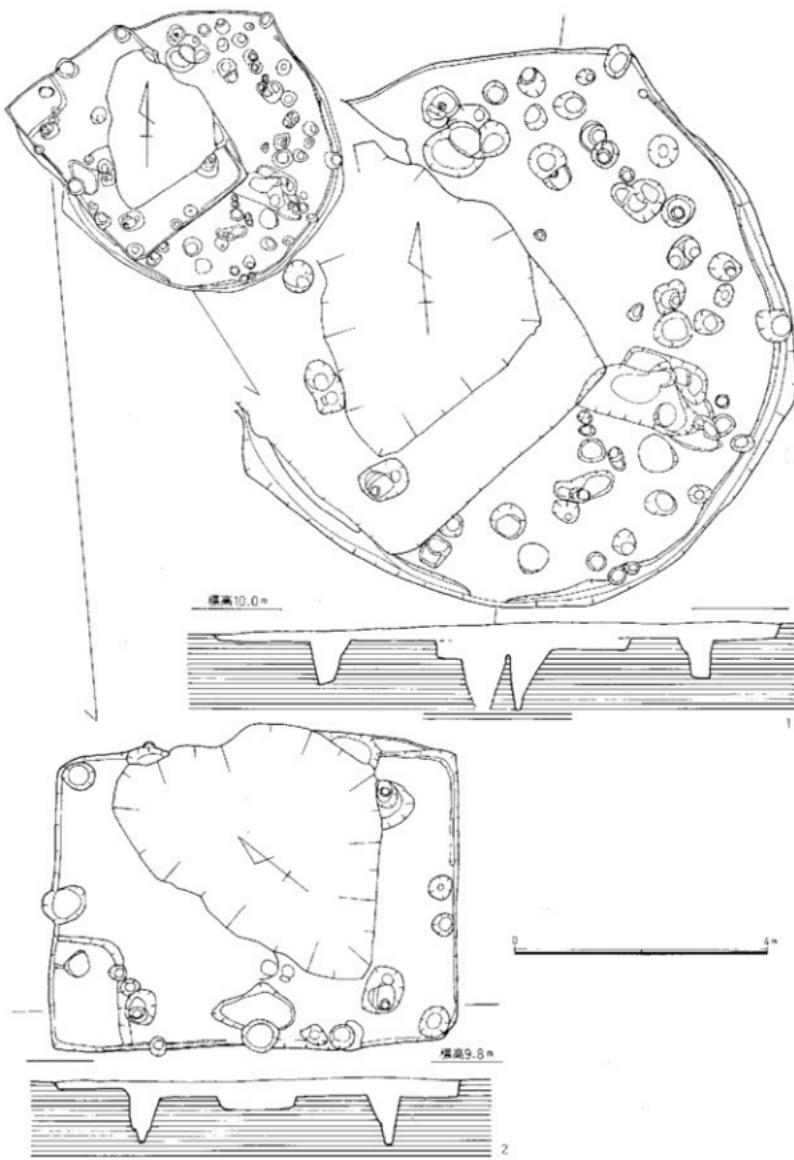


Fig. 7 住居跡実測図

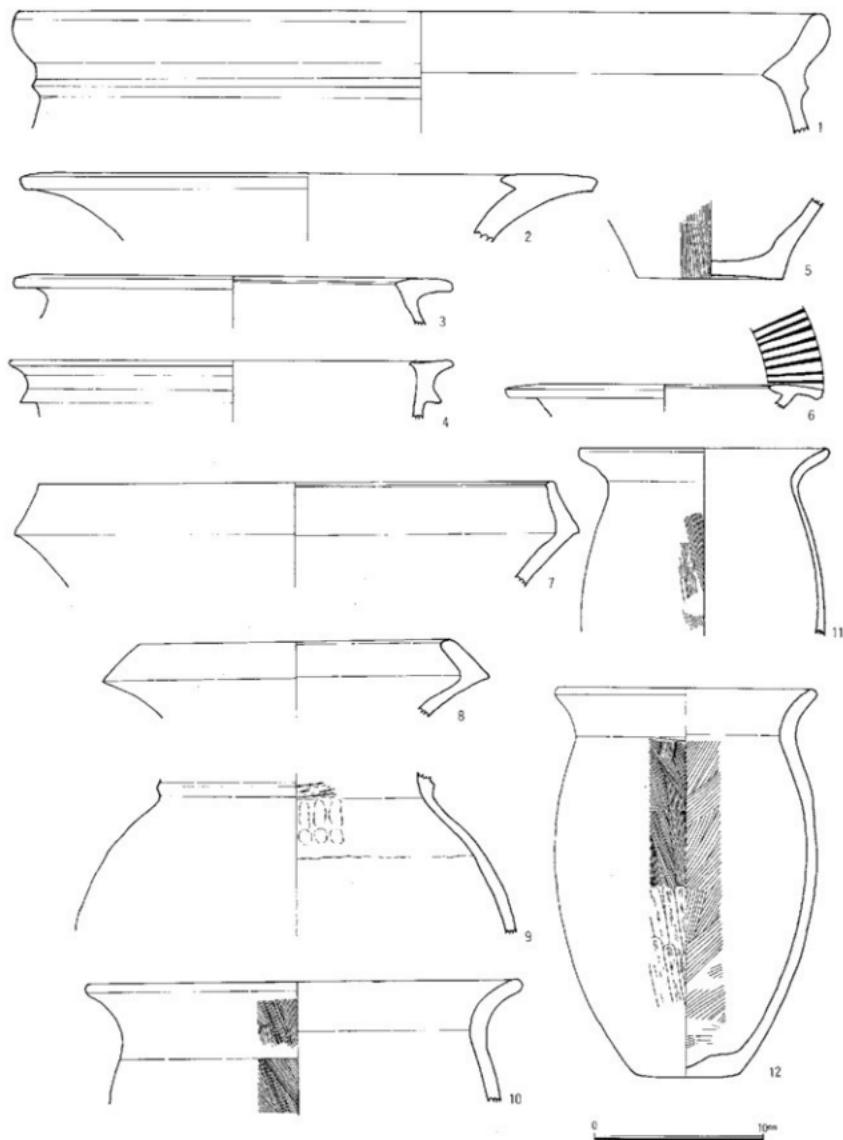


Fig. 8 住居跡出土遺物実測図

存高は26cm前後、床面は円形住居跡より深いので、削平を考慮すれば、壁高はかなりの高さは達するともいられる。壁に沿って幅6cm前後、深さ4cm前後の浅い壁溝がめぐるが部分的である。北西コーナーから北壁に沿って幅110cm、長さ1.7m、高さ10cm前後のベット状遺構が存在する。炉跡は床面中央に位置していたと考えられるが、近世擾乱によって失われている。主柱穴は四か所であるが、1か所が炉同様に近世擾乱によって失われている。また、南壁中央部に2か所、北壁中央部に1か所、棟持ち柱と考えられる柱穴がある。西壁に沿ってもほぼ等間隔で4か所に柱穴が並んでいるが、東壁が破壊されているため明らかにできない。北側の棟持ち柱と考えられる柱穴には、円形住居跡と同様に、ほぼ完形に近い甕形土器(Fig.8-12)1個とガラス小玉2個が埋納されていた。これも円形住居跡と同様の祭祀行為がなされたものと考えている。

出土遺物は柱穴出土の遺物を除いて原位置を保つものではなく、いずれも住居跡埋土の出上である。土器が大部分で、他に前述したガラス玉があるにすぎない。出土土器の一部はFig.8-7-12に示した。いずれも後期後半～終末に近い土器の一群である。遺存状態が悪く、表面が荒れている。7～9は壺、9は頸部に三角突帯をめぐらしている。10～12は壺、長胴で口縁部はくの字形に外反する。

### 3. 甕棺墓の調査

今回調査した甕棺墓は、小児甕棺墓7基からなる一群である。環濠と弦状塗が交わる地点の環濠より5m離れた地点に円弧を描くように7mの範囲に分布している。(Fig.9) いずれの甕棺墓も削平が著しく、下壺の一部を残すのみまでになっているので、群の南側に、さらに複数の甕棺墓が存在した可能性が強いが、その数は現存する甕棺墓の数を越えるものではなかろう。最も低い斜面側の甕棺墓が残ったものであろうか。小範囲に密集する点や現存する地山の等高線がこの部分を意識したように張り出す点、また、後述するように、小児甕墓でありながら副葬遺物が集中して見られること、隣接して存在する中期、後期の住居跡が比較的の遺存状態が良いにもかかわらず、甕棺墓の遺存状態が極めて悪いこと等からみて、低い墳丘をもった径10m前後の墳丘墓であった可能性は否定できない。本報告において詳細な検討を加えてみたいと思う。以下、各甕棺の概略をみていく。

第1号甕棺(Fig.11-1) 最も東に検出した甕棺墓である。2号甕棺と約40cm離れている。下壺(壺)の一部が残るのみである。蓋があったと思われるが明らかでない。

第2号甕棺墓(Fig.11-7) 第1、3号甕棺墓の間に検出した。第3号甕棺墓とは約25cm離れている。下壺(壺)の一部を残すのみである。壺を斜面に安置した状態が観察できる。蓋は明らかでない。

第3号甕棺墓(Fig.11-2) 第2・4号甕棺の間に検出した。第4号甕棺墓とは約40cm離れている。墓壙はやや不整形であるが、検出した甕棺墓の中では最も大きい。合せ口の甕棺で上・下壺共に壺を利用しているが、他の甕棺同様に下半部がわずかに残る程度である。墓壙中よりFig.14-2に示した小壺の底部が出土している。上半の大部分を失っているが副葬小壺であることは疑いない。底部はあげ底状の平底。外面は全面が丹塗りされている。

第4号甕棺墓(Fig.11-4) 第3・6号甕棺墓の間に検出した。第6号甕棺墓と約70cm離れている。下壺に壺、上壺に鉢を利用した合せ口の甕棺墓である。内部より碧玉製管玉1個(Fig.14-6)を検出した。管玉はや、黒ずんだ良質の碧玉を利用、長さ0.9cm、径0.4cm、体中央に傷がある。穿孔は両側からなされたものである。

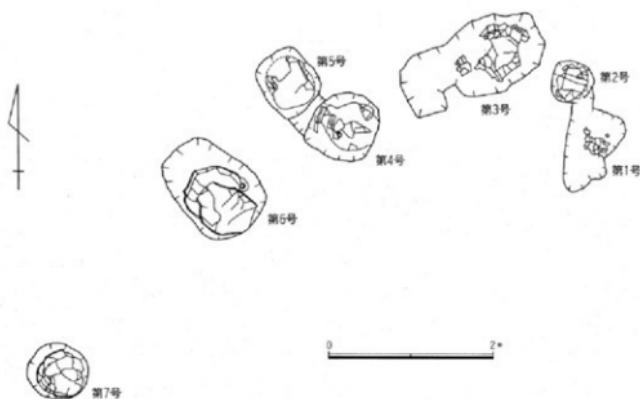


Fig. 9 小児壺棺墓分布図



Fig.10 小児壺棺墓全景（西より）

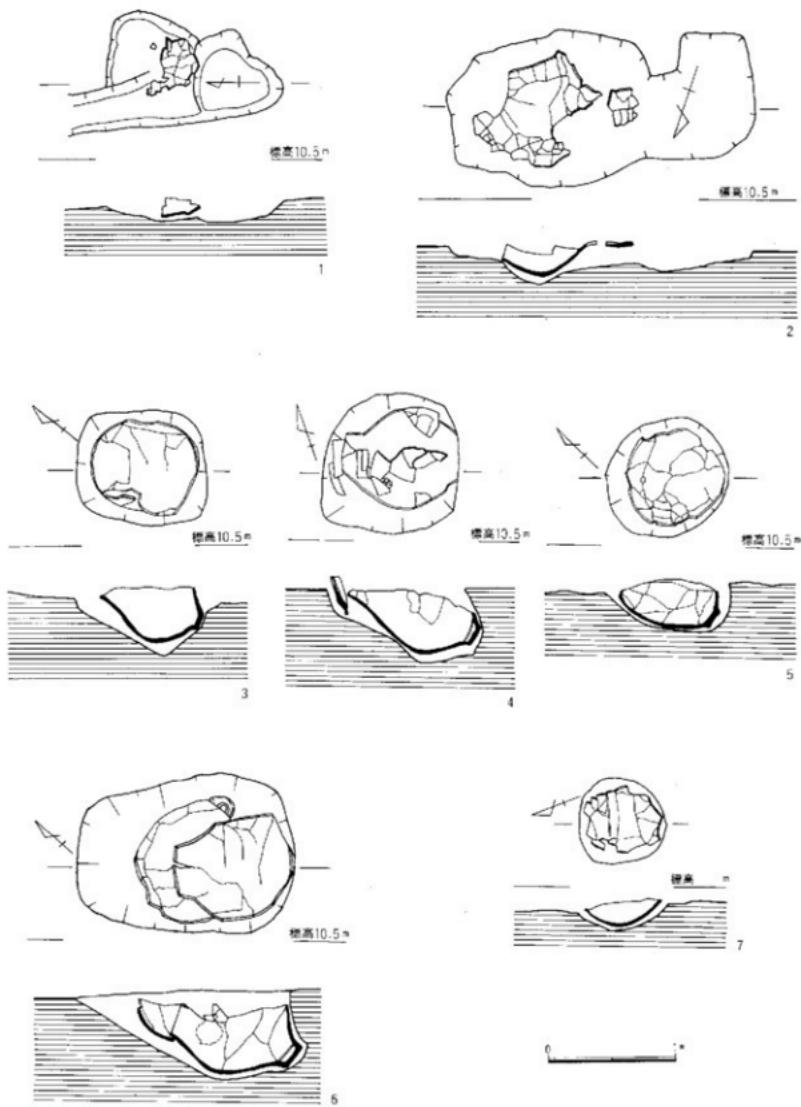


Fig.11 小児癒棺墓実測図

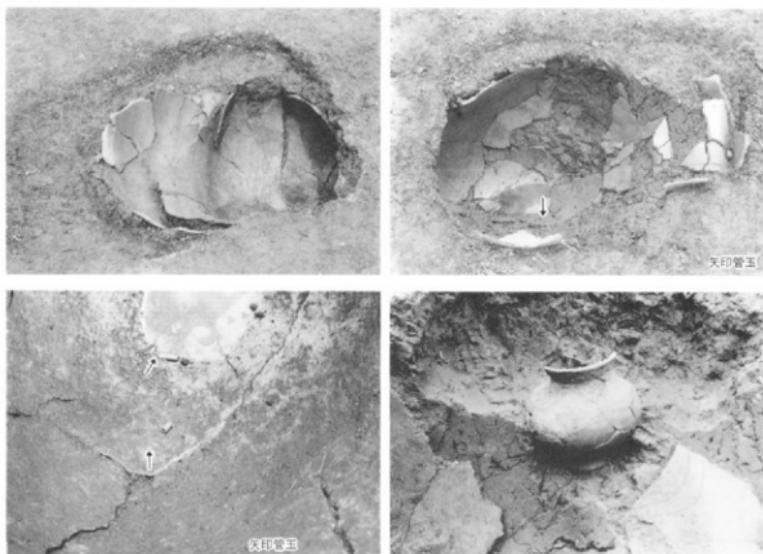


Fig.12 小兒斐棺墓と副葬遺物出土状況

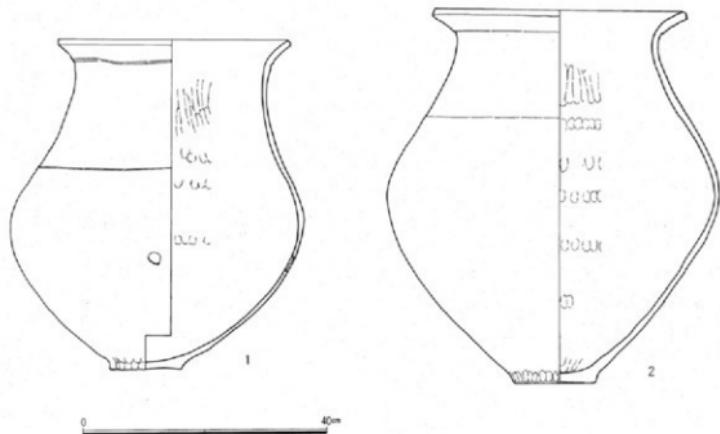


Fig.13 小兒斐棺実測図

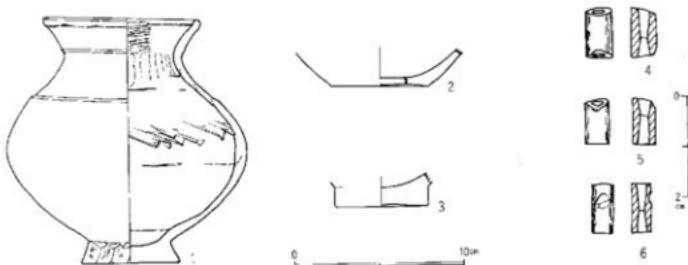


Fig.14 小兒斐棺墓副葬品実測図

第5号斐棺墓 (Fig.11-3) 第4号斐棺墓の北に約10cm離れて検出された斐棺墓である。合せ口の斐棺で、上・下斐共に壺が利用されているが、上斐はほとんど遺存しない。内部より碧玉製管玉2個 (Fig.14-4・5) を検出した。管玉は緑色の良質の碧玉を利用している。4は両端部が斜に切られる。長さ1.0cm、径0.5cm、石材にや、異物が混じる。5は一端が斜位に整形される。長さ0.9cm、径0.5cm、穿孔は共に両側からおこなわれている。

第6号斐棺墓 (Fig.11-6) 最も残存状態の良好な斐棺墓である。第4・5号斐棺と第7号斐棺墓の間に検出した。第7号斐棺墓とは約2.1m離れている。上・下斐共に壺を利用したもので、上斐は壺の胴上半部を打欠いたものを利用している。棺外東側に原位置を保って副葬小壺1個 (Fig.14-1) と同様の副葬小壺の底部1個 (Fig.14-3) が原位置を移動して検出されている。3は底部のみで上半を失うが、共に底部の高さが古式のものよりや、高くなっている。1は胴部と頸部の接合部の内側の段を残すが、肩部の段が整然となく、底部が高くなるなど板付I式土器より退化した型式である。環濠出土の板付I式土器との比較でも興味ある土器である。

第7号斐棺墓 (Fig.11-5) 最も西側に検出した斐棺墓で、他とはや、離れている。下斐に壺を利用しているが、蓋は明らかでない。下斐は他と同様、壺を斜位に埋置したものである。

上記の斐棺墓はいずれも前期に属する小児斐棺墓である。共に下斐には大型の壺を利用し、上斐(蓋)には第4号斐棺墓の鉢を例外として、他を壺の上半部を欠いたものを利用している。斐棺に利用された壺はFig.13に一部を示した。1は4号斐棺、2は7号斐棺の下斐である。共に前期の大型壺の特徴を良く示している。副葬小壺とのセット関係も含め、その編年的位置付けが、今後の問題となろう。

#### 4. 小銅鐸の調査

今次調査ではからずも小銅鐸の出土をみた。出土地点は、環濠北側に位置する長方形住居跡の埋土中に掘り込まれたピットの中である。小銅鐸の出土側は九州でこれまで4例が知られているが、その大部分は溝等に廃棄されたものである。しかし、本例はピット内に埋納された特異な出土例である点、注意する必要があろう。

出土状況はFig.15、16に示した。住居跡の発掘によって小銅鐸の出土を予想することができなかつたので、鍬によって小銅鐸の一部を破損したが、出土状況等はスタンプによって当初の姿に復元するこ

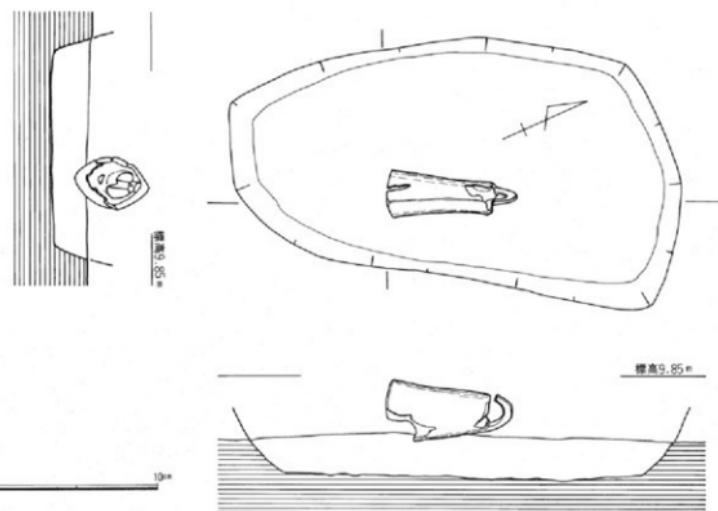


Fig.15 小銅鐸出土狀況實測圖



Fig.16 小銅鐸出土狀況

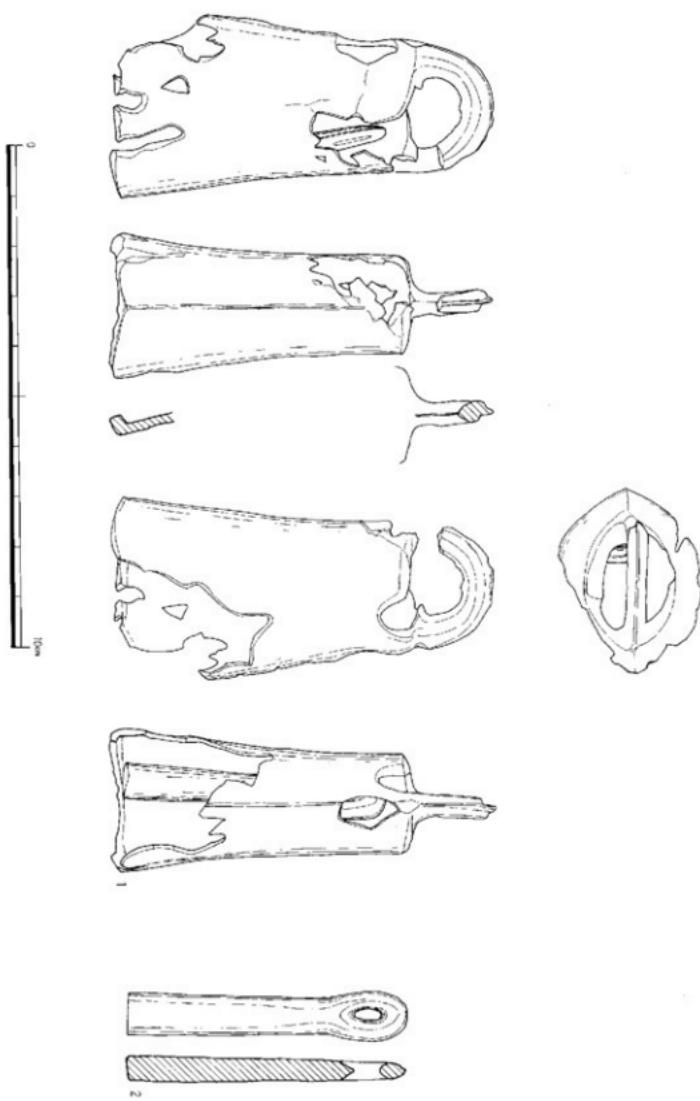


Fig.17 小銅鑄実測図

とができた。埋納壙は確認面で長軸26cm、短軸13.5cmの不整橢円形で深さは2.5cmであるが、発掘によって上部を削平したので少なくともかなりの深さがあったと推測される。埋納状況は銅鐸と同じで、鏃の部分を上下にして横たえたものである。鐸身には舌が遺存するが、横たえた状態で舌が身の上部に接するようになっているので、埋納時は身の中に土を入れ、舌を固定した後に埋納したとみることができる。

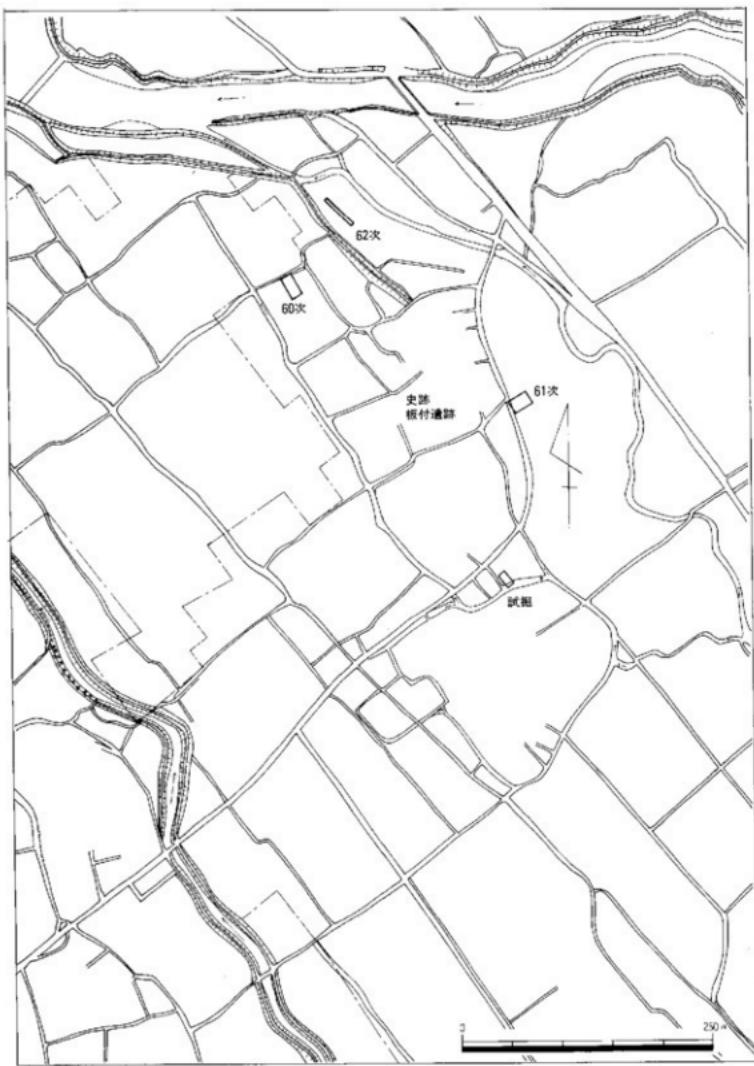
小銅鐸は完形で、鐸身に舌が収まっている。銅質は国産の銅製品同様に粗悪で、遺存状態も良好ではない。小銅鐸は高さ7.6cm（鉢高1.6cm、鐸身高6.0cm）である。身上端部長径2.6cm、同短径2.0cm、身下端部長径は復原で4.0cm前後、同短径は2.9cmを測る。舞孔は湯まわりが悪いために判然としないが一孔であった可能性が強い。鐸身下部は特に湯まわりが悪く約1/3を失う。身に型持たせの孔は見られない。製品そのものが小さいので、舞孔のみで鑄造が可能であったと考えられる。鐸自体の形はこれまで発見されている小銅鐸とは異なり、スマートで銅鐸そのものを良く知っている工人による作品とみられる。なお、鉢部分は鉢型のずれが顕著で段がついている。また下端部はL字形に内側に張り出している。銅鐸の凸線を意識したものではないと考えるが、注意を要しよう。

舌は鐸身に付着した状態のままであるので観察を充分にすることはできないが、長さ5.5cm、頭部最大幅1.0cm、くびれ部幅0.7cm、下端部最大幅0.9cm、厚さは頭部が薄く0.3cm、下端にいくに従い厚くなり0.5cmを測る。頭部には橢円形の孔がある。鋳造品で、鉢型の接合部にはわずかにバリが認められる。

## 第4章 まとめにかえて

前述したように、指定地の遺構確認調査では、当初に予想した以上の成果を得ることができた。板付遺跡は福岡平野の中にあって、最も古い弥生時代遺跡であり、かつ、中・後期に継続した拠点集落として、そのもつ意義は大きい。環濠集落出現の歴史的背景、稻作農耕の開始とその構造、弥生時代社会の成立とその展開等、板付遺跡が原点となった問題は多い。弥生式土器の成立と展開も重要な問題である。学史的にも重要な本遺跡の資料を一日も早く共通の資料とすべきであるが、出土遺物の莫大な量、それに引きかえ、日々、緊急調査に追われている毎日である。一時も早く、詳細な報告書と刊行すべく、観意、努力中であることを銘記し、おわりとしたい。

## 第3篇 板付遺跡第60・61次調査



板付周辺位置図（明治33年頃の図面を複写）（縮尺1/5,000）

## 例 言

- 本篇は1990年「史跡・板付遺跡」の外環濠確認調査報告である。
- 事業は市単独事業で文化部文化課が実施した第60次・61次調査報告である。
- 本篇の執筆・挿図・図版・編集は二宮忠司と大庭友子が行なったが、一部出崎博之（現愛媛大学）と小畠弘己が実測した。
- 本篇に関する記録・遺物類は整理後、福岡市埋文センターに収蔵・保管される。
- 押図・図版内の土器・石器・木器の番号は遺物登録番号で、9桁の内初めの4桁が調査番号、後の5桁が遺物登録番号を示す。

## 調査一覧

次数	遺跡調査番号	調査番号	調査期間	調査面積	調査地所在地
60	9050	ITZ-60	1990年11月1日～12月28日	800	博多区板付2丁目9-2
61	9051	ITZ-61	1990年12月1日～91年1月31日	100	博多区板付5丁目5-2
62	9052	ITZ-62	1990年12月14日～12月14日	80	博多区板付2丁目7-1

## 本文目次

第1章	第60～62次調査	1
第1節	調査に至る経過	1
第2節	調査の概要	1
第2章	調査の記録	3
第1節	第60次調査の記録 1. 検出構造	3
	2. 出土遺物 土器	11
	SC-01出土の土器	11
	SK出土の土器	11
	SX出土の土器	13
	SD出土の上器	13
	Pit出土の土器	13
	石器	19
第2節	第61次調査の記録	27
	1. 調査概要	27
	2. 調査の記録 土層と遺構	27
	3. 出土遺物 上器	33
	石器	40
	木器	40
第3章	小 結	41

## 挿図目次

紙面面積割合（馬印33分野の面積を算定）（縮尺1/5,000）	中図
Fig. 1 板付遺跡60次調査点位図（縮尺1/1,000）	2
Fig. 2 第60次調査全体と土層図（縮尺1/100）	新り込み
Fig. 3 発生時代以前の遺構配置図（縮尺1/200）	4
Fig. 4 駄火式門型竹筒陣・土層別と出土遺物（縮尺1/2・1/4・1/40）	5
Fig. 5 SB・SK・SE実測図（縮尺1/40）	6
Fig. 6 SK・SX実測図（縮尺1/40）	7
Fig. 7 SK・SX・SE実測図（縮尺1/40）	8
Fig. 8 吉備時代以降の遺構配置図（縮尺1/200）	9
Fig. 9 出土遺物実測図 1（縮尺1/3・1/4）	10
Fig. 10 出土遺物実測図 2（縮尺1/3）	12
Fig. 11 出土遺物実測図 3（縮尺1/3・1/4）	14
Fig. 12 出土遺物実測図 4（縮尺1/3）	15
Fig. 13 出土遺物実測図 5（縮尺1/3）	16
Fig. 14 出土遺物実測図 6（縮尺1/3）	17
Fig. 15 出土遺物実測図 7（縮尺1/3）	18
Fig. 16 出土石器実測図 1（縮尺1/1）	20
Fig. 17 出土石器実測図 2（縮尺1/1・1/2）	21
Fig. 18 出土石器実測図 3（縮尺1/2）	22
Fig. 19 出土石器実測図 4（縮尺1/1）	23
Fig. 20 出土石器実測図 5（縮尺1/1）	24
Fig. 21 出土石器実測図 6（縮尺1/1）	25
Fig. 22 第61次調査点位図（縮尺1/400）	28
Fig. 23 土層図（縮尺1/80）	29
Fig. 24 第6～7水田面接出平圖図（縮尺1/100）	30
Fig. 25 第9・7水田面接出平圖配示図（縮尺1/40・1/100）	31
Fig. 26 出土上器実測図 1（縮尺1/3）	32
Fig. 27 出土上器実測図 2（縮尺1/3）	34
Fig. 28 出土上器実測図 3（縮尺1/3）	35
Fig. 29 出土上器実測図 4（縮尺1/3・1/4）	36
Fig. 30 出土石器実測図 1（縮尺1/1・1/2）	37
Fig. 31 木苔実測図 1（縮尺1/3）	38
Fig. 32 木苔実測図 2（縮尺1/3・1/4）	39
図版目次	
PL. 1 第60次調査SC-01出土土器 2. 板付遺跡全貌（西から）	
PL. 2 形形多様な遺跡 1. 3糸口（西から） 2. 4. 5. 6近景（東から）	
7. SK-40地盤状況（南から） 8. SK-40地盤状況（西から）	
PL. 3 第61次調査各遺構 1. 調査区全貌 2. 第7水田と瓦列	
3. 4. 5被覆瓦列 6. 板列とヒョウタン 7. ヒョウタン近景	
PL. 4 出土土器 1（縮尺1/2）	
PL. 5 出土上器 2（縮尺1/2）	
PL. 6 出土上器・木器 3（縮尺2/3・1/2）	
PL. 7 出土石器 1（縮尺1/1）	
PL. 8 出土石器 2（縮尺1/1）	
PL. 9 出土石器 3（縮尺1/1）	
PL. 10 出土石器 4（縮尺1/1）	
表 目 次	
Tab. 1 第60次調査遺構計測一覧	8

## 第1章 第60～62次調査

### 第1節 調査に至る経過

昭和63（1988）年、福岡市は「史跡・板付遺跡調査整備委員会」を発足させ6名の専門の先生方と文化庁、福岡県教育庁を交えて「史跡整備はいかにあるべきか」の審議を検討するため委員会を開催し、遺構の確認調査、整備事業の基本構想・基本計画等について審議され板付遺跡の整備事業に着手した。平成元（1989）年に文化庁の事業である史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）が開設され、同年6月板付遺跡が採択され本格的な整備事業へ着手した。

平成元年度は、基本計画・設計とガイダンス施設建設を行ない、また確認調査も内環濠内の調査を継続し、南西部で一部環濠が切れ、幅4mの陸橋部が検出された。

平成2（1990）年には外環濠の調査を開始した。外環濠部分に推定された3か所を調査した。第60次調査地点からは発見できず、第61次調査地点で環濠の一部を検出した。ただ第62次調査地点では砂層の堆積が厚く涌水がひどく調査には至らなかった。

### 第2節 調査の概要

第60次調査地点は從来、板付周辺遺跡で地点表示として使用されているG-4・5にあたり、第61次調査地点はE-6c、第62次調査地点はG-4b地点にあたる。本年度から次数制をとることにしたが、試掘調査・本調査等を調べる必要が生じた。しかしながら完全に調べることができなかつたため57・58の次数だけ欠番とした。第60次調査は9050、61次調査は9051、62次調査は9052の調査番号を与えた。

第60次調査地点は1990年11月5日より同年12月28日の2か月間を要し、調査面積800m<sup>2</sup>である。検出された遺構は、円形住居跡1軒、掘立柱建物2棟（内1棟は建替を行なっている）、土壙墓24基、溝状遺構7条、不整形土壙23基、水田跡、多数の柱穴等を検出した。中世の遺構は水田跡、溝状遺構4条、柱穴等のほかに小さな杭を打ち込んだ杭列を東西に1条検出した。時期的にはSD-01・02・03が室町時代に比定できるもので、杭列の部分が何の遺構かは不明であった。また南西隅に包含層（黒色土）が検出され、この中から旧石器時代の遺物であるナイフ形石器・縦長剣片・石核等が出土した。

第61次調査地点は、1990年12月1日から1月31日の2か月を要し、調査面積は100m<sup>2</sup>である。地点は、第34次・36次調査地点の南側に位置する。敷地は687m<sup>2</sup>であるが、確認調査のため幅4.5m、長さ23.1mの約100m<sup>2</sup>のトレンチ調査を行なった。第34・36次調査地点からは外環濠に当るSD-01が検出され、34次調査地点でSD-02の弥生中期の溝によって切られ、その方向性が問題となつており、その確認の意味でも調査を実施した。その結果、水田面と外環濠の一部を検出した。

第62次調査は、第60次調査地点から北東に80m、第61次調査地点から北へ250mの古川の隣接地に位置している。調査は幅10m、長さ40mのトレンチ調査を行なう予定であったが、表土下すぐに砂層が堆積しており、トレンチが崩壊し危険であったため、今回は調査を終了し、改めて矢板工事を設定して行なう予定で終了した。その後、板付南台地との接点（外環濠南側に位置する部分）で住居の建替があり、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生中期の溝状遺構の下に外環濠の一部と思われる溝状遺構を確認した。

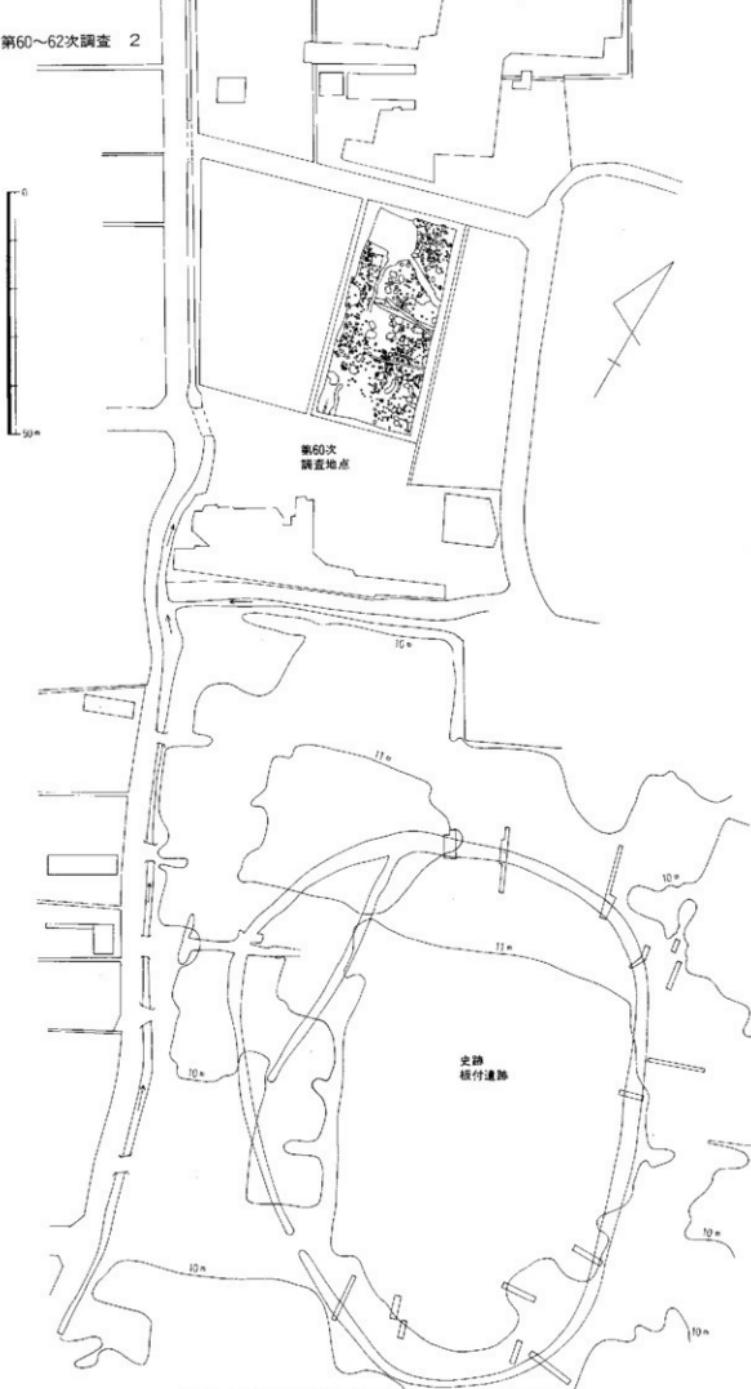


Fig. 1 板付遺跡第60次調査地点位置図（縮尺 1/1,000）



Fig. 2 第60次調査全体図と土層図（縮尺 1/100）

## 第2章 調査の記録

### 第1節 第60次調査の記録

第60次調査地点は、史跡・板付遺跡の内環濠より北へ80m、第6次調査地点の学校建設用地（現板付北小学校）の南側に位置する。第6次調査地点の南側に段落ち部分があり、谷部となることが報告（福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集「板付遺跡」）されているが、これが外環濠の部分となることが昭和63（1989）年の板付遺跡調査整備委員会において報告され、これを受けて本調査地点の調査を開始した。調査地点の北側に外環濠の南側段落ち部分を検出することを目的として調査を1990年11月5日から開始した。

調査は東側半分から開始した。調査区北側に外環濠の南側段落ち部分（肩部）が検出できるものと考えていたが、黄褐色ローム（鳥栖ローム）が検出されまだ台地上であることが判明した。最終段階で調査区ぎりぎりまでトレンチを設定して調査したが、やや下がりぎみとなるだけで明確な段落ち部分の検出はできなかった。北側道路部分の下水道工事に伴う調査では黄褐色ローム層、八女粘土層は検出できていないため、道路部分では、外環濠内に入るものと考えられ、調査できなかった部分に段落ちの肩部があるものと考えられる。

このため遺構の検出につとめ、西側中央部西隅から円形住居跡1軒、2間×2間の総柱建物1棟、1間×4間の掘立柱建物1棟（建替が認められる）、土壙墓9基、不整形土壙5基、溝状遺構2条を検出（外環濠、内環濠と同時期）した。さらに弥生時代の前期から中期にかけて溝状遺構1条、土壙13基、不整形土壙10基が検出された。中世の遺構として溝状遺構4条、水田跡1枚、杭列1条を検出した。

#### 1. 検出遺構

現在、稻作を基準としてその以前を縄文時代、それ以後を弥生時代とする考え方が提唱されている。縄文時代晩期、特に夜臼式土器を出土する遺構には、水田跡を伴うものが多い。弥生時代前期との接点であるこの時期を弥生時代早期とする考え方も一応肯定する。しかしながらこれは大きな提唱であり、一報告書が論ずることではない。今回は從来縄文晩期の夜臼式土器を伴出する遺構・遺物を第一期、弥生時代前期を第二期、中期を第三期として考えることにする。

#### 第I期の遺構 (Fig. 3 ~ 7 PL. 2)

第I期の時期に比定できる遺構は、円形住居跡（SC-01）1軒、掘立柱建物2棟、主壙墓11基、不整形土壙5基、溝状遺構2条、柱穴等を検出した。

**円形住居跡（SC-01）** 調査区西側中央部西隅に検出された。約半分の検出であり、調査区を拡張して調査を行なったが、隣接地のブロック塀が崩壊寸前となつたため最大限にとどめ、それ以上拡張することを断念した。

住居跡の形状は円形に近いが、やや側辺部が長い楕円形を呈するものと考えられ、現在の面積は、 $3.575\text{m}^2$ であり、復元すると $7.15\text{m}^2$ である。主柱穴は2本柱と考えられ、周辺部に9個の柱穴（全体で約20個）を配するものと考えられる。壁面の遺存状況は悪く13cm程度しかないが、遺物は散乱しており、ほぼ完形に近い遺物が出土した (Fig. 4)。

**掘立柱建物** 掘立柱建物は、2棟検出した。SC-01の北側に2間×2間の総柱掘立柱建物が1棟と南側に1間×4間の掘立柱建物が検出されたが、この建物は建替が行なわれている。両方ともI期の時期

の遺物が出土しており、時期的にI期に比定してよい。

SB-01の方位はN-19°-Wを測り、梁行1.8m、桁行8.22mを持つ、ほぼ2m間隔で、柱穴の深さも標高7.36mではほぼおさまる。

SB-02は、方位N-19°30'-W、梁行3.68m（1.68m、2.0m）、桁行4.49（2.22、2.27）mを測る。柱穴の大きさも20×30cm程度で、標高も7.30mとほぼ同じレベルである。レベル的には、東側が高く、西側・北側が低くなる。

#### 土壙基（SK）（Fig.3・5～7）

土壙基（SK）は11基検出した。南東隅から中央部にかけて検出され住居跡、掘立柱建物より高い所に位置している。

遺構の遺存度は悪く、10cmから35cm程度である。形状は長方形が9基、方形が3基である。木棺墓の可能性も考えられるが、検出状況では、その確認に至っていない。

#### 不整形土壙（SX）（Fig.3・6・7）

SX-07、19、21、23の4基を検出し19、21を図示した。21は1.61×1.64mの方形の形状を呈し、底面は円形を呈する。深さ0.96mを測り、現代では涌水する。井戸状遺構とも考えられる。

#### 第II期の遺構

第II期の遺構には土壙基が9基、不整形土壙が12基検出された。

ほとんどが東側台地上にあり、形状も方形が2基、長方形が6基、隅丸方形その他が4基である。

不整形土壙の内、SX-10は円形を呈する。他は方形、隅丸方形が主である。

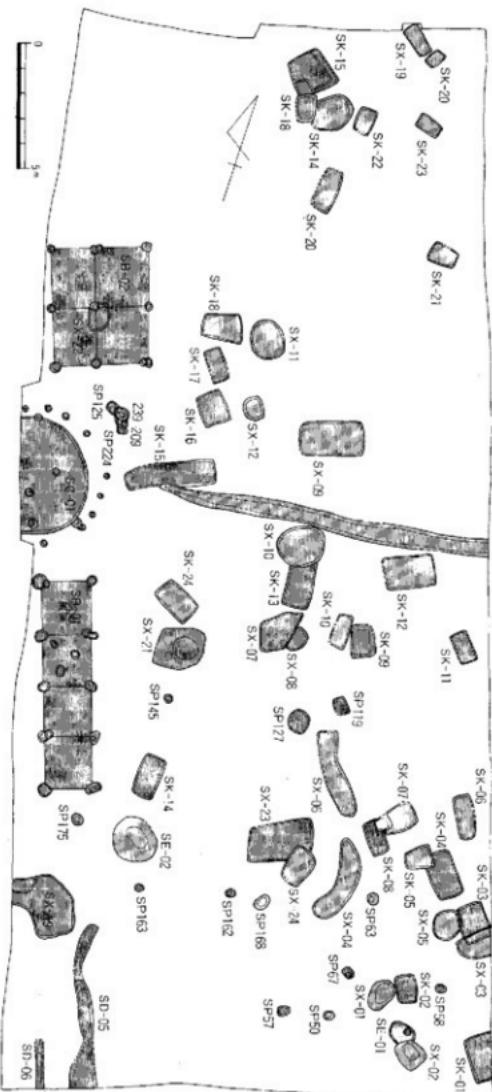


Fig.3 弥生時代以前の遺構配図（縮尺1/200）

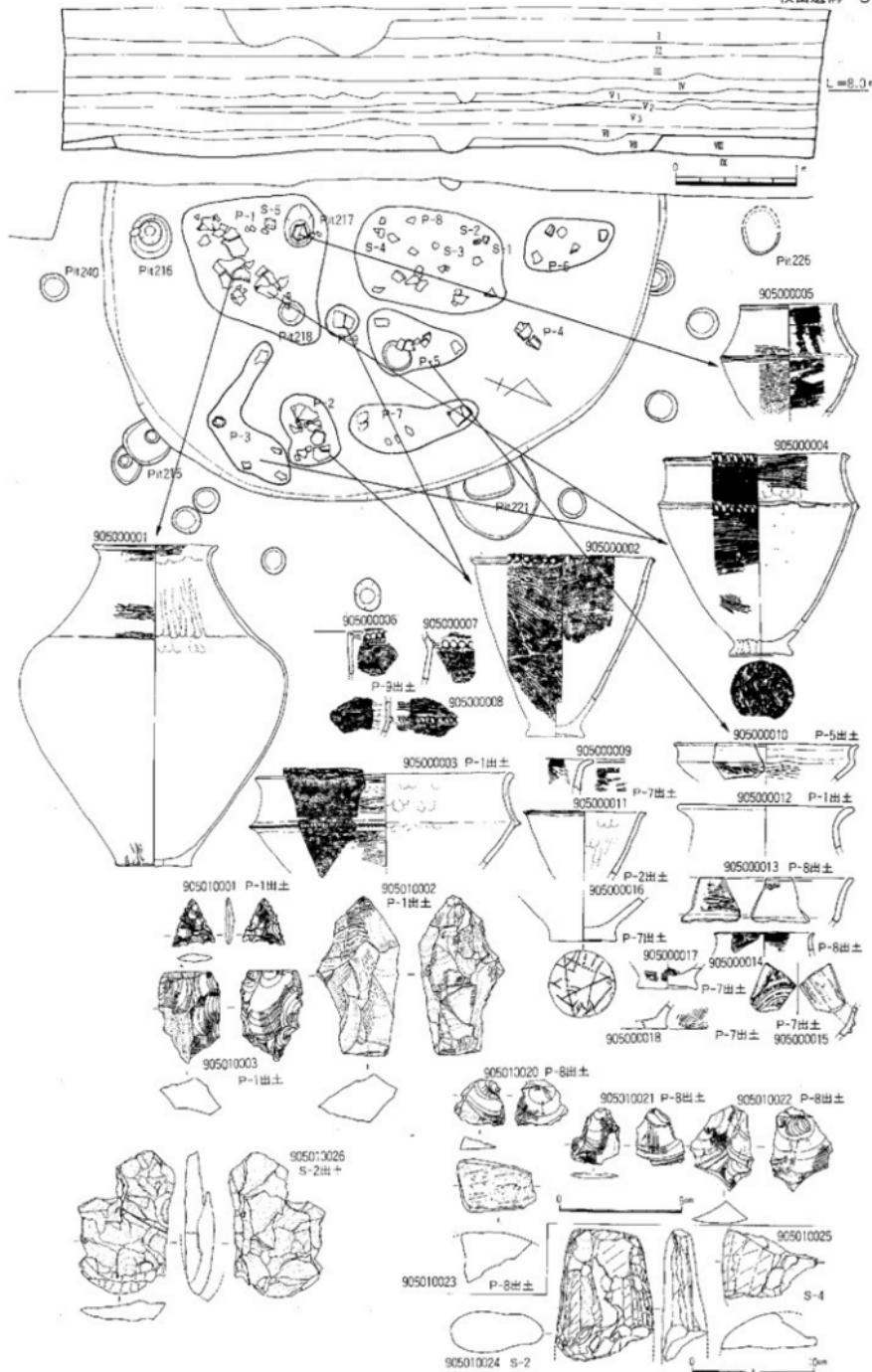


Fig. 4 竪穴式円形住居跡・土層図と出土遺物 (縮尺 1/2・1/4・1/40)

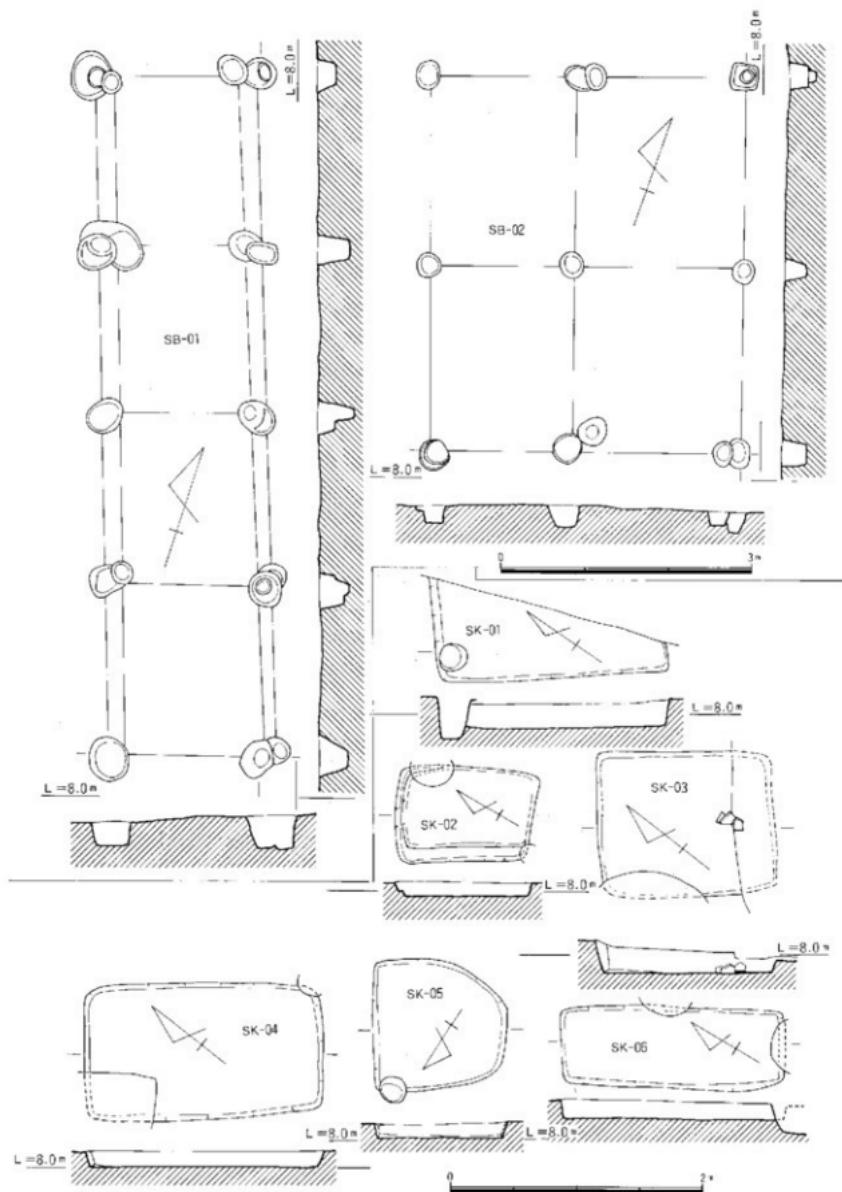


Fig. 5 SB・SK実測図 (縮尺 1/40・1/60)

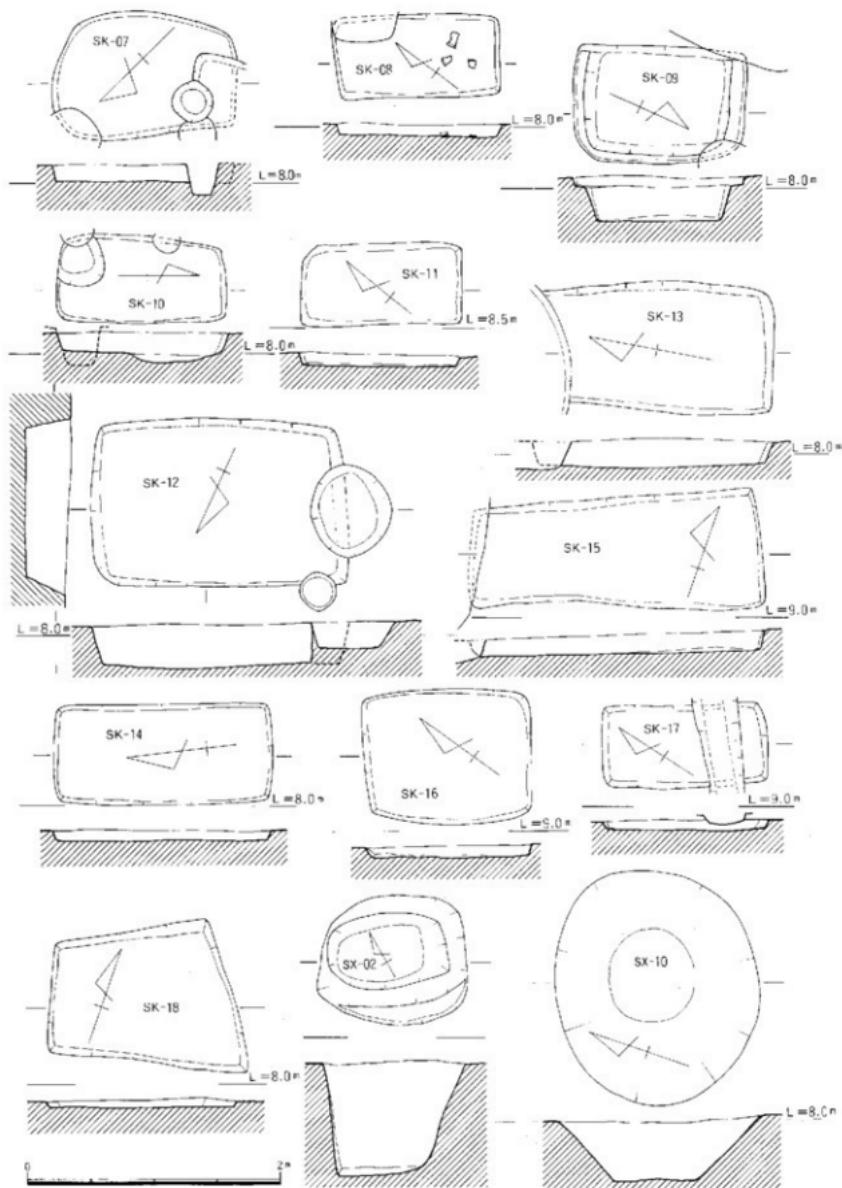


Fig. 6 SK・SX実測図 (縮尺 1/40)

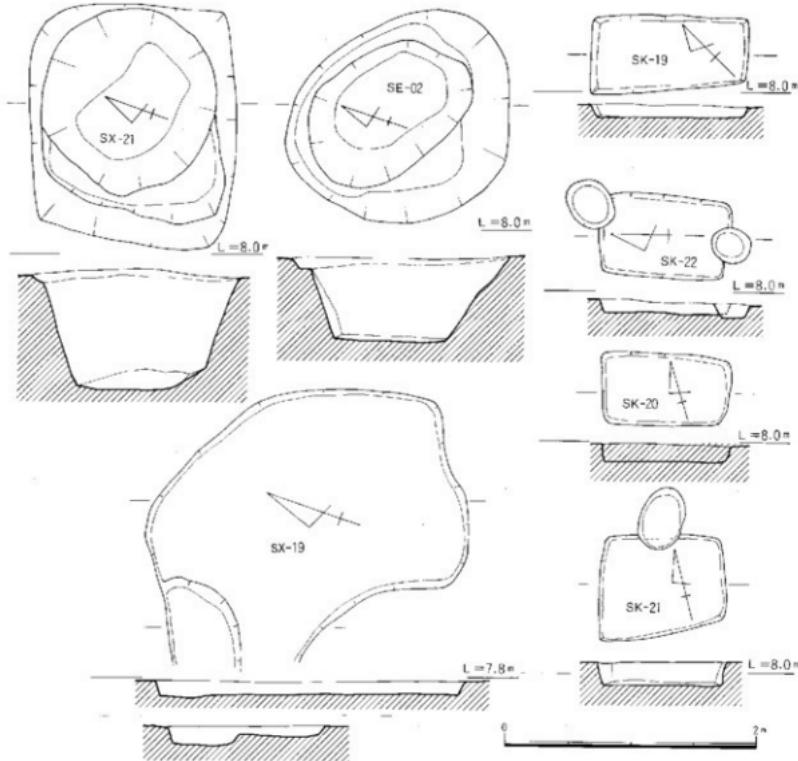


Fig. 7 SK・SX・SE実測図 (縮尺 1/40)

Tab.1 第60次調査造構一覧

造構名	形状	底面(長×幅×深さ)(単位: m)	方位	時期
SC-01	円 形	4.65m (周長14.6m)	-	I期
SB-01	4間×1間	8.22 × 1.95 × 0.43	N 19° W	I期
02	2間×2間	4.49 × 3.78 × 0.31	N 19° 30' W	I期
SK-01	長 方 形	1.54 × 0.83 × 0.31	N 35° W	I期
02	方 形	1.08 × 0.76 × 0.15	N 30° W	I期
03	方 形	1.43 × 1.15 × 0.21	N 37° W	I期
04	長 方 形	1.90 × 1.09 × 0.12	N 38° W	I期
05	不 壓 形	1.06 × 1.05 × 0.10	N 57° E	II期
06	長 方 形	1.80 × 0.64 × 0.26	N 30° W	II期
07	扇 丸 方 形	1.46 × 1.01 × 0.23	N 45° E	III期
08	長 方 形	1.30 × 0.66 × 0.08	N 36° W	I期
09	長 方 形	1.36 × 0.92 × 0.36	N 24° W	I期
10	長 方 形	1.36 × 0.70 × 0.24	N 6° W	III期
11	長 方 形	1.29 × 0.66 × 0.08	N 39° 30' W	I期
12	長 方 形	2.04 × 1.34 × 0.34	N 65° W	II期
13	長 方 形	1.68 × 1.01 × 0.21	N 10° W	I期
14	長 方 形	1.73 × 0.80 × 0.08	N 7° E	I期
15	長 方 形	2.23 × 0.96 × 0.17	N 70° 30' E	I期
16	方 形	1.34 × 1.05 × 0.11	N 36° 30' W	II期
17	長 方 形	1.32 × 0.65 × 0.07	N 32° W	II期
18	台 形	1.50 × 1.20 × 0.74	N 70° 30' E	II期
19	長 方 形	1.25 × 0.63 × 0.11	N 44° W	II期
20	長 方 形	1.01 × 0.58 × 0.14	N 73° W	II期
21	台 形	1.01 × 0.84 × 0.19	N 76° 30' W	II期
22	長 方 形	1.04 × 0.66 × 0.12	N 1° W	II期
23	長 方 形	0.85 × 0.47 × 0.25	N 63° W	II期
24	長 方 形	1.45 × 0.81 × 0.37	N 65° W	II期
SK-01	横 円 形	1.39 × 0.93 × 0.05	N 19° 30' E	II期
02	方 形	1.15 × 1.03 × 0.89	N 57° 30' W	II期
03	不 壓 形	1.30 × 1.15 × 0.15	N 50° E	II期
SX-04	不 壓 形	3.40 × 0.83 × 0.25	N 6° E	II期
05	円 形	1.25 × 1.13 × 0.15	N 11° 30' W	II期
06	不 壓 形	3.70 × 0.90 × 0.15	N 37° 30' E	II期
07	不 壓 形	2.25 × 1.43 × 0.20	N 46° E	I期
08	円 形	1.00 × 0.80 × 0.45	N 12° E	I期
09	長 方 形	2.61 × 1.46 × 0.15	N 67° 30' E	II期
10	円 形	1.86 × 1.62 × 0.45	N 75° E	II期
11	円 形	1.60 × 1.45 × 0.50	N 30° W	II期
12	方 形	0.90 × 0.75 × 0.32	N 30° W	II期
13	不 壓 形	2.82 × 1.55 × 0.65	N 21° 30' E	II世
14	椭 圆 形	1.20 × 1.75 × 0.26	N 60° 30' E	II期
15	方 形	1.56 × 1.57 × 0.30	N 42° 30' W	I期
16	反 方 形	0.78 × 0.62 × 0.19	N 27° 30' W	II期
17	方 形	1.30 × 1.15 × 0.25	N 5° W	II期
18	方 形	1.10 × 0.86 × 0.35	N 21° 30' W	II期
19	不 壓 形	2.48 × 2.12 × 0.14	N 20° W	I期
20	方 形	1.80 × 0.75 × 0.35	N 10° -E	II期
21	方和内部凹形	1.91 × 1.65 × 0.38	N 80° -E	I期
22	椭 圆 形	1.15 × 0.88 × 0.53	N 20° 30' E	I期
23	反 方 形	2.62 × 1.56 × 0.35	N 67° 30' E	I期
24	反 方 形	1.50 × 1.10 × 0.25	N 15° 30' E	II期
SE-01	椭 圆 形	1.05 × 0.85 × 0.36	N 72° 30' W	II期
02	椭 圆 形	1.71 × 1.68 × 0.68	N 18° W	II期
SD-01	台 形	11.7 × 1.82 × 0.69	N 65° W	II世
02	台 形	13.1 × 0.76 × 0.20	N 84° -W	II世
03	台 形	13.3 × 0.82 × 0.36	N 83° E	II期
04	台 形	11.5 × 0.47 × 0.30	N 68° -W	II世
05	直 状	6.50 × 1.18 × 0.12	N 16° -E	I期
06	直 状	1.50 × 0.25 × 0.10	N 16° -E	I期
07	直 状	13.1 × 0.85 × 0.21	N 10° -W	II世

井戸状遺構は2基である。現在でも涌水することからおそらく井戸としての用途を考えてよい。

### III期の遺構

弥生時代中期に属する遺構で、SD-03、SX-16がある。調査区内には確認できた遺構は2つだけである。SD-03はSD-02によって切られているが、東から西へ流れ、西側で消滅している。幅50cm、深さ30cmを測る。SX-16は北側に検出されたもので、SX-17の下層から検出された遺構が崩壊したためにその影響を受けた。SX-16の西側に柱痕の残る柱穴が2穴検出されたが、建物とはならなかった。

### 中世の遺構 (Fig. 8)

室町時代の遺構として水田に伴う遺構が検出された。北西隅に水田跡が検出されたが、SD-01・07から水が流れこむ状態であった。SD-01は東から西の方向に向けて流れ、SX-13とした取水口遺構が設置されている。SD-01は幅2m、深さ60cmを測る。SD-01とともに水田跡に流れ込むSD-07がある。中央部附近で消滅しているかSD-02・04と直角に交わるもので水田1枚の広さを表す溝とも考えられる。

SD-04の南側にはほぼ平行に杭列が1条検出され、調査区の東隅から西隅までづつく。杭列の長さは19mで杭と杭の間隔は、広い所で1m、狭い所で10cmを測り、西側に行くほど間隔が狭まっている。この杭列がどの時期にあたるかは不明であるが、現代のものではなくそれ以前の杭列であることだけは確かである。

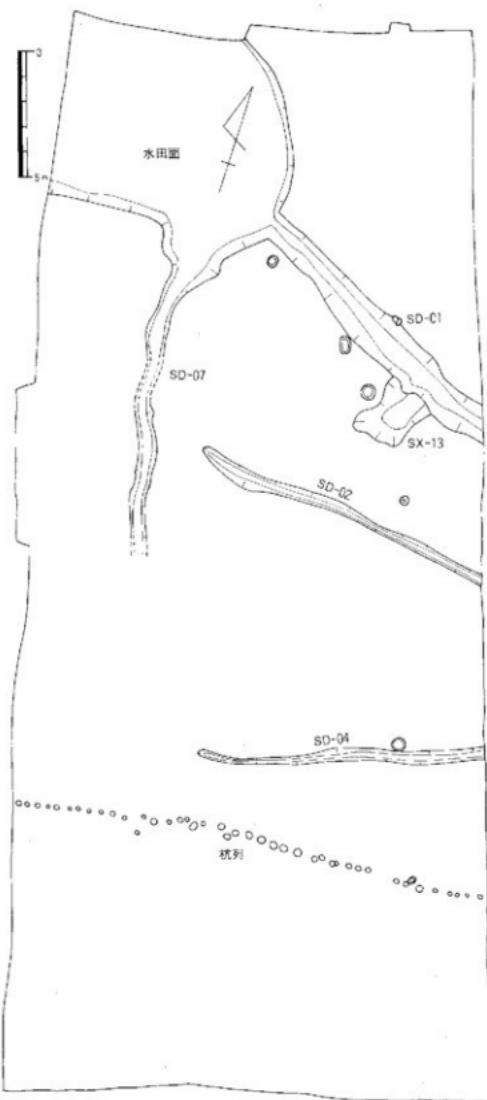


Fig. 8 古墳時代以降の遺構配置図 (縮尺 1/200)

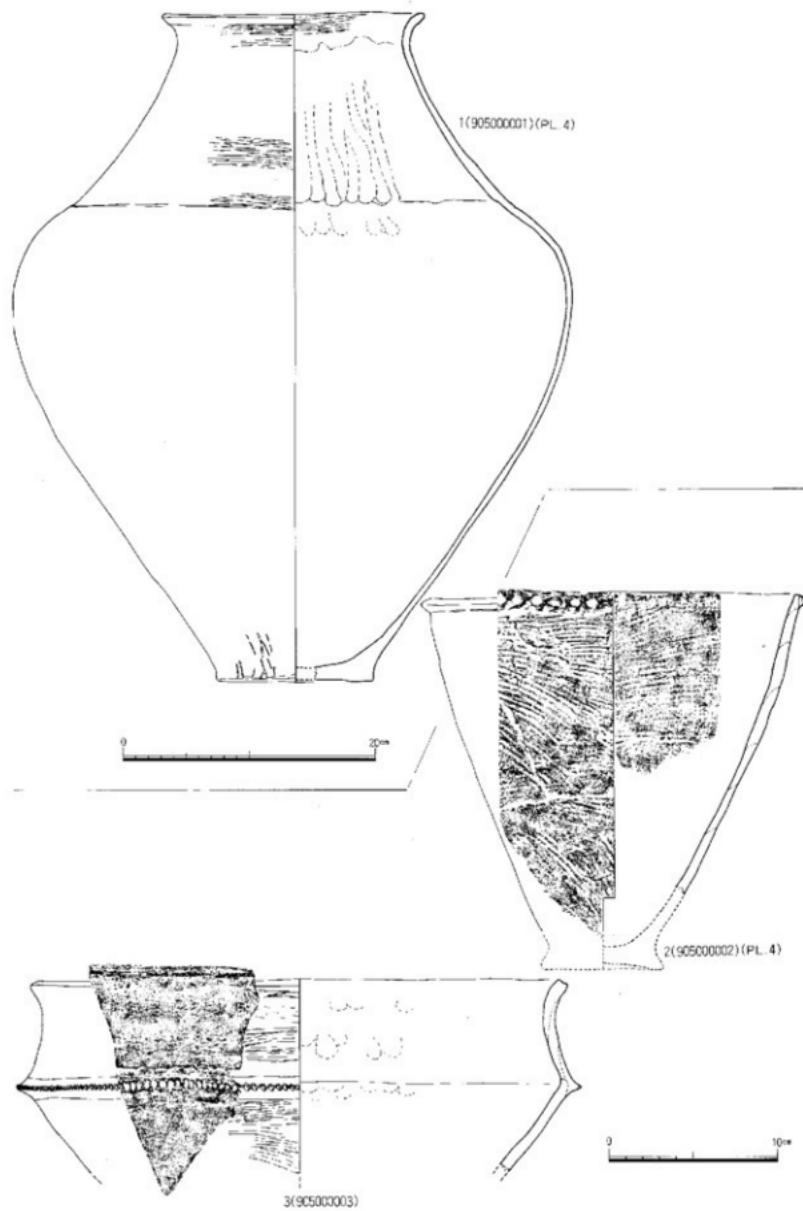


Fig. 8 出土遺物実測図--1 (縮尺 1/3・1/4)

## 2. 出土遺物

各遺構から土器・石器が出土した。各遺構ごとにまず土器から記述する。

### 土 器 (Fig. 9 ~ 15 PL. 4 ~ 6)

#### SC-01出土の土器 (Fig. 2 ~ 4 PL. 1-1 ~ 4)

SC-01から出土した土器はFig. 9・10に図示した18点である。この他にも図化できないものがあるが器種的にはほぼ満足できる。壺形土器が1・9・12・14壺形土器が2・4・6～8鉢形土器が3・5・10・13浅鉢が11・15である。1は大型の壺形土器で口径20.9cm、器高52.7cm、最大径44.2cm、底径12.4cmの復原完形品である。胴部上位に最大径を持ち器厚が薄い。胴部上位に1条の凹線を巡らせ口縁部は折り曲げた痕跡をわずかに残す。全面にミガキを施こした丹塗り土器である。

SC-01南中央部周辺に一括出土した。2は口径22.6cm、推定器高22.2cmを測る壺形土器である。口唇部に1条の粘土帯を巡らし、三角形に整えた後刻目を施こし、内外面に横位・斜め方向の条痕による器面調整を施こしている。外面に厚くススが附着している。焼成は良好で砂粒を多く含み外面が暗黒褐色、内面が淡黄白色を呈する。3は胴部から口縁部にかけて逆「く」字状を呈し、頸部に刻目を施こした口径31.5cm、最大径33.1cmを測る鉢形土器である。口縁部は外に大きく外反し、立上がった所でおさめている。内外面ともヘラミガキが横方向に施こしてある。4は口径22.9cm、最大径24.7cm、器高24.7cm、底径7.7cmを測る壺形土器で復原完形品である。口縁部と頸部に1条づつ三角突帯を巡らし刻目を施こしている。内外面とも横位方向に貝殻条痕を施こしている。底部には台座となった部分に附着した木の葉状圧痕がみられる。胴部下半は二次的な火を受けて赤変しておりススも附着している。5は口径12cm、最大径17.1cmの鉢形土器であり、SC-01、Pit-217の最下面に礎板状に置かれた状態で出土した。形態的には4の壺形土器と同じであるが、刻目突帯ではなく沈線を口縁部下に1条、頸部の上下に1条づつ配している。内面は条痕の後ナデで仕上げられている。外面は研磨された痕跡を持つが器面の荒れが著しく特に口縁部附近では表面が剥落している。6～8は壺形土器の口縁部・胴部である。9は壺形土器の口縁部で口唇部が外反するタイプである。11は口径15.1cmの鉢形土器で口縁部が外につまみ出され、このため口唇部が平坦面となる。器面は荒れが著しく明確ではないがヘラミガキを施こしている。10は口径22.8cmの浅鉢状口縁部を呈するが、高坏の可能性がある。外面に一部赤色顔料が残り彩色していたことが窺える。12は口径22.0cmの壺形土器の口縁部である。13は鉢形土器の口縁部で口径は小片であるため不明。14は口径12.2cmの小型壺形土器である。外面にベンガラと思われる赤色顔料があり、これも彩色土器である。調整は横方向のミガキを施こしている。15は四つの山形口縁を有する浅鉢形土器の胴部で図化するのを戸惑った。胴部に弧状に三角突帯を2条巡らしているものでこの部分が山形の位置に相当する。16は壺形土器の底部で、底径8.2cmを測る。底面に木の葉状の文様がある。17、18も壺形土器の底部で、17は底径7.4cmを測る。

### SK (土壙墓) 出土の土器 (Fig.11 PL. 5)

SKからはすべて土器が出土したが、その内図化できたものは33点である。SK-01から出土した13点を図示した。19～22・24・29は浅鉢かもしくは高坏と考えられ、特に22・24は高坏の可能性が高い。口縁部だけの判断であるため明確にはできない。一応浅鉢として記述していく。

19は口径26.8cmを測り口縁が外反するもので、外面は黒色、内面は淡暗褐色を呈し、調整手法は内外面とも荒れが著しいため不明であるが、一部ミガキを施こしている部分が認められる。20は口径23.3cmを測り、口縁部が19よりさらに外へ開くもので高坏の可能性が大きい。調整は器面が著しく荒れているため不明である。21はさらに全体が傾き、頸部から口縁部までの間隔がなく、内面における

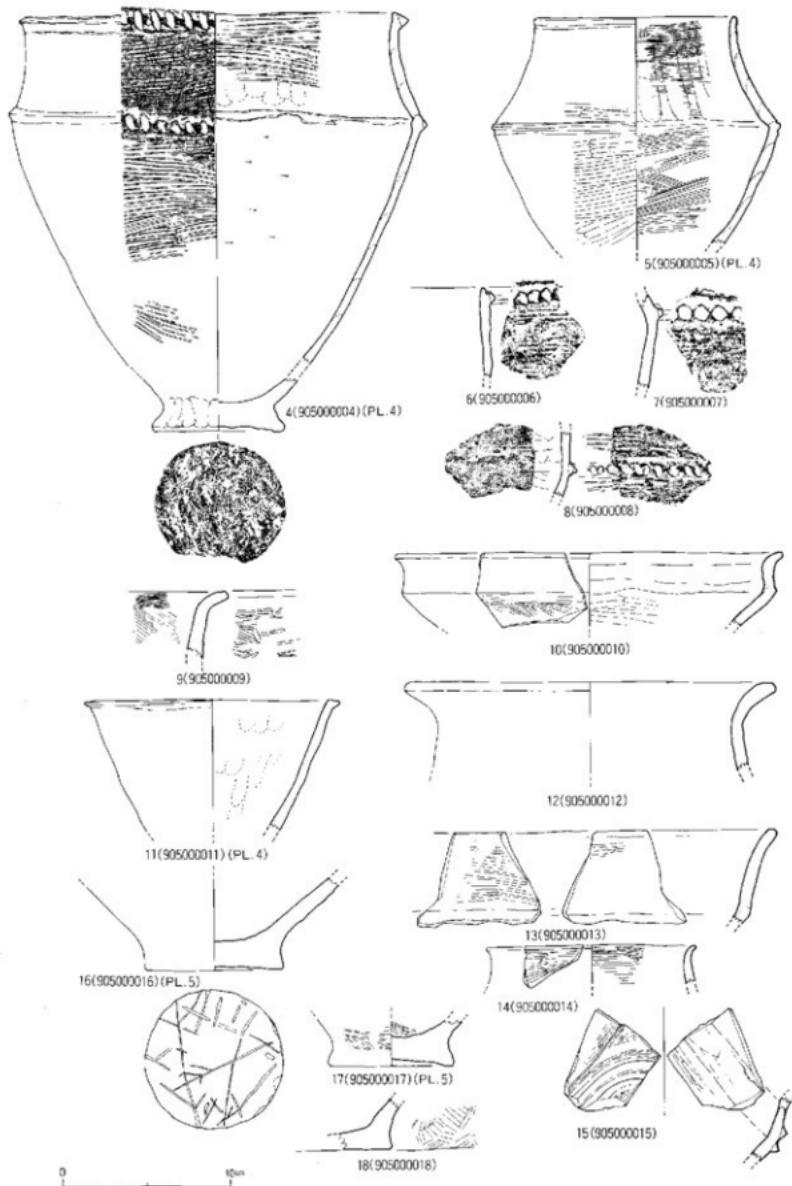


Fig.10 出土遺物実測図-2 (縮尺1/3)

頸部変換点がない。口径22.9cmで、色調は内外面とも明橙茶色を呈する。22は21よりさらに傾きを持つ。小片のため口径は出していないが、40cm前後になるものと思われる。記述した4点の内、一番高坏として考えられるものである。23は口径18.4cmの壺形土器口縁部である。24は口縁部が平坦面を有する鉢形土器で、口径18.8cmを測る。25～28は、甕形土器の口縁部・胴部である。口縁部端と胴部とに1条の刻目突帯を有し、外面には貝殻条痕を施こしている。29は鉢形土器、30は壺形土器の口縁部。31は甕形土器の底部で7.9cmの底径を有する。32～34はSK-02から出土した壺形土器・甕形土器の口縁部である。35～37はSK-03から出土した土器で、35・36は甕形土器の胴部片、37は壺形土器の口縁部で、口径19cmを測る。口縁部は折曲げてあり、色調は明茶白色を呈し、調整はハケメとナデ仕上げである。38・39はSK-07から出土した壺形土器の底部（底径8.5cm）と逆「L」字口縁を呈する甕形土器の口縁部である。40～43はSK-08から出土した。41・42は壺形土器の口縁部で、口唇部に刻目を施す。40・44は甕形土器の口縁部で、口縁部下に三角形の刻目突帯を巡らす。43は底径9.4cmの壺形土器の底部である。45～47はSK-14から出土した土器である。45は甕形土器の底部で、底径5.0cmを測る。46・47は甕形土器の口縁部で、口縁下に刻目突帯を有する。48～52はSK-15から出土した土器である。52の壺形土器の底部であるが、底面に種子（楕状）の压痕が認められる。底径7.2cmを測る。

#### SX（不整形土壠）出土の土器 (Fig.12 PL.4・5)

54はSX-03から出土した甕形土器の口縁部である。口縁下に刻目突帯を巡らす。53はSX-05から出土した鉢形土器で、口径23.4cmを測る。口縁部は外反し、端部に刻目を施す。外面は横ナデ、内面は指押えの後ナデを施す。55・56はSX-07から出土した甕形土器の口縁部と底部である。55は底径6.7cmを測る底部である。やや上底で外面に指押えの压痕がある。56は口径20.8cmの甕形土器口縁部で、口縁下に刻目突帯を巡らす。57～61まではSX-08から出土した。57は高坏か浅鉢の口縁部で、どちらかといえば高坏であろう。口径21.5cmを測り、外面は剥落して調整が不明であるが内面はミガキが施されている。59は壺形土器の口縁部で口径27.3cmを測る。61は口径17.1cmの大きな刻目突帯を巡らす甕形土器である。内外面とも横方向に貝殻条痕を施す。62～65はSX-13から出土した土師器である。62・63・65は高台付塊で、62は底径7.0cm、63は口径14.8cm、65は口径15.3cmを測る。64は土師皿で、口径15cm、器高2.9cm、底径9.6cmを測る。70はSX-16から出土した甕形土器の口縁部で、口径32cmを測る。66～69はSX-19から出土した土器である。66は口径20.4cm、最大径23cm、器高（復原）23cmを測る甕形土器である最大径の部分と口縁下に刻目突帯を有し、内外面とも貝殻条痕を施すが、器面表面が剥落している部分が多い。67は口径15.6cm、最大径16.2cmを測る鉢形土器である。68は甕形土器の底部で、底径5.2cmを測り、かなりの上底を呈する。

#### SD（溝状造構）出土の土器 (Fig.13 PL.5)

71～78までの土器はSD-01から出土した。71は玉縁付の白磁で口径17.1cmを測る。内面に波状の釉垂れが残っている。釉は胴部上端までしか掛っていない。72は高台付塊で11.8cmと大型である。73は底径7.8cmの高台付塊で、スカが附着している。75は底径8.6cmの高台付塊である。内黒土器と称せられるものである。76も同じ高台付塊で底径7.1cmを測る。77は口径13.4cm、器高1.8cm、底径9cmの上師皿である。78は須恵質の丸瓦である。SD-02からは79と80が出土した。79は土師器の塊形土器、80は底径6.6cmを測る高台付塊である。SD-03からは81～84の土器が出土した。ほとんど弥生時代中期の土器である。SD-04からは85の1点が出土した。底径7.6cmの高台付土師器塊である。SD-05からは66の甕形土器口縁部が出土した。

#### Pit出土の土器 (Fig.13・14 PL.4・5)

87はPit（SPとする）-63から出土した壺形土器の口縁部である。88はSP-201から出土した甕形土器

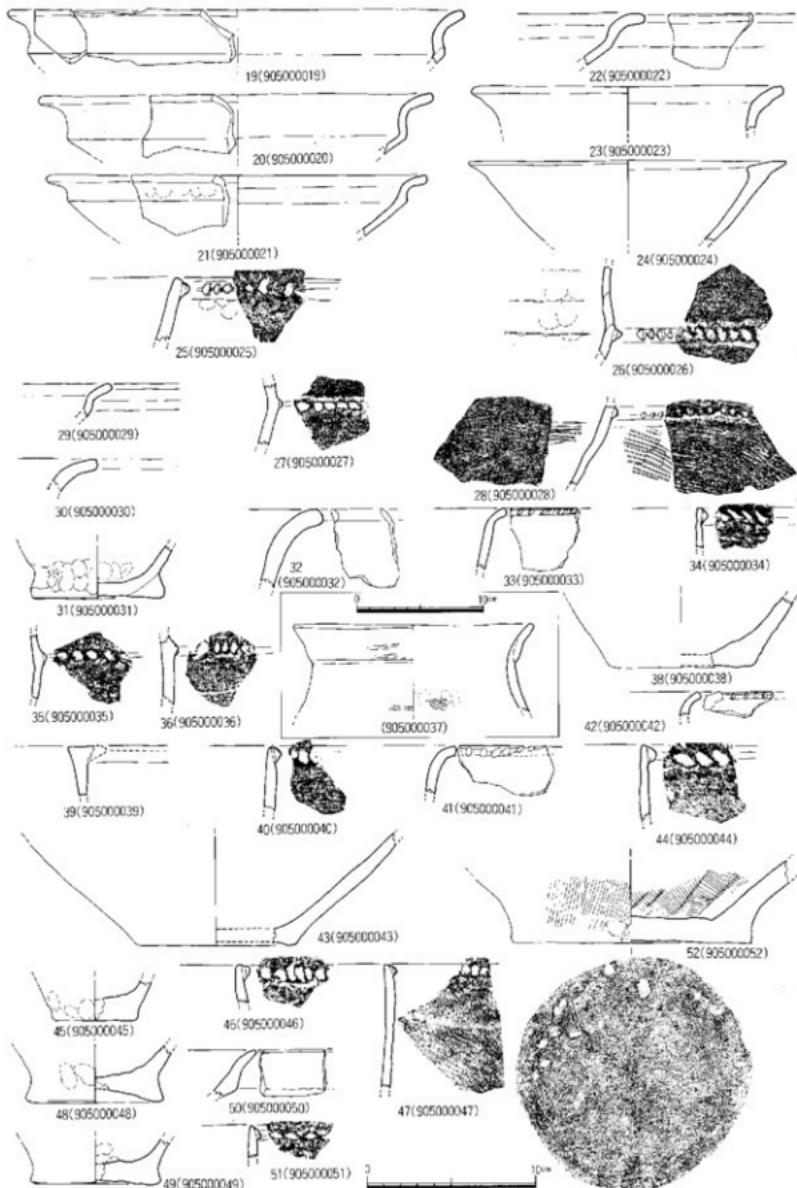


Fig.11 出土遺物実測図-3 (縮尺1/3・1/4)

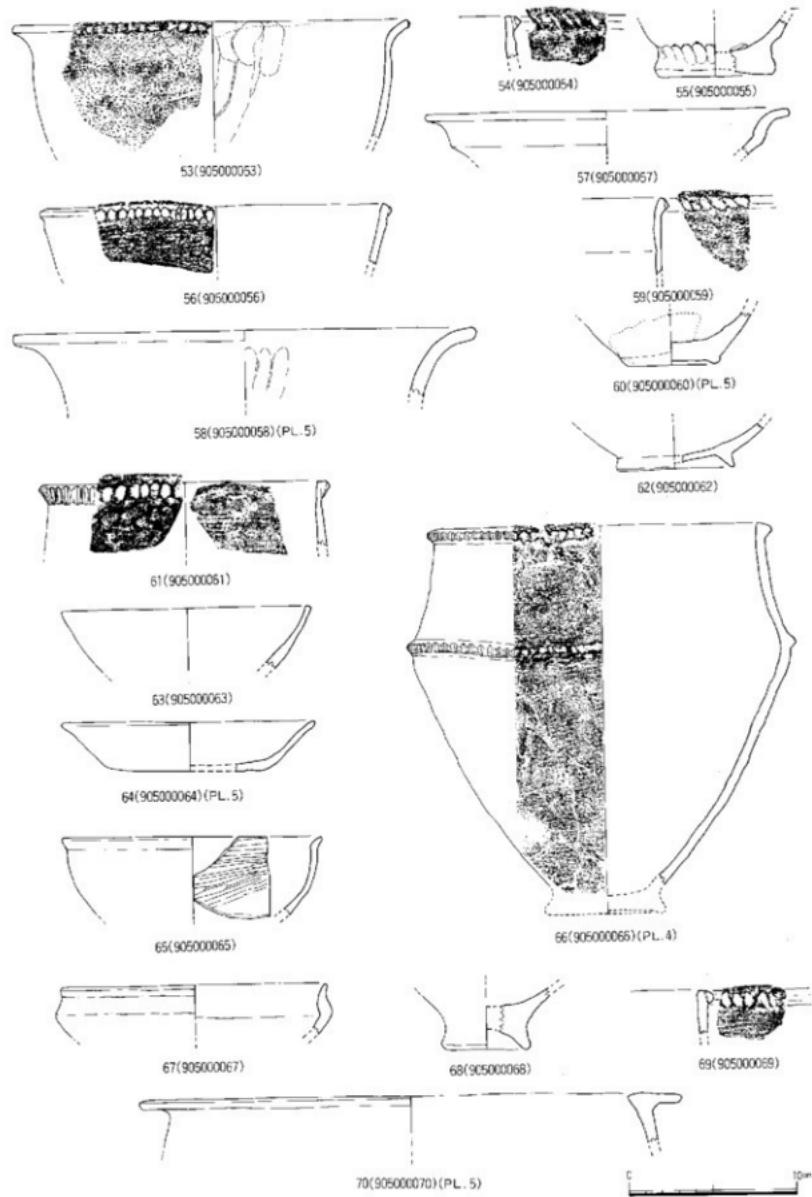


Fig.12 出土遺物実測図一4 (縮尺1/3)

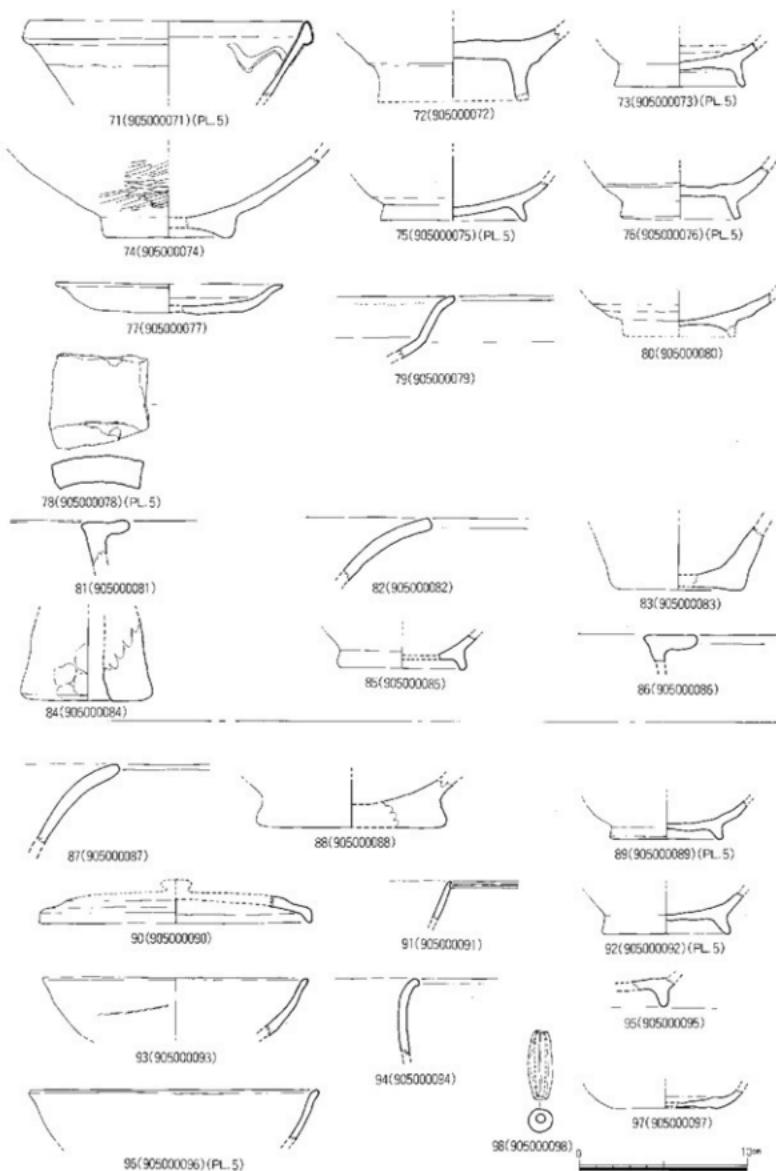


Fig.13 出土遺物実測図-5 (縮尺1/3)

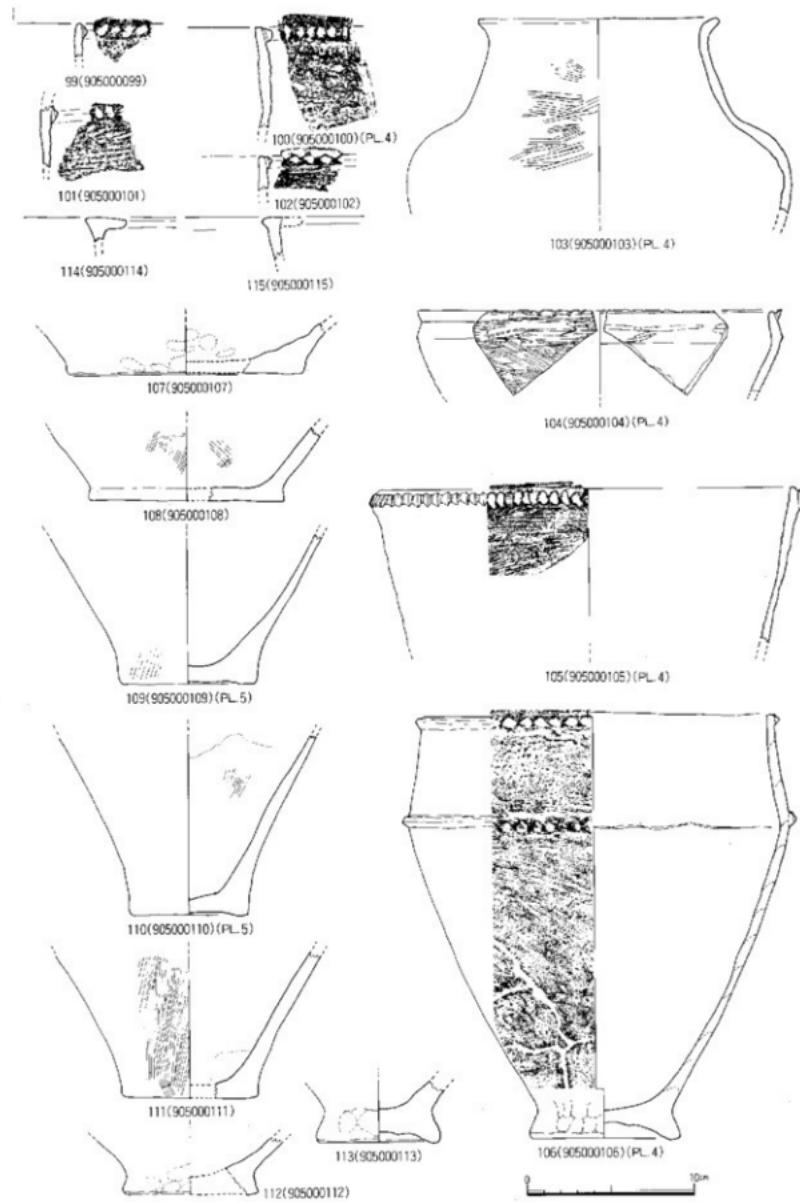


Fig.14 出土遺物実測図- 6 (縮尺 1 / 3)

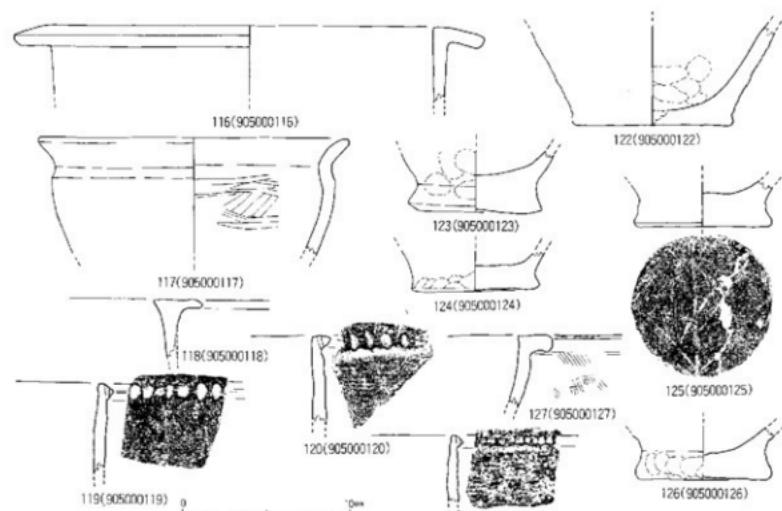


Fig.15 出土遺物実測図-7 (縮尺1/3)

の底部で底径11.2cmを測る。89～93・95～97は土師器塊（89・92～93・95・96）で高台が付く塊形土器である。90は口径16cmの須恵器蓋である。89はSP-143・90はSP-108・91はSP-202・92がSP-127・93がSP-148・95がSP-144・96がSP-148・97がSP-59からの出土である。94はSP-67から出土した壺形土器の口縁部、98はSP-114から出土した土錐である。Fig.14の109～111・114・115は弥生時代中期に属する土器群である。109がSP-63・110がSP-127・111がSP-63・114がSP-168・115がSP-63から出土した。99から102は壺形土器の口縁部・胴部片である。口縁部・胴部に1条の刻目突帯を有し、外面に貝殻条痕を横方向に施文する。99はSP-162・100はSP-195・101はSP-119・102はSP-46から出土した。103はSP-175から出土した口径14.3cm、最大径（胴部）22.7cmを測る壺形土器である。胴部の張りが大きく急激に膨らむ形状を呈する。外面はヘラミガキを施こすが、内面は表面の剥落が著しく不明である。外面が黒褐色、内面乳白色を呈する。104はSP-208から出土した鉢形土器で、口唇部横に粘土を貼り付け刻目を入れている。外面は荒い条痕を施こし、頸部から口縁部にかけてはヘラミガキを施している。105・106は壺形土器である。105はSP-175から出土した口径25.8cmを測るもので、口縁部下に刻目突帯を巡らす。外面は横方向の貝殻条痕を施している。106は口径21.5cm、器高25.2cm、最大径23.3cm、底径8.9cmの壺形土器で、SC-01の北東側のSP-224から出土した。口縁部と胴部に1条づつ刻目突帯を巡らし、胴部下位には横・斜・下方向の貝殻条痕を施している。112は底径8.0cmの壺形土器の底部でSP-163から出土。113はSP-58から出土した底径7.4cmのやや上底の壺形土器である。

116から127は調査区南東隅から検出された包含層中から出土した遺物（Fig.15）である。

117は鉢形土器の一種で小型の塊状になる土器であろう。内外面とも赤色顔料が全面に残っている。

## 石 器 (Fig.16~21 PL. 7 ~10)

出土した石器の内SC-01から出土したものはその80%を図示し、他も50%程度図示した。特に包含層から出土した石器の内、旧石器時代に属するものを数点上げた。板付・諸岡周辺は阿蘇・雲仙系の島栖・八女粘土等の堆積層のローム層が堆積しており、各地点から旧石器時代の遺構が検出され、福岡市内で唯一の良好な条件を整えた場所である。

図示した遺物の中でSC-01から出土した石器は、1~26である。住居跡内（約半分ではあるが）から出土であることから製作工程による剥片等も図示した。1は黒曜石製の三角錐で小型の鋸齒的要素を持ち、両側面からの押圧剥離によって形を整えている。2はサヌカイトを石材とした尖頭状石器である。素材の剥片は縦長に剥離された剥片を両側面の横方向から剥離を施している。3は石核側面再生剥片の一側面に二次加工を加えているToolである。4・5は黒曜石製の残核である。6は黒曜石製の縦長剥片である。打面、表面に自然面を有するところから最初の剥離によって得られたもので、左側面に使用時の剥離痕が認められる。7は黒曜石の剥片で主要剥離面には不純物による剥離方向が変化した痕跡が認められる。表面は縦からの剥離が主で自然面も有する。

8~22は黒曜石の剥片である。23は花崗岩の磨石である。表面が研磨され自然面の部分がわずかに残る程度まで使用されている。24は安山岩製の磨製石斧で、刃部が破損している。また敲打が残る部分もあるが、全体的に研磨作業にかかるとおり、その段階での破損を考えられる。25は花崗岩製の磨石である。23とは同じ花崗岩であるが石質が異なるため別のものであろう。これも約1/4程度しか残存していない。26は安山岩製の磨製石斧（局部磨製石斧か）の剥片である。3片に割られ散逸して居たものを接合したもので、残りは未調査部分にある可能性がある。刃部の一部が確認され磨製石斧であることが判明した。以上26点がSC-01から出土した石器である。

27はSD-01から出土した安山岩製の磨製石斧片である。刃部が破損しており全容は定かでないが、研磨状況からすれば、完成されたものである。28は調査区南西隅から包含層が認められたが、その中から出土した玄武岩製の磨製石斧である。研磨がはじまっている部分と敲打部分があるが、上下端は新しい剥離が認められ再加工を施す段階と考えられる。29も玄武岩製の磨製石斧である。刃部部分等が破損し、頭部だけが残っている。30はハリ賀安山岩の石核でPit. 11から出土した。打面は調整打面で、全面に剥離を加え平坦面を造り出している。打撃方向は上下二方向であるが、主体的には下からの剥離により剥離面が傾斜を持つため上からの剥離を行なっている。裏面にも剥離が認められ、これは上からの加撃が主である。31はPit-173から出土した黒曜石の原石で、このほかにも15点の原石が出土している。32は包含層から出土したナイフ形石器である。腰岳の黒曜石を原石としており風化かなり進んでいる。素材は縦長剥片を用いており、先端部が欠損している。素材となった縦長剥片の打面側を剥取し、素材の右側を刃部とするナイフ形石器である。素材は上・下・横と四方向からの剥離が認められるが、横位の二方向は主要剥離面からの剥離であるため、ナイフ形石器の作成工程で剥離されたものである。また下位の下からの剥離は、基部が欠損していることからその時点での剥離痕と考えられる。基本的には素材となった縦長剥片はすべて上からの加撃によって剥離されたものである。左側面と基部、右側面の1/4程度にBlanting加工を施しているが、加撃方向が主要剥離面側からの加撃と表面からの加撃がみられる。表面からの加撃は刃部上位にあたる部分に施され、意識的に背の角度をかえるために施した可能性が高い。基部の部分の背は主要剥離面から鋭利な角度で剥取しているのに対し右刃側は、やや角度を持つ加撃を行なっている。実寸が5cm、復元長が6cmで中型に入るナイフ形石器であり、諸岡遺跡から出土したものの中類似するものは、二側面に調整された石器とする（福岡市埋蔵文化財調査108集、杉山富雄）にやや類似するが、むしろ佐賀県から出された石器とする（福岡市埋蔵文化財調査108集、杉山富雄）にやや類似するが、むしろ佐賀県から出

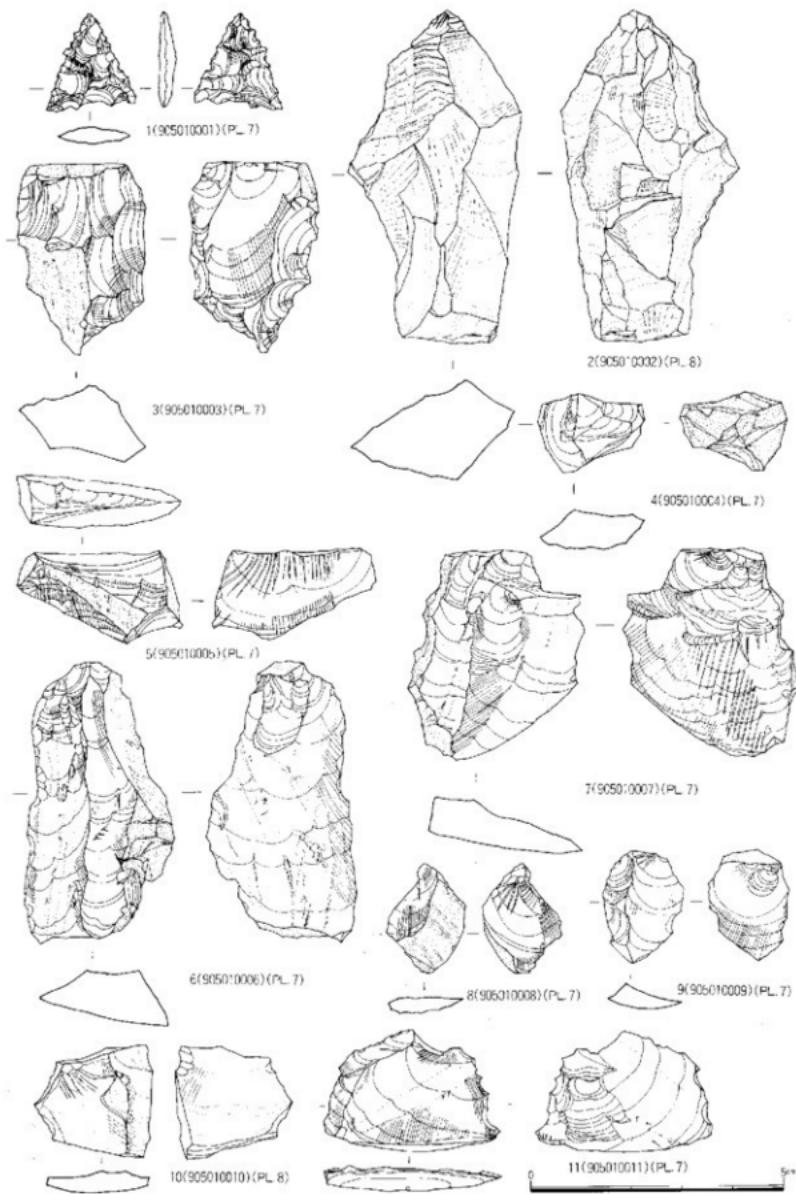


Fig.18 出土石器実測図－I (縮尺 1/1)

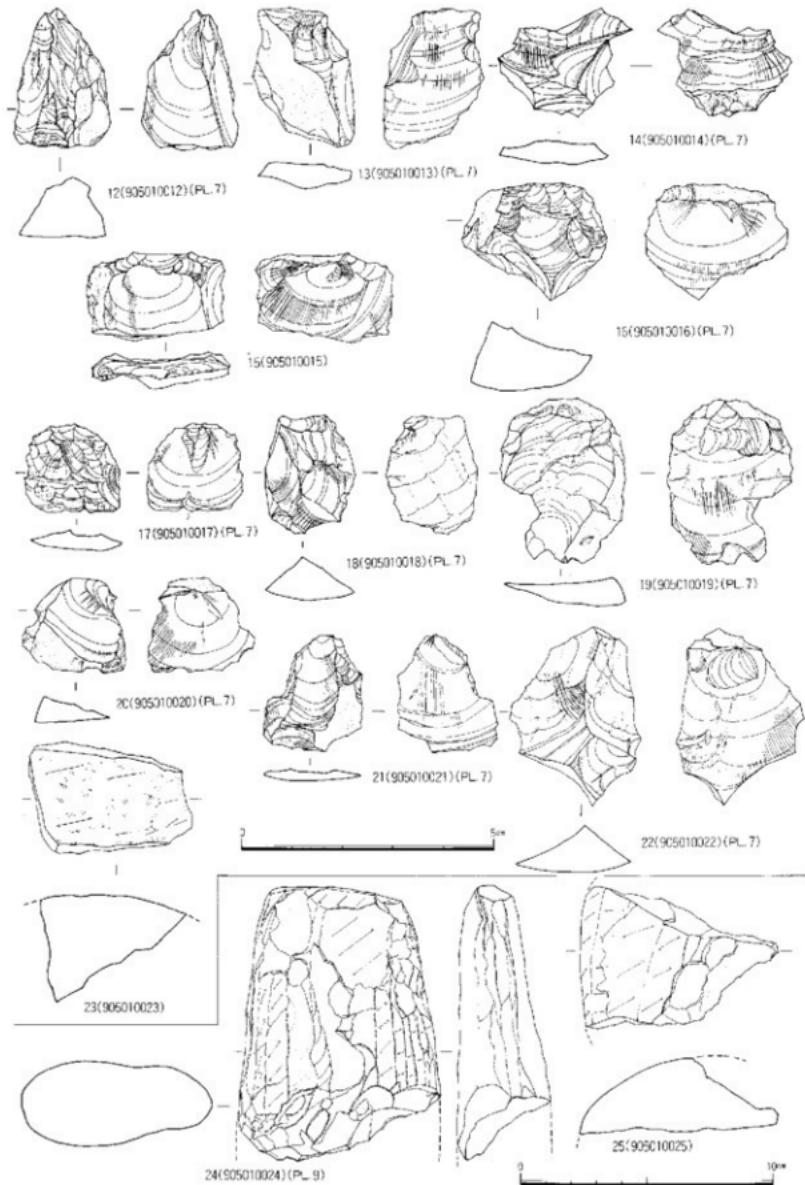


Fig.17 山土石器尖削器-2 (縮尺1/1 · 1/2)

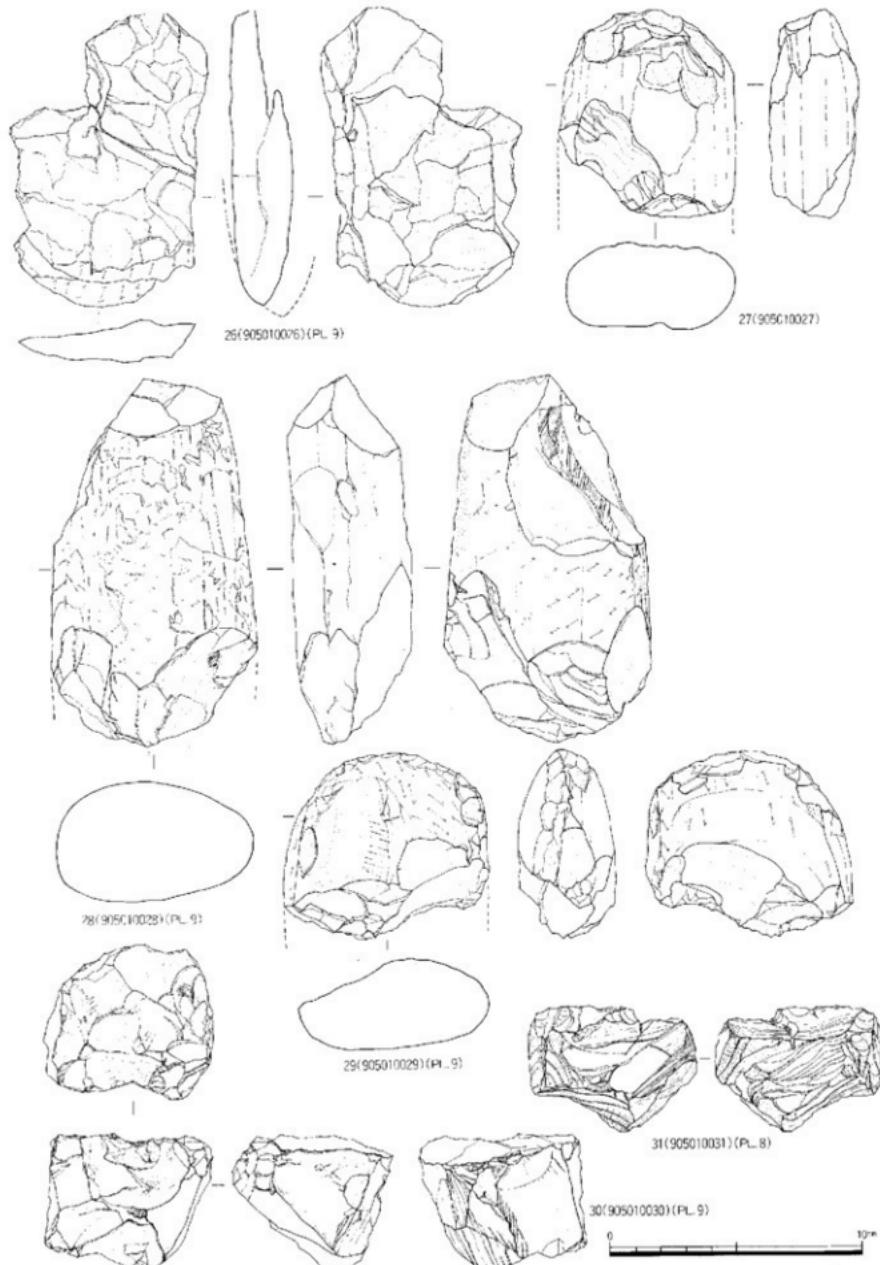


Fig.18 出土石器実測図 - 3 (縮尺 1/2)

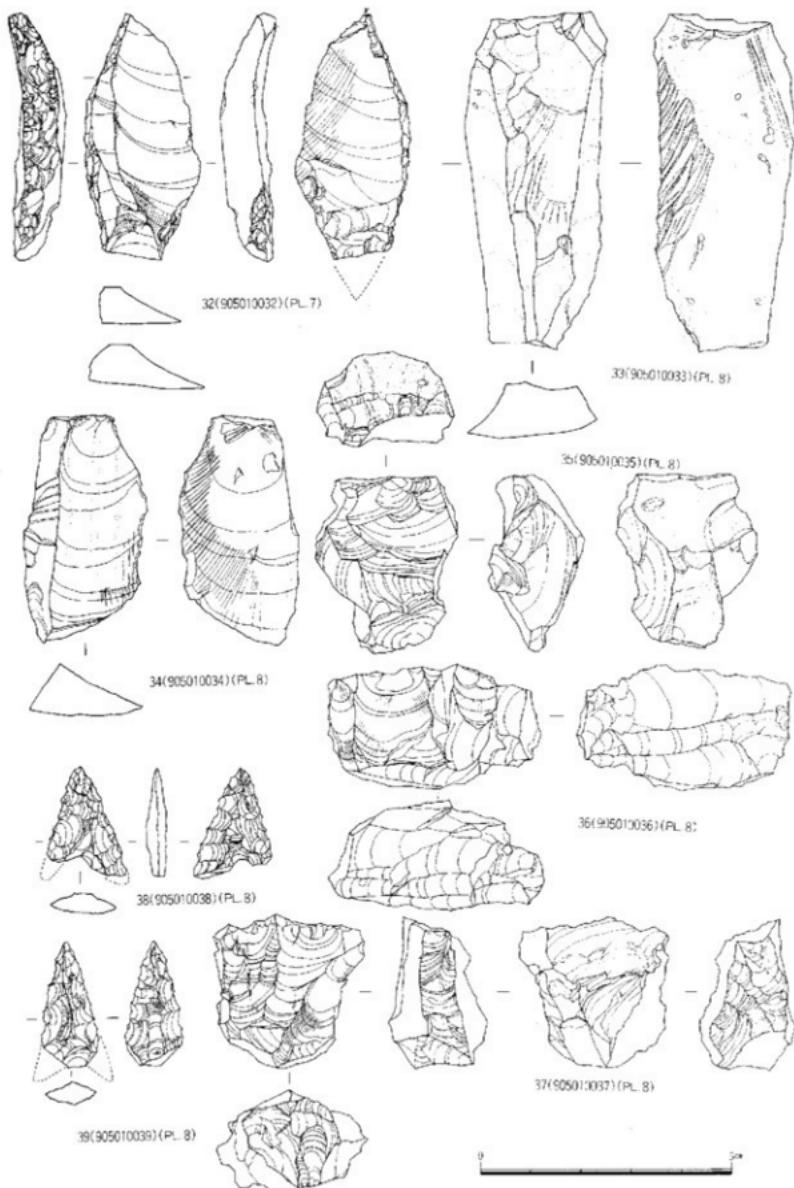


Fig.19 出土石器尖削器 - 4 (縮尺 1 / 1)

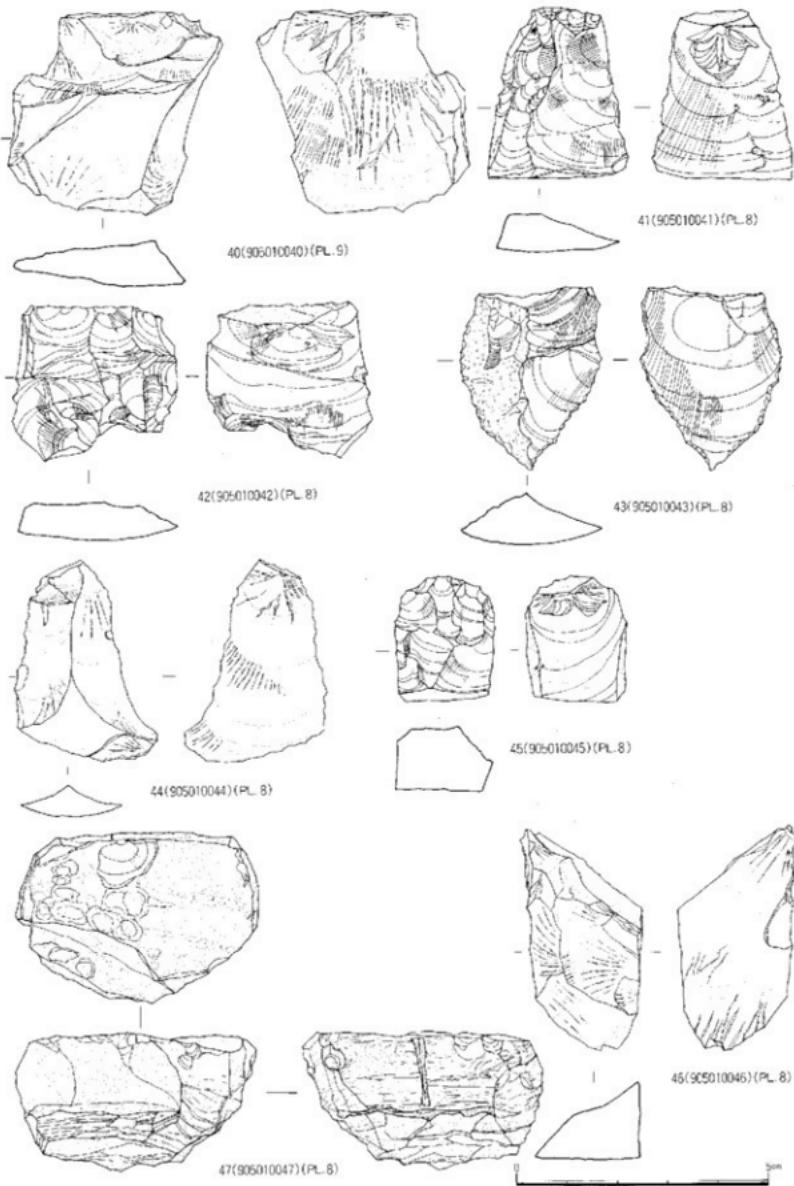


Fig.20 山土石器実測図-5 (縮尺1/1)

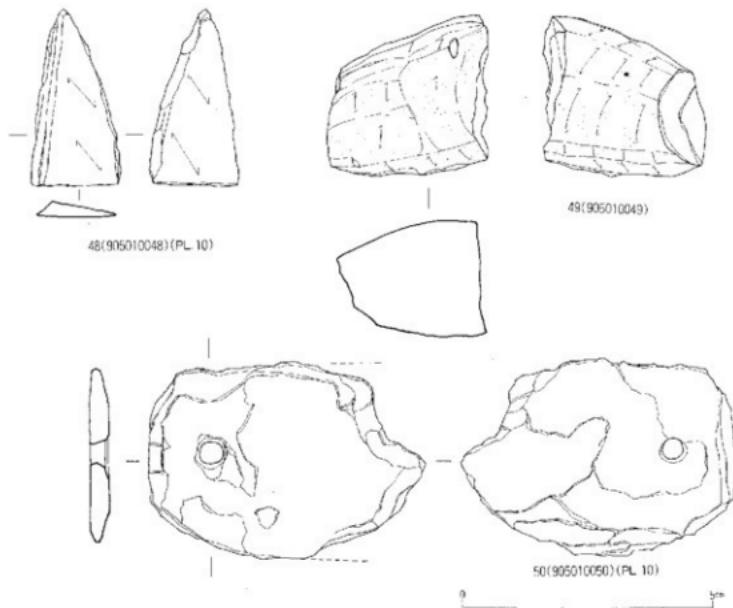


Fig.21 出土石器実測図-6 (縮尺1/1)

土するナイフ形石器（例えば佐賀県原遺跡、伊万里平沢良遺跡）に類似している。時期的には刀器を主体とし、ナイフ形石器が主流をなす時期に想定できる。**33**はSK-05から出土したサヌカイト製の刃器である。打面は平坦打面である。表面の剥離加撃は、上下二方向を持ち、上からの剥離面は中央部のみである。下からの剥離は縦長の長い剥離面を残すことから剥離技法としては、上下二方向から行なう技法を有する。このことからかなり水準の高い技術を有していたものと考えられる。風化が著しく乳白色を呈する。全長6.6cm、幅2.5cm、厚さ1cmを測り、周辺部に細かな剥離痕が認められる。**36**はPit 157から出土した黒曜石製の石核であるが、素材となったものは旧石器時代の細石核であり、新旧の風化の進み具合が明らかに異なるものである。細石核の側面を打面とし、上から3条の加撃を行なって剥片を剥取している。素材となった細石核は、打面が平坦で、一部調整痕が認められる事から調整打面である。剥離方向は上からの一方向で柱状の形態を持ち、表・裏面を剥取の面として行なっている。下位にみられる剥離は側面調整のための剥離面で横方向から行ない膨張部分を削除する役割を持っていたと考えられる。以上3点の旧石器時代の遺物は、包含層・Pit内から出土したものであるが、諸岡、板付地区には洪積層（Aso-IV）が堆積しており、鳥栖ローム、八女粘土と呼んでいる。このローム層は比恵から春日に統く那珂丘陵に堆積し、比恵、那珂遺跡の各地点から散発的に出土しているが、今回調査した那珂遺跡群第41次調査にて数多くの旧石器時代の資料が出土している。この様に板付周辺には数多くの旧石器時代の遺物が包含されているが、将来遺構が検出される可能性は高い。この3点の時期はナイフ形石器、刃器が中期旧石器から後期旧石器にかけての時期であり、細石核は旧石器時代末に位置付けられるものである。ナイフ形石器と刃部の技法の相違は、ナイフ形石器

が縦剥ぎ技法で上からの加撃によるものであるのに対して、刃器は上下二方向の加撃面を有している。原石の相違にもよるが、技法的にはナイフ形石器の方が新しく、刃器が古い様相を示している。**34**はPit-25から出土した黒曜石の縦長剝片である。打面は自然面で両面にバルバースカー・バルブを残し、上からの加撃によって剥取している。両側辺部に細かなリタッチが認められ、使用されたことを物語るものでU-Flake（使用痕のある縦長剝片）である。**35**はSX-21から出土した黒曜石製の石核である。打面は左からの大きな剝離により平坦面を造り、その後細かな剝離によって調整面を作る調整打面である。打撃方向は上からの加撃が主であるが、下位には下からの剝離と横位からの剝離が認められ、これは階段状剝離した面を修整するために行なわれた剝離である。側面は横からの加撃によって側面調整を施こされており、裏面は自然面を有する。**37**もPit-162から出土した黒曜石製の石核である。打面は裏面からの加撃によって剥取された平坦打面で調整剝離は認められない。下位の剝離は剝片剥取の際本端部を平坦にする目的で剝離されたもので、二方向からの加撃を行なっている。両側辺部は上・下・横位からの加撃を行ない側面を調整している。表面は主に上からの加撃を持ち、裏面は自然面と横位からの剝片を行なっている。**38**はSD-02から出土した黒曜石製の石鎌である。両脚部を欠損（右脚は末端部のみ）している二等辺三角形を呈する鎌であるが、左脚が細身であり、バランスがとれていません。両左右、下からの押圧剝離によって仕上げている。**39**は両脚を欠損し、包含層から出土した黒曜石製の石鎌である。両脚を復原すると岡の様に脚部の短かい先端の尖がった石鎌となる。両面とも大きな剝離によって形を整えている。**40**はPit-27から出土した黒曜石の剝片である。打面は自然面であり、バルブ・バルバースカーが残る。表面は上・下・横位からの剝離がみられる。**41**も縦長剝片である。包含層から出土しており、打面は自然面である。表面は上・横位からの剝離がみられ、側辺部に細かな使用痕が認められる。剝離面再生剝片かもしれない。**42**はSK-15から出土した黒曜石の縦長剝片である。打面は自然面で大きく厚く剝離している。表面は上・下二方向からの剝離面が観察される。**43**はPit-24から出土した透明度の高い良質の黒曜石を石材とした使用痕のある剝片（U-Flake）である。打面は平坦打面で、一回の大きな剝離面を持つ打面である。表面は上・横位からの二方向の加撃方向を有し自然面をも持つ。周辺部に細かな剝離面がみられる。搔器としての役割を持っていたと思われる。**44**はSK-03から出土した黒曜石製の縦長剝片である。打面は平坦打面で大きな剝離を持つ打面である。バルブ・バルバースカー等が残りやや幅広の剝片である。表面は基本的には上からの加撃による剝離である。**45**はPit-173から出土した黒曜石の原石である。直方体を呈するもので、石核の材料としては良好なものであろう。**46**はSK-03から出土したサヌカイト製の剝片である。打面は小さいため明らかではないが石核の横位から剝離されたことが明らかである。表面は横位から二方向があり、本末縦長の剝片を剥取するものであったことを窺わせるものである。**48**はSK-15から出土した凝灰岩質の石剣の先端部と考えられる。

全面に研磨され先端部を破損し、末端部は折れている。**49**はSX-06から出土した花崗岩製の磨石で両左右が欠損している。全面に研磨されているものである。**50**はSD-01から出土した凝灰岩質の石庖丁である。SD-01は室町時代の遺構であるからこの石庖丁とは無関係と思われ、弥生時代の遺構を破壊したか、他の遺構からの流出によりSD-01の埋土内に入り込んだものと考えられる。形態的四角形を呈するもので約半分以上を欠損している。現存する穿孔部は左側辺部に近く穿孔印の位置として不適当であるが、大型ではなく小型であればこの意味も理解できる。

刃部は鈍く研磨もあまり施こされておらず、未製品の可能性も高い。穿孔部は表面からの一方向のものである。

## 第2節 第61次調査の記録

### 1. 調査概要

第61次調査地点は内環濠の南東側に位置し、第34・36次調査地点の南側にあたり車道505号線の調査地点の東側に位置する。調査対象面積は687m<sup>2</sup>であったが確認調査のため幅4.5m、長さ23.1mの約100m<sup>2</sup>のトレンチ調査を行なった。調査は1990年12月1日から1月31日の2か月を要した。

第36次調査で検出された外環濠（SD-01）は第34次調査地点で弥生中期の溝によって切斷されその方向性が問題となっておりその確認の意味でも調査を実施した。

### 2. 調査の記録

調査面積は100m<sup>2</sup>であるが数多くの成果を得た。現代の水田面から数えて9面の水田面を検出し、それに伴う畦を7条、杭列遺溝2条、溝状遺構を3条検出した。最下層では第34次調査地点から検出された外環濠のSD-01と弥生時代前期のSD-02が両方とも検出された。

#### 土層と遺構（Fig.23・24）

平面的に確認できた水田面は3面であるが、土層において畦や足跡を確認でき9面の水田面を検出した。

第Ⅰ層は客土である。第Ⅱ層は現代まで使用されていた水田面でこれが第1面である。第Ⅲ層は褐色土層で土器器の皿が出土した。これが第2面の水田面である。第Ⅳ層は砂層で、これは全面に確認されている。第Ⅴ層は青灰色シルト層で調査区中央部でなくなっている。第Ⅵ層は鉄分を多く含む茶褐色粘質土層で東に厚く西に薄い。これは第36次調査で検出された中世の整地層であり、36次ほど土器の堆積はなかった。これが第3面の水田面である。第Ⅶ層は黒褐色粘質土層で、これが第4面の水田面と考えられる。3面でも同じ位置に畦畔状の凸が確認されている。第Ⅷ層は荒い砂が堆積しているが、中央部附近で薄くなる。しかしあわざではあるが、VII層とVIII層との区別する部分に認められる。第IX層は明灰色の砂を含む粘質土で、中央部になると鉄分を含む褐色粘土層となる。第X層は黑色粘質土層で第6面の水田面である。Fig.24-1がその平面図である。東側4mに畦畔（第1畦畔）があり、幅70cm、厚さ10cm、方位N-16°-Wを測る。西側に溝状遺構が検出されたが、その東側に畦畔（第2畦畔）がある。東側畦畔は幅1.5m、厚さ15cm、N-6°-Eをとる。第1と第2畦畔の間は北側で8.3m、南側が10mある。西側にある溝は方向がN-4°-Eの方向をとり、幅1.8m~3m、深さ45cmを測る。おそらくこの水田址は出土遺物（Fig.27-26~28-50）の一一番新しい土器から弥生時代中期に比定できるものと考えられる。第XI層は青灰色粘質土層で水田面7面にあたる。7面はFig.24-2の平面図で杭列が2条、畦畔が2条、取水口と思われる凹状遺構が検出された。東側の杭列は2条検出され、方位N-30°-Wをとり28本の杭が打ち込まれている。これを第3畦畔とするが、この杭列を中心に左右1mずつ計2m、深さ10cmの高まりが観察される。この第3畦畔から西に4mで第4畦畔となるが、その間に杭や横木が出土している。第4畦畔は幅1m、深さ15cm、方位N-36°-Wをとる。この第4畦畔の西側に矢板（Fig.25-1）列が検出された。これは取水口と第4畦畔を通るもので、護岸のために設けられたものと考えられる。矢板列の裏込め部分から石斧柄が出土したが、調査途中で盗難を受けた。取水口は最大幅が5m（両側断面部分）で深さ30cmを測る。この部分に入る土層は砂であり、底面からヒヨウタン（Fig.30, PL.3）と杭列が検出した。第4畦畔の西側に第5畦畔がある。方位N-5°-Wの方向を持ち、幅3.5cm、深さ10cmを測る。この第5畦畔と直角に4本の杭列が並ぶ。第6層は第7

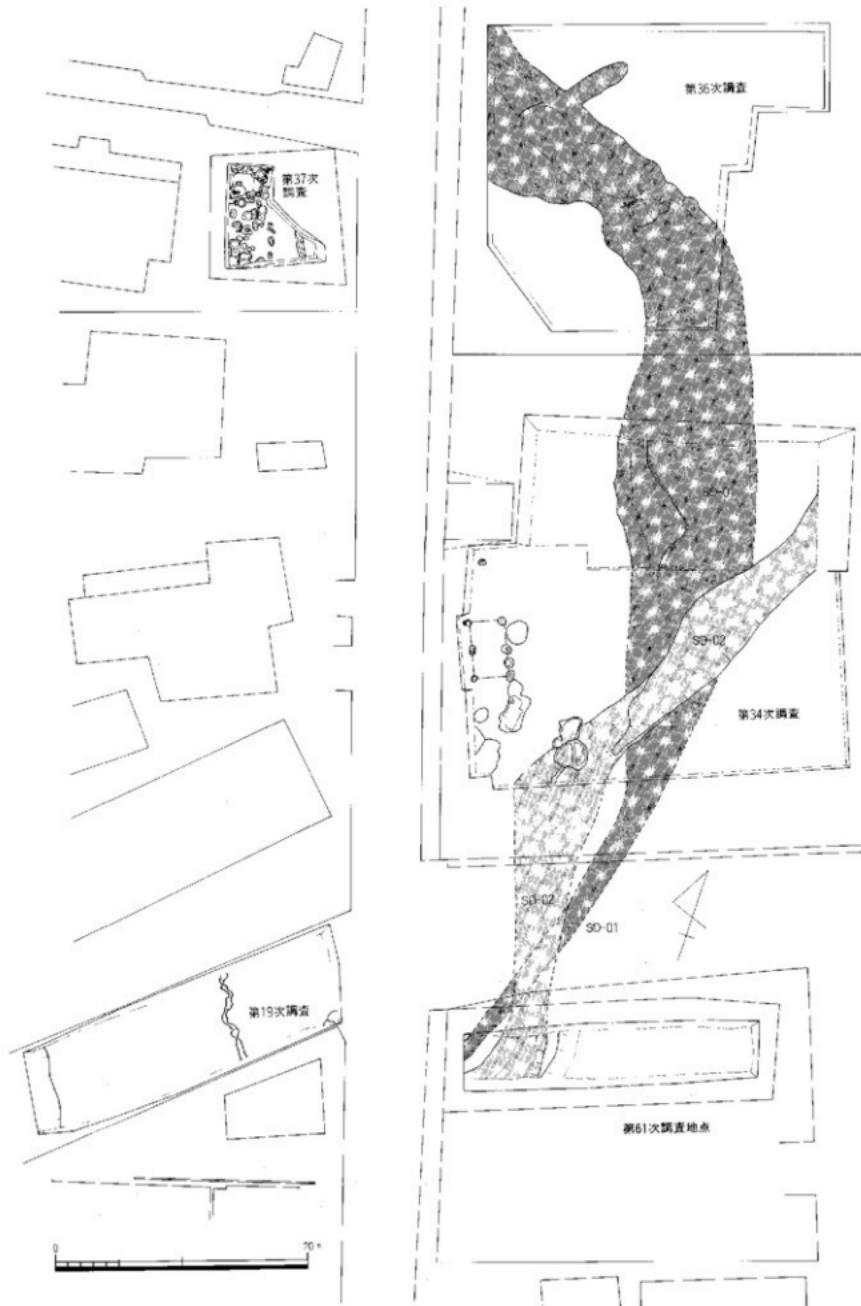


Fig.22 第61次調査地点位置図 (縮尺 1/400)

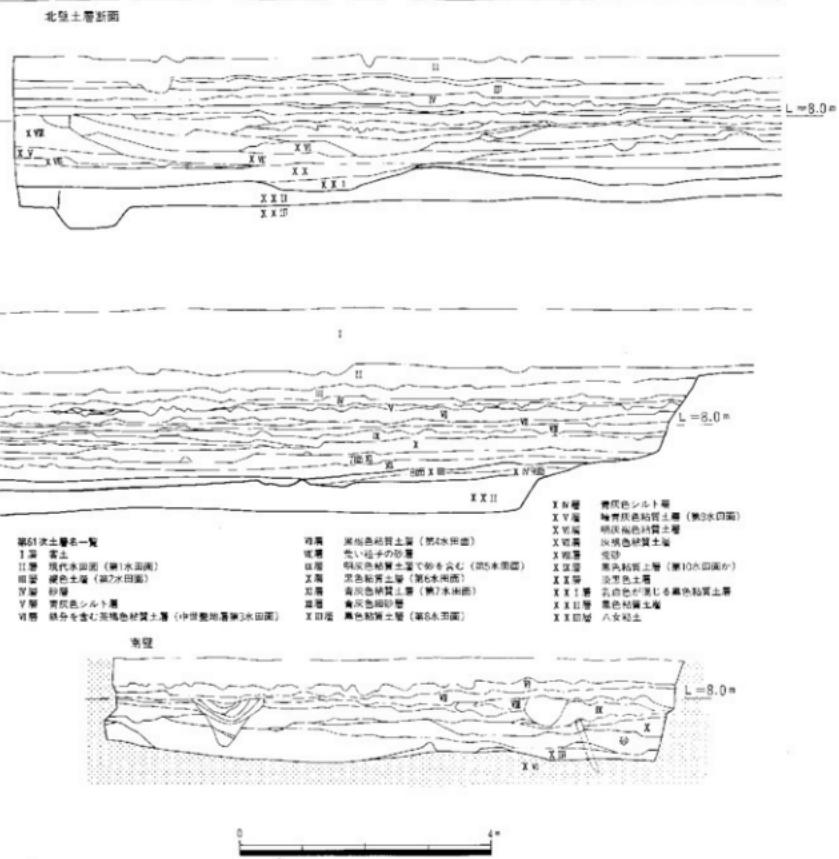
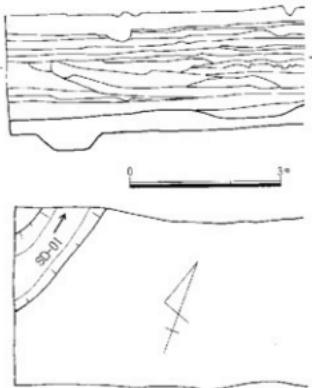
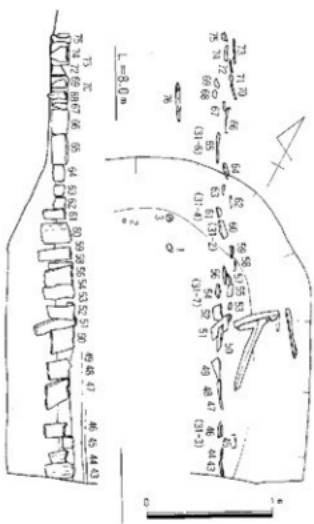


Fig.23 土層図（縮尺 1/80）

面と第8面の間に青灰色細砂層があり、東側が薄く西側にいくほど厚く堆積している。最大の厚さは50cmである。第XIII層は黒色粘質土層であるが中央部で土層の青灰色細砂層に流されている。西側に薄く堆積し、第8面の水田面である。第XIV層も同様に第X層によって流され中央部にはない。第XV層は暗青灰色粘質土で第9面水田面である。第9面はFig.25-2が平面図である。西側に縦長い畦畔がある。これが第6畦畔である。幅20~100cmで、段落ち部分がゆるやかで、西側は溝状遺構となる。その溝状遺構の西側にも第7畦畔がある。溝状遺構（SD-02）の方位はN-6°-Eをとり、幅3m、底面の幅0.6mを測る。第7畦畔は幅1.1cmを測り、方位はN-18°-Eをとる。第10面はSD-01から立上がりた黒褐色粘質土（XIX層）で第10面の水田面である。一部SD-02によって破壊されている。SD-01は方位N-19°-Eをとり、幅1m、底面幅60cmを測る。XV層からXVI層までは西側にみられる層序である。XVI層は明灰褐色粘質土、XVII層は灰褐色粘質土、XVIII層は荒沙、XIX層は黒色粘質土、XX層は淡黒色上、XXI層は乳白色が混る黒褐色粘質土である。XXII層は黒色粘質土層である。XXIII層が八女粘土層である。



Fig.24 第6・7 水田面検出平面図 (縮尺 1/100)



SD-01造構検出状況

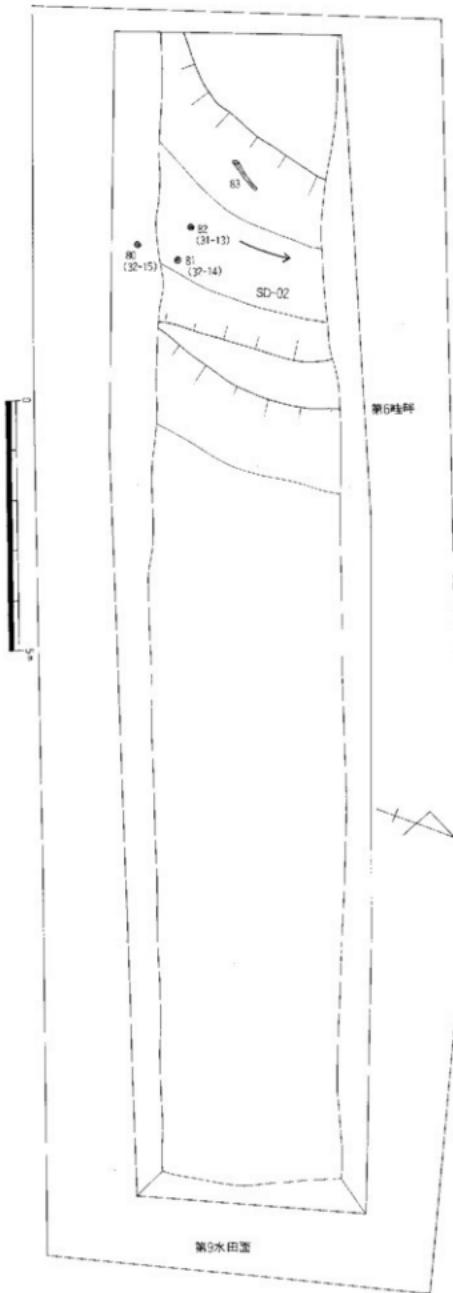


Fig.25 第9・7水田面検出杭列造構配置図(縮尺1/40・1/100)

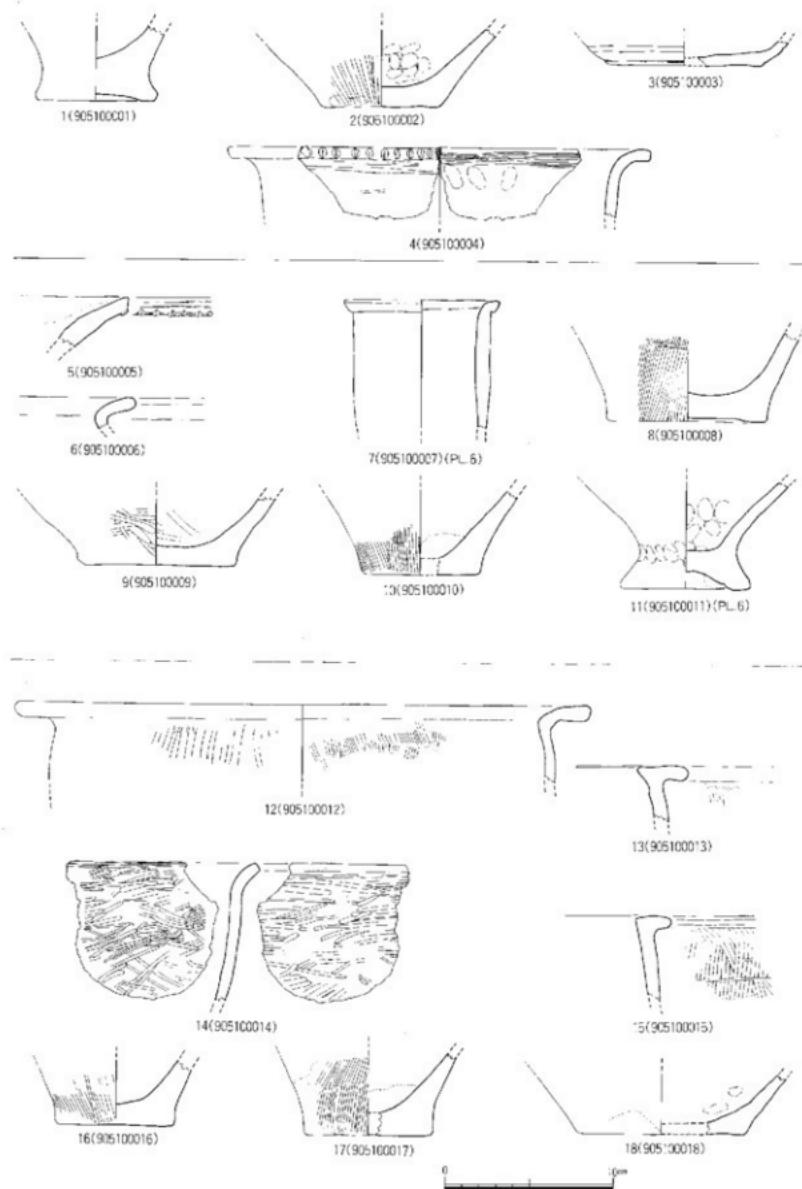


Fig.26 出土土器実測図-1 (縮尺 1 / 3)

### 3. 出土遺物

出土遺物は各層から土器・石器・木器等の遺物が出土した。

#### 土 器 (Fig.26~29 PL. 6)

土器は水田面からの出土はまれでそれに附隨する施設（溝・井堰等）からと各砂層から出土している。1~4まではIII層の第2水田面内より出土した遺物で、土師器・弥生式土器等が含まれているもので3の土師皿から中世以後の可能性が高い。5~11はIV層の砂層からで種々多様な土器が出土した。12~18までは中世に整地された面で、第36次調査で検出された水田面の上層と同じであり、当遺跡も同様で、36次調査の様に一面に土器が敷きつめられた状態に近い状況であった。その内の7点を図示したが、弥生時代前期から中期にかけての土器がほとんどである。19~24はV層砂層から出土した土器で、この一群は中期から後期初頭の土器が主体である。25~51の土器はX層の第6水田面（特に取水口から出土）からのものである。25は鉢形を呈する土器で、内外面にヘラミガキを施す。26は口縁下と胴部に刻目突帯を有するもので、胴部の刻目突帯から垂直に立上がる。内外面とも貝殻条痕を施す。口径21cm、最大径22cmである。27は口縁端に刻目を施し、内外面とも刷毛目を施す変形土器である。口径21.4cmを測る。29は壺形土器の口縁部で「T」字状口縁に近い形状を呈する。30は壺形土器の胴部片で、表面に沈線で円弧文を描いている。31~41は甕・壺形土器の底部である。甕形土器の底部31、32、36の3点を図示したが、表面には刷毛目を施す。これに対して壺形土器の底部33~35、37~40には刷毛目調整を施すもの33、35、37、40とミガキによる調整を施すもの34、38、39がある。41は底部が上げ底となる壺形土器の底部で底径8cmを測る。42~51までは第6水田面の黒色粘質土層中から出土した土器群である。42は大形変形土器の口縁部である。43は口縁下に刻目を施す変形土器で底径8cmを測る。内外面は刷毛目を施している。44は大型変形土器の口縁部である。46~47は壺形土器胴部片であるが、表面に直弧文を配するところから図示した。49~51は甕・壺形土器の底部である。49は底径7.6cmの変形土器（幅として使用）の底部であるが、底面に木の葉文様を配する。穿孔は直径2cmで、焼成後あけられたものである。50は壺形土器の底部で底径9cm、51は鉢形土器の底部で底径9.6cmを測る。52~55は第7水田面から出土した土器群である。52は蓋で口径35.2cmを測る。表面には丹塗りの痕跡が認められる。53は表面がススに覆われた壺形土器である。口縁は一応逆「L」字状を呈するが、一部口縁が下がりぎみの部分がある。54は底径6.6cmを測る壺形土器の底部、55はメンコである。

56~70までは最下層から検出されたSD-01から出土したもので、本来の目的であった外環濠の一部を検出できた。56は大型の壺形土器胴部である。57は鉢形土器の口縁部で内外面とも丁寧な研磨が施されている。口径35.7cmを測る。58は口縁下に刻目突帯を巡らす変形土器である。59は壺形土器の胴部、60は壺形土器の口縁部で口径18.6cmを測る。内外面に赤色顔料が認められる。61は大型壺形土器の口縁部で、口縁端を折り曲げて段を造る。口径39.1cmを測り、表面はヘラによる研磨が施されている。これは64とも共通するもので、64の方が口径28.4と小型である。65・66・68・69は壺形土器の底部でそれぞれ9.6cm、9.7cm、9.1cmの底径を測る。62は鉢形土器の口縁部で内外面ともヘラ研磨が施されている。口径21.7cm、最大径22.7cmを測る。63は大型壺形土器の胴部片であるが、表面に沈線による文様を形成している。この部分（凹み部分）に赤色顔料がみられ、他の表面も黒色の色調を呈することから顔料を塗っている可能性もある。70は口径20.7cm、最大径29.2cmを測る壺形土器である。内外面とも丁寧な研磨を施し、胴部上位に一条の沈線を巡らす。最大径は胴部下位にあり、板付I式に属する。

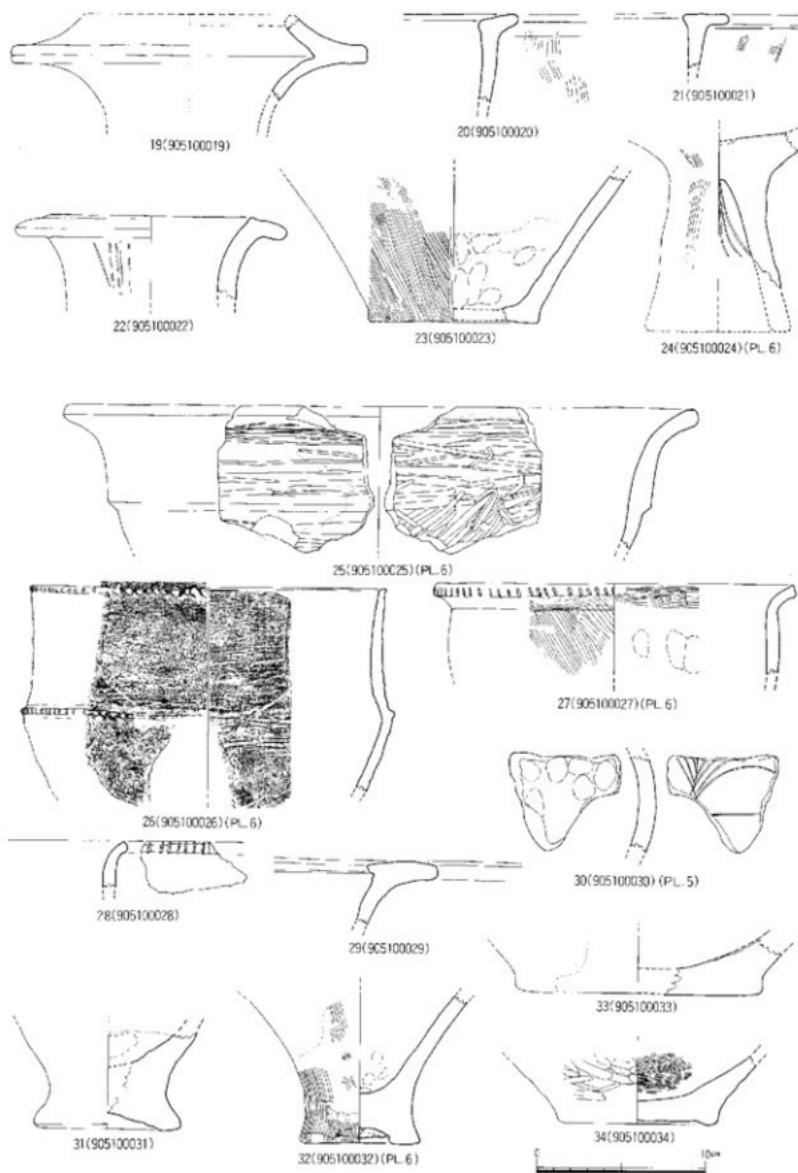


Fig.27 出土土器実測図－2（縮尺1/3）

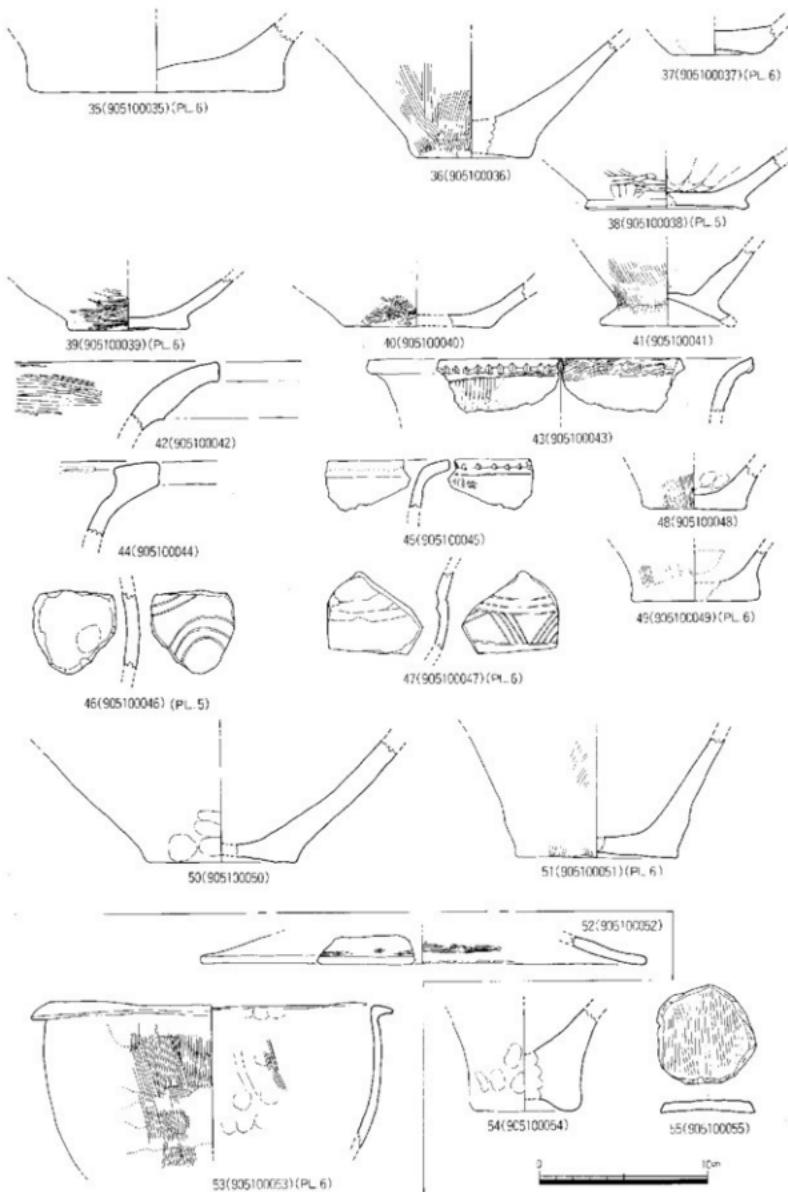


Fig.28 出土土器実測図 - 3 (縮尺 1/3)

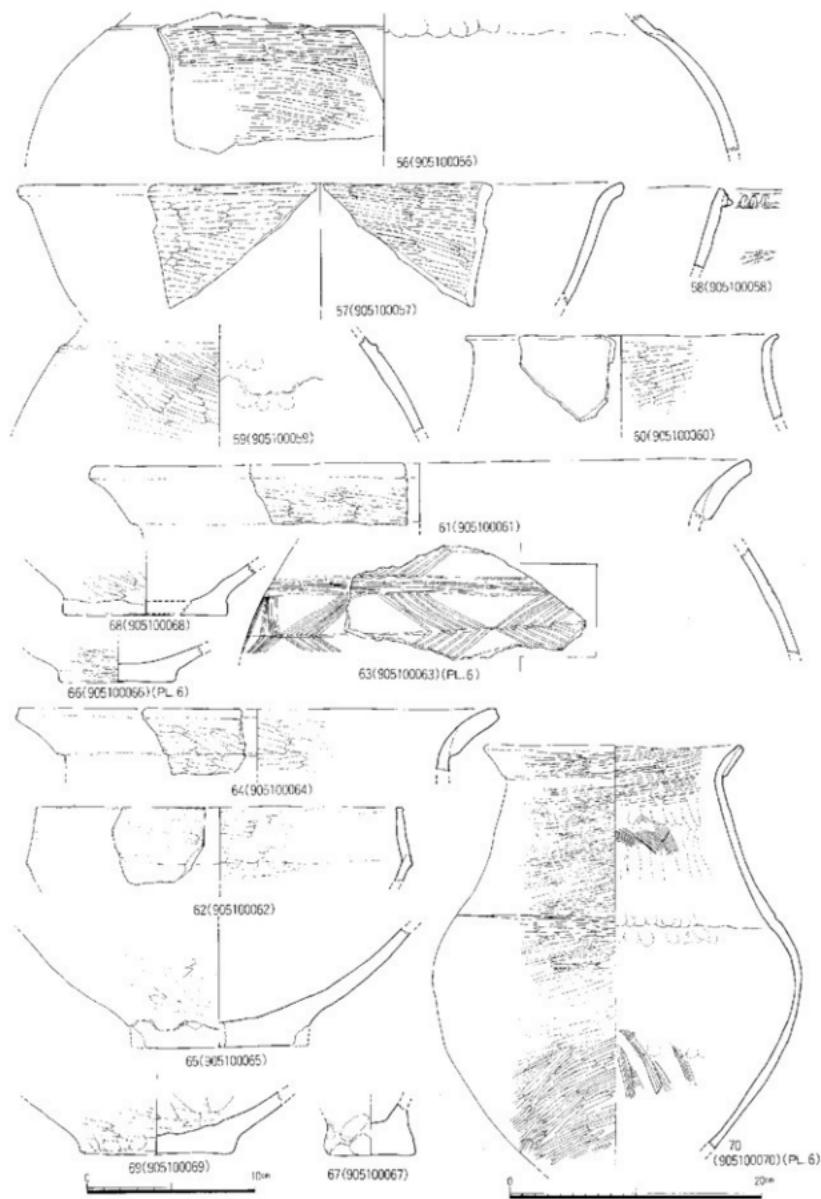


Fig.29 出土土器実測図-4 (縮尺1/3・1/4)

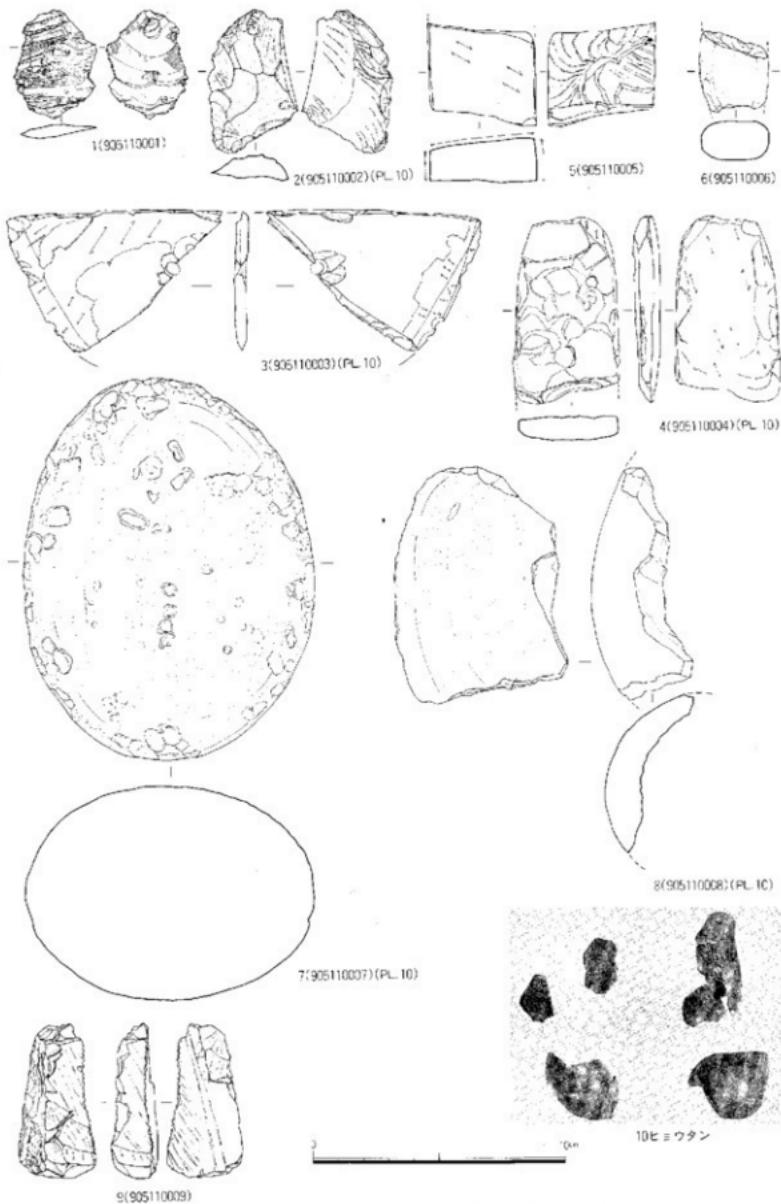


Fig.30 出土石器尖端図とヒヨウタン (縮尺 1/1・1/2)

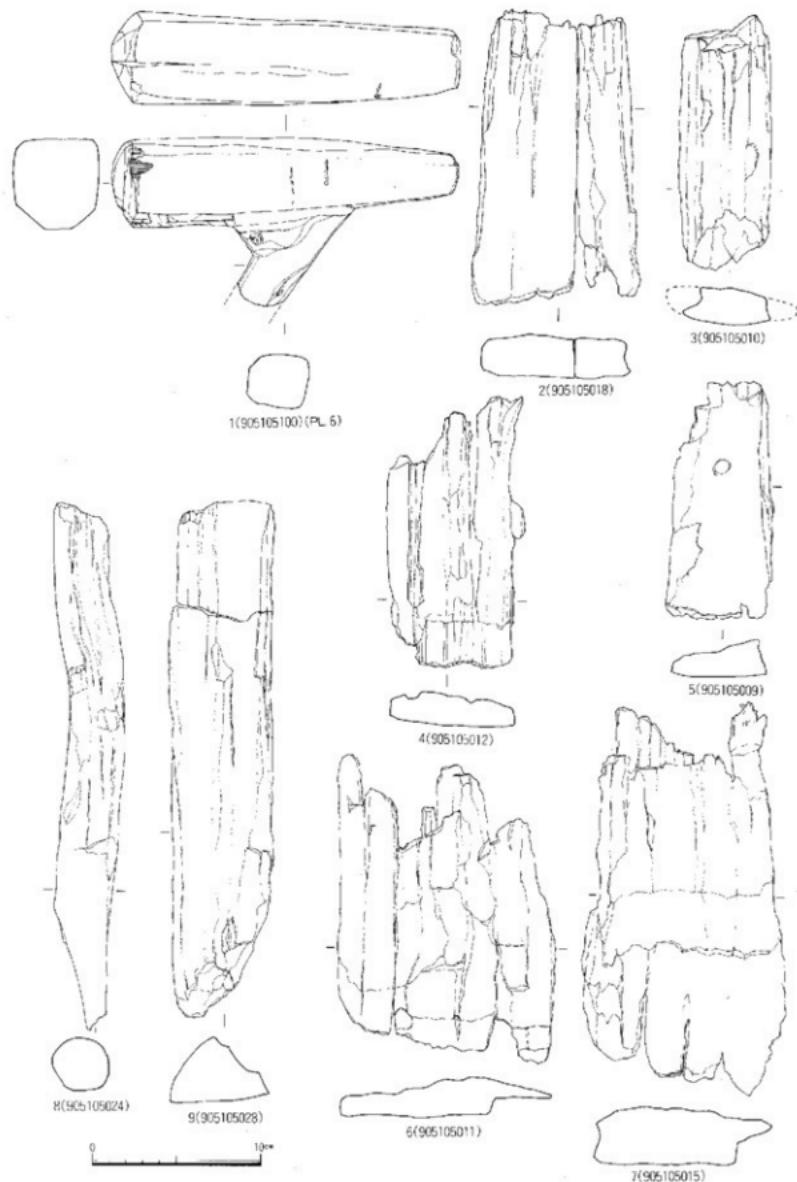


Fig.31 木器実測図-1 (縮尺 1/3)

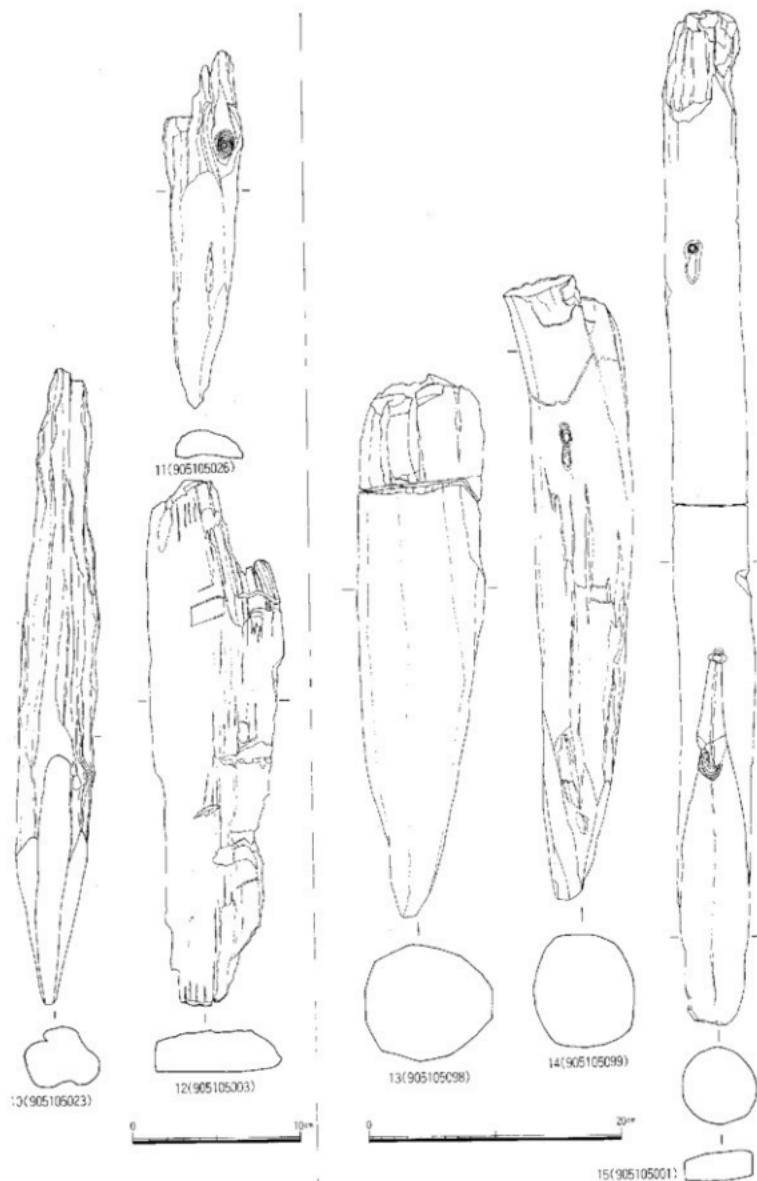


Fig.32 木器実測図-2 (縮尺 1/3・1/4)

## 石 器 (Fig.30 PL.10)

石器は9点図示した。他に黒曜石の剝片が出土している。1は黒曜石製の剝片でIV層の砂層から出土した。IV層の砂層自体全面に確認されていることVI層の水田面である第3水田面は中世の整地によって造り出されたものであるからIV層自体それ以後の氾濫であり、他の遺構から流出したものである。剝片は自然面の剝取時にみられる剝片である。打面は自然面であるが打点が極めて小さく一部ノッチ状の剝離みられる。3もIV層(砂層)出土の凝灰岩製石庖丁である。大型の石庖丁で形態的に三角形を呈するものと思われる。背はほぼ一直線であり、研磨は全面に施こされ、後で剥落したため研磨方向が不明な部分がある。現存する穿孔部分は1か所で両方からの穿孔が行なわれているが、右側(裏面)からの作業が主流をしめる。全面に研磨され刃部の形成も鋭利に仕上げられているが、右辺(裏面)の方が丁寧な仕上げとなっている。4もIV層砂層から出土した扁平柱状片刃石斧で頁岩製である。刃部を欠損するが一部左下端に刃部上端部(研ぎ出し部分)が認められる。右側刃が平坦に仕上げられている所から片刃石斧とした。左側刃部は刃部造り出し部分を除いて研磨は施こされていないが、右側刃は全面に研磨を施こしている。ただ周辺にはまだ剝離面がみられる。9もIV層砂層から出土した玄武岩製の搔器である。自然面が一部認められるのと同様に研磨部分も認められることから石斧片に二次的な加工を施こし搔器としたものであろう。

1で述べた様に石庖丁・石斧・搔器等の遺物が他の遺構から砂と一緒に流出したものと考えられる。6はX層の黒色粘質土層(第6水田面)から出土した硬質砂岩製の砥石である。全面に研磨された痕跡を持つが特に平坦面の上・下は良く使用されている。全体の形状は先端・下端部が欠損しているため不明である。7・8も同じくX層から出土した花崗岩製の磨石である。自然面の凹凸は残すものの使用頻度が高く7は打器としても使用されている。

2はⅩ層の青灰色粘質土層(第7水田面)の取水口から出土したサヌカイト製の搔器である。横長剣の周辺部に両面から二次加工を加え刃部を造り出している。10もX層の青灰色粘質土層(第7水田面)から出土したヒヨウタン(PL.3-6・7)である。

5は最下層のSD-01から出土した粘板岩製の砥石である。裏面は判別された状態のままであり、上下端とも欠損している。砥石面は三面を使用しており、粘板岩を使用しているところから仕上げ用の砥石である。

## 木 器 (Fig.31・32 PL.3・6)

木器は図示した以外に杭・石斧柄等が出土したが、石斧柄は調査途中で盗難を受けた。

**石斧柄** 第7水田面の取水口からヒヨウタンとともに出土した。素材となった木はカシ材で枝付きの材を切断し、台座部分と取手の部分に丁寧な加工を加えている。台座の部分は平坦面を造り出し、端部は精巧に造り出し断面六角形の形状を呈する。台座と取手の角度は45度を測り、取手部分は隅丸方形を呈する。台座の長さは19.5cmと3.3cm(狭い部分)、厚さ5.4cmと2.4cm、全体の大きさは幅5.1cm、厚さ5.4cmを測る。取手部分の幅3.3cm、厚さ3cmを測る。

**矢 板** 2~7は第7水田面の取水口附近にある第4畦畔に沿う形で、方位N-30°-Wをとる形で検出された。調査によって出土した矢板は31枚である。すべて矢板の末端部で割れた状態で出土しており遺存状態は悪い。矢板の幅自体もさまざま最大幅を持つものは30.5cm、最小のものは6cmを測る。2は長さ17.4cm、幅9cm、厚さ24cmで二枚に分離し先端部は細い。3は遺存長15cm、幅8.4cm、厚さ2.1を測る。先端部だけ加工を加えている。4は遺存長16.2cm、幅8.4cm、厚さ2.1cmを測り、先端部に加工を加えている。5の遺存長は14.1cm、幅6cm、厚さ2.1cmを測りこれも先端部だけが裏面からのみ加工を加え尖らせている。6の遺存長は18.3cm、幅12.9cm、厚さ2.4cmを測り、先端部だけに加工を

施こす。7は上端部の状態からほぼ完形に近い形状を示すもので上端部のつぶれはそれを物語っている。遺存長23.4cm、幅12cm、厚さ3.3cmで出土した矢板の中で最大の厚さを持つ。7からして他の長さも20~30cmにおさまるもので、厚さも平均して2cm~3cm内外におさまる。

**杭** 杭は三ヶ所で検出した。第7水田面の第3畦畔となる杭列と第5畦畔に直角に交差する杭列、第9水田面西側のSD-02内に打ち込まれた状態で検出した杭列がある。

第7水田面の第3畦畔となる杭列は方位N-30°-Wをとるが、杭の数28本で構成されている。杭列は二列となるが、東側杭列数15本、西側杭列数13本で構成される。杭と杭との幅は狭い所で30cm、広い部分で60cmを測る。この第3畦畔から、8・9の2点を図示した。他はすべて丸木杭（丸木杭と丸太杭という名称を用いるが、杭の太さによって区別する。5cm以下を丸木杭、5cm以上を丸太杭として使用する）である。8は丸木杭の代表格で片面からの削りだけ先端部を尖がらせるタイプと10の様に全周に削りを施し先端部を尖がらせるタイプがある。8の遺存長は31.5cm、3.6cmの径を持つもので樹皮はない。9は丸太材を八分の一に分割した矢板で片方からの削りにより先端部を尖がらせている。このほかに十六分の一に分割したもの等がある。現在長30.6cm、幅6cm、厚さ3.9cmで、丸太材を復原すると13.8cmでそれを八分割している。

10~12は第5畦畔の西側に直角に交差する杭列である。10が丸木杭、11が半割杭、12が矢板である。10は現在長39cm、直径4.2cmの丸木材に先端部のみに加工を加えて杭としている。11は半削された杭で両端から削り先端部を尖がらせて杭としている。全長21.3cm、厚さ1.5cm、幅3.9cmを測る。12は現在長31.8cm、幅7.5cm、厚さ2.4cmの矢板で、断面の右上端部に素材の円周部分が残る。これから約16cmの径を持つ材であったことが窺える。この16cmの径を持つ素材を横に裁断している。先端部はやや細身とはなるが尖がらず端部は平坦である。

13~15は第9水田面のSD-02と土層断面に確認された杭である。13・14はSD-02から、15はSD-02におさまるが第7水田面から確認された杭である。13は全長41.2cm、直径10cmを測る丸太杭で上部が欠損する。ほぼ全面に面取りを施し、先端部も全周からの削りによって先端部を尖らす。14は全長49.2cm、直径9.2cmの橢円形を呈する丸太杭で上部が欠損している。先端部は15cmの部分から削り痕がみられ、全周から施されて尖がる形状を呈する。15は全長80cm、直径6cmの丸太杭で、上端部が曲った状態であることから完形品と思われる。先端部は22cmの部分から削りを開始しており片面からの削りを施している。

### 第3章 小 結

第60次調査と第61次調査の記録を述べてきたが、ここでその成果について再度記述しておく。

#### 第60次調査の成果

1. 第1期に属する円形住居跡を検出し、それに伴う掘立柱建物・土壙墓等を検出した。
2. 外環濠の南側段落ち部分の検出はできなかったが、外環濠が推定地より狭い幅を有していることが確認できた。下水道工事に伴う調査では、台地の確認は出来ていないことから現在の道路敷きに位置するものと考えられる。
3. 内環濠内には削平のため住居跡が現存しないが、今回の調査で時期の近い住居跡が検出され、環境整備事業の大きな資料となった。
4. 第I期の道構は住居跡が西側に位置し、標高7.60mを測り、これに対して土壙は8.2mと高い。
5. 掘立柱建物は住居跡を挟んで南にSB-01、北に02を配し、SB-01は交替を行なったと思われる。住

居跡・掘立柱建物は低いところに配置され、土壌墓等は高い所に配置している。

第II期の遺構は土壌墓・不整形土壌しか検出されていない。住居跡等は他の場所に移動したものと思われる。可能性として内環濠内が最も有力であろう。

6. 第III期の遺構はさらに少なく溝1条と土壌状遺構1基だけである。しかしながら周辺部には多くの第III期に属する遺構が確認されている。
7. 中世の遺構は水田と溝4条・杭列が確認された。
8. 南西隅に包含層が検出されたがその中から旧石器時代の遺物であるナイフ形石器が出土した。また柱穴内から石核や刃器が出土している。板付・諸岡周辺には洪積層（鳥柄ローム、八女粘土：阿蘇第四火山灰・火災流）がある。これは比恵台地から春日丘陵にかけて認められる。

#### 第61次調査の成果

9. 外環濠の一部と考えられるSD-01を検出した。
  10. 板付遺跡群第34・36次調査（E-5.6,E-5 b地点）で不明確であったSD-01,02の関係が明らかとなつた。
  11. 水田面が9面検出され、各時代の様相が明らかとなつた。特にSD-02に伴う水田跡（第9面）が検出された。
  12. 溝及び畦畔は第7水田面第3畦畔を除けば台地の線と平行に配置している。
  13. 中世の時期に整地作業が行なわれているが、第60・61次調査区にも整地面が確認されており大規模な整地作業が行なわれていたことが判明した。
- 以上 調査によって明らかとなつた成果をまとめの代わりとする。

末筆ではあるが、調査に協力して下さった方々の名前を記して感謝の意を表したい。

株式会社 瀬戸日本ステンレス 中村スミ江 金沢春雄 金子国雄 植藤利雄 関義雄  
 留沢正幸 森山恭助 山崎光一 脇田栄 江越初代 関加代子 曽根崎昭子 濱地フサエ  
 森山タツエ 海内美也子 牛尾美保子 西田俊樹 青柳恵子 日名子節子 渡辺ちず子  
 蒲池雅徳 関義種 田出橋和男 内野和子 奥田弘子 久良木シズエ 舎川キチエ 広川道枝  
 本河富枝 村上エミカ 村上エミ子 尾崎文枝 石津満寿美 濱田登志枝

#### 参考文献

田崎博之「夜白式土器から板付式土器へ」 牛田祐二君追悼論集	1994	板付周辺遺跡00 福市教埋報告書第135集	1986
板付 福市教埋報告書第35集	1976	板付周辺遺跡02 福市教埋報告書第154集	1987
板付 福市教埋報告書第73集	1981	板付周辺遺跡03 福市教埋報告書第171集	1987
板付周辺遺跡(1) 福市教埋報告書第29集	1974	板付周辺遺跡04 福市教埋報告書第206集	1987
板付周辺遺跡(4) 福市教埋報告書第38集	1977	板付周辺遺跡05 福市教埋報告書第210集	1988
板付周辺遺跡(8) 福市教埋報告書第83集	1981	諸岡遺跡 - 第14・17次調査 - 福市教埋報告書第108集	1984
板付周辺遺跡00 福市教埋報告書第115集	1985		

# 図 版



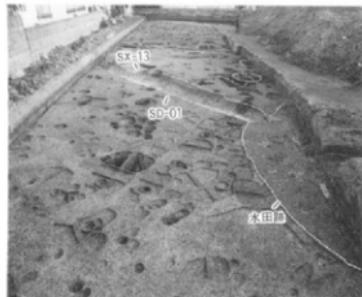
第60次調査SC-01出土土器



板付遺跡全景（西から）



1 60次調査近景（西側）



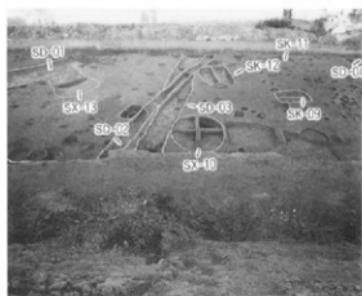
2 60次調査近景（東側）



3 60次調査近景（西側）



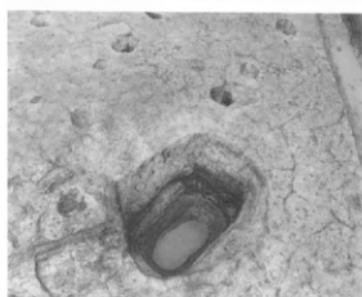
4 60次調査近景（東側）



5 60次調査近景（東側）



6 60次調査近景（東側）



7 60次調査SK-02検出状況（南から）



8 60次調査SK-03検出状況（西から）



1 61次調査区全景



2 第7面水稻田面と杭列



3 第7面水稻田面杭列近景



4 第7面水稻田面杭列近景



5 第7面水稻田面杭列検出状況

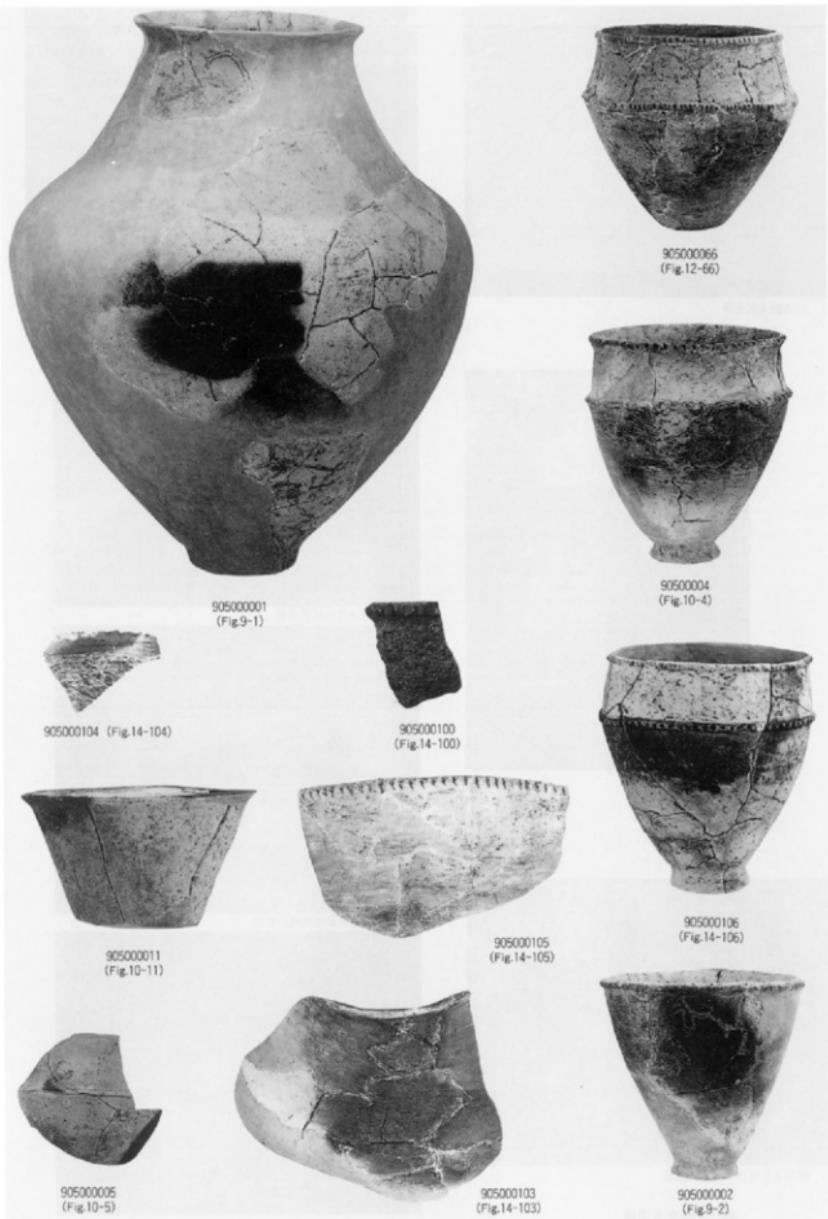


6 杖列とヒョウタン出土状況

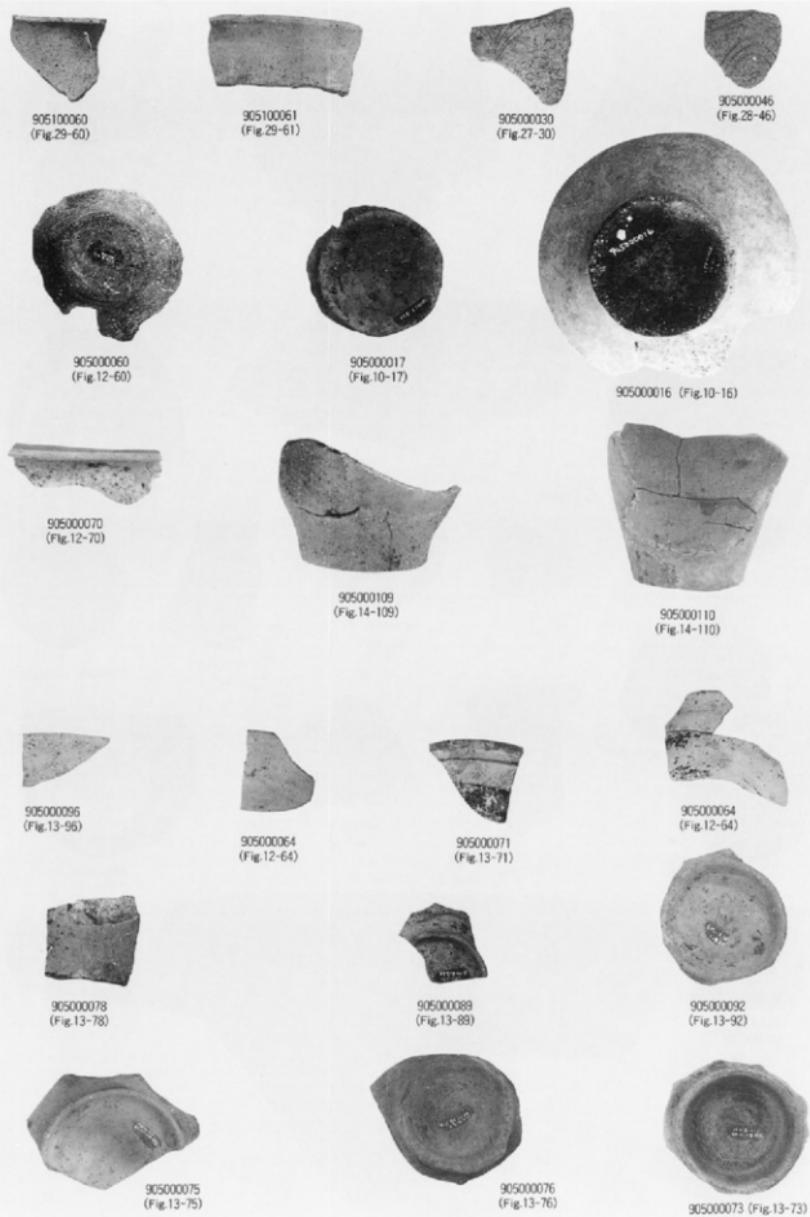
第61次調査各遺構

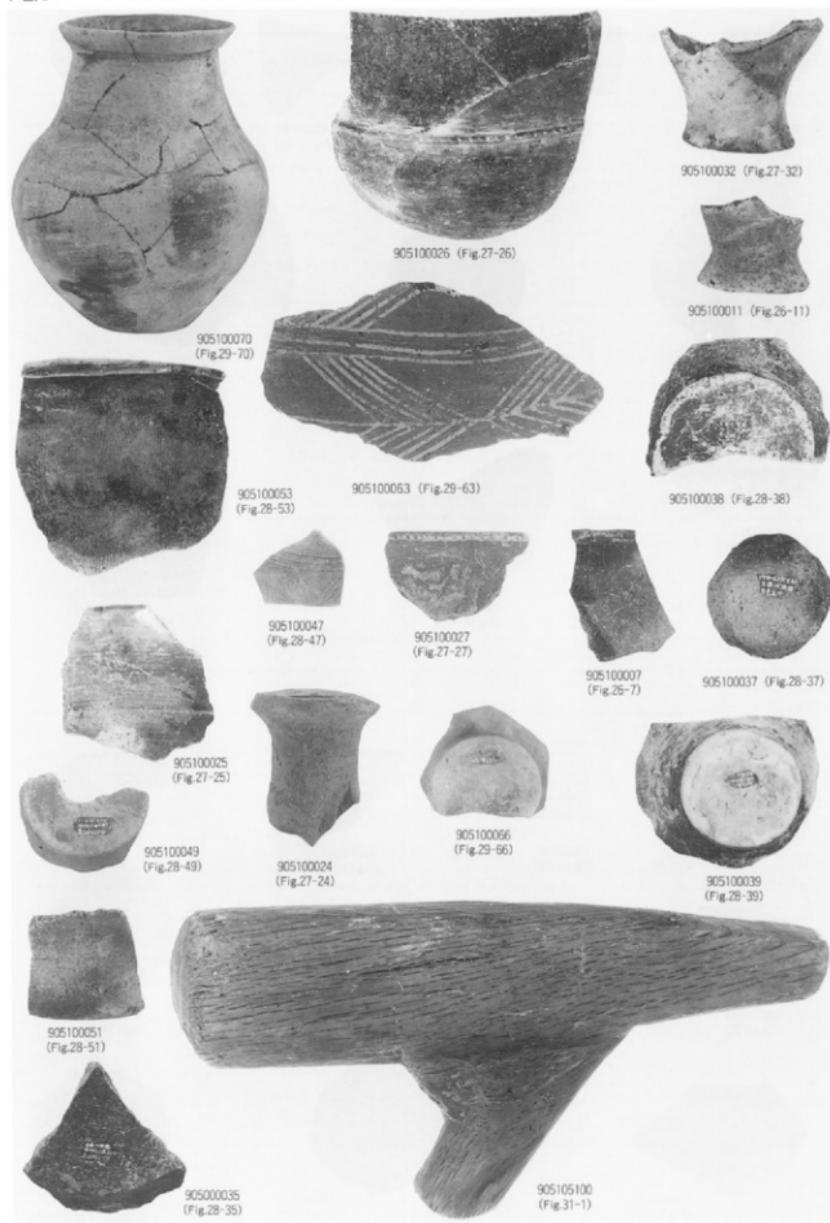


7 ヒョウタン出土状況



出土土器—1 (縮尺 1 / 2 )





出土土器・木器—3 (縮尺 2 / 3 • 1 / 2)





905010031  
(Fig.18-31)



905010034 (Fig.19-34)



905010035 (Fig.19-35)



905010036  
(Fig.19-36)



905010037  
(Fig.19-37)



905010038  
(Fig.19-38)



905010039  
(Fig.19-39)



905010041  
(Fig.20-41)



905010042  
(Fig.20-42)



905010043 (Fig.20-43)



905010045  
(Fig.20-45)



905010047 (Fig.20-47)



905010010  
(Fig.16-10)



905010033  
(Fig.19-33)



905010002  
(Fig.16-2)



905010044  
(Fig.20-44)



905010046  
(Fig.20-46)





905010048  
(Fig.21-48)



905010050  
(Fig.21-50)



905110002  
(Fig.30-2)



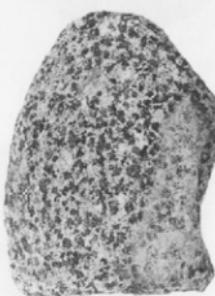
905110003  
(Fig.30-3)



905110004  
(Fig.30-4)



905110007  
(Fig.30-7)



905110008  
(Fig.30-8)

## 第4篇

### 第63～66次調査



発掘に参加した子供たち

## 凡例

1. 本稿は、平成3年度から平成5年度まで実施した南台地と外環濠推定地の調査報告を掲載している。
2. 遺構の実測は、佐藤一郎、池田由美、桑野正子、衛藤美奈子、小林真由美の協力をえて力武卓治が行った。
3. 遺跡・遺物撮影、遺物実測・製図は力武が行った。
4. 遺構は略号（竪穴住居=SC、土塹=SK、井戸=SE、ピット=SP、溝・落ちこみ=SM）をつけ、それぞれ通し番号を付けたが、遺物は埋蔵文化財センターの収蔵法にそって調査番号ごとに番号をつけた。
5. 製図図の方位は、磁北である。

## 目 次

第1章 第63~66次調査	1
1. 調査概要	1
2. 調査体制	1
第2章 調査の記録	2
1. 南台地の調査	2
I区の調査	2
II区の調査	12
III区の調査	28
小結	35
2. 外環濠の調査	36

## 挿図目次

Fig.1 板付遺跡航空写真	1	Fig.32 5号住居跡の遺物（縮尺1/4）	19
Fig.2 南台地発掘区（縮尺1/400）	2	Fig.33 5号住居跡の遺物（縮尺1/4）	20
Fig.3 1号トレンチの遺物（縮尺1/4・1/2）	3	Fig.34 5号住居跡の遺物（縮尺1/4）	21
Fig.4 1号トレンチの遺構（縮尺1/100）	3	Fig.35 6号住居跡（縮尺1/50）	22
Fig.5 1号住居跡（北西から）	4	Fig.36 6号住居跡の遺物（縮尺1/4）	22
Fig.6 1号住居跡（縮尺1/50）	5	Fig.37 7号住居跡（縮尺1/50）	23
Fig.7 1号住居跡の遺物（縮尺1/4）	5	Fig.38 7号住居跡	24
Fig.8 2・3号住居跡の遺物（縮尺1/4）	6	Fig.39 7号住居跡の遺物（縮尺1/4）	24
Fig.9 2・3号住居跡（南東から）	6	Fig.40 8号住居跡（縮尺1/50）	25
Fig.10 2・3号住居跡（縮尺1/30）	7	Fig.41 8号住居跡の遺物（縮尺1/4）	25
Fig.11 土塹（縮尺1/40）	8	Fig.42 1号井戸（縮尺1/40）	25
Fig.12 土塹の遺物（縮尺1/4）	9	Fig.43 1号井戸の遺物（縮尺1/4）	25
Fig.13 2号上塘（西から）	9	Fig.44 3号落ちこみの遺物（縮尺1/4）	27
Fig.14 1号溝（南から）	9	Fig.45 III区の遺構（縮尺1/100）	28
Fig.15 2号トレンチの遺構（縮尺1/100）	9	Fig.46 III区の遺物（縮尺1/4）	28
Fig.16 2号トレンチ（南東から）	9	Fig.47 III区（南から）	28
Fig.17 4号住居跡（縮尺1/50）	10	Fig.48 9号住居跡（縮尺1/50）	29
Fig.18 4号住居跡の遺物（縮尺1/4）	10	Fig.49 9号住居跡の遺物（縮尺1/4）	29
Fig.19 4号土塹の遺物（縮尺1/4）	11	Fig.50 10号住居跡（縮尺1/50）	30
Fig.20 4号土塹（縮尺1/40）	11	Fig.51 10号住居跡の遺物（縮尺1/4）	31
Fig.21 2号落ちこみの遺物（縮尺1/4）	11	Fig.52 10号住居跡（北西から）	31
Fig.22 II区（南から）	12	Fig.53 11号住居跡（縮尺1/50）	32
Fig.23 II区（北から）	12	Fig.54 11号住居跡（南西より）	33
Fig.24 II区の遺構（縮尺1/100）	13	Fig.55 11号住居跡の土器出土	33
Fig.25 II区の遺物（縮尺1/4）	14	Fig.56 11号住居跡の土器	33
Fig.26 II区の遺物（縮尺1/2・1/3）	15	Fig.57 11号住居跡の遺物（縮尺1/3・1/4）	34
Fig.27 5号住居跡	16	Fig.58 南台地の住居跡	35
Fig.28 5号住居跡の土器出土	16	Fig.59 物理探査をした位置	36
Fig.29 5号住居跡（縮尺1/50）	17	Fig.60 65次発掘区と土層	37
Fig.30 5号住居跡の土器出土	17	Fig.61 出土遺物（縮尺1/2）	38
Fig.31 5号住居跡の遺物（縮尺1/4）	18	Fig.62 出土遺物（縮尺1/4）	38

## 第1章 第63～66次調査

### 1. 調査概要

板付遺跡は、南北670m、東西170mの南北に細長い台地とその周辺に広がる低地部からなる。台地は、標高12mの等高線が巡るが、環濠のある中央台地を挟んで北と南に二つの頂部があり、北台地、南台地と呼んでいる。北台地は、板付北小学校の敷地にあたり、建設工事に先立って実施した発掘で、貯蔵穴群と甕棺墓、木棺墓、土壙墓からなる共同墓地が発見されている。一方、中央台地から南に300mにある南台地は、昭和30年代まで板付八幡宮や数戸の農家が点在して農村集落を形成していたが、最近の宅地開発で台地中央部の3,000m<sup>2</sup>が残されているにすぎない。最頂部には、標高12mの等高線が巡り、ほぼ平坦な畑地として利用されている。発掘調査は、野菜栽培の休耕時を選んで断続的に3か年にわたって実施した。また遺構確認調査という目的から、掘り下げによる破壊を最小限に止めるために、全面発掘を避けて主にトレンチ調査とした。年度ごとにI～III区と呼び、それぞれ調査番号をついた。

### 2. 調査体制

調査庶務 文化財整備課 後藤晴一 寺崎博文 市毛智子 菅原善則 林国広  
調査担当 文化財整備課 力武卓治

調査作業 永松とみ子 山村澄子 安高精一 安高久子 山崎光一 桑野正子  
小西日出子 村崎裕子 権藤利雄 金子国雄 金子澄子

整理作業 清永啓子 池田由美 衛藤美奈子 藤野真紀 松本恵美 竹下裕子



Fig. 1 板付遺跡航空写真

## 第2章 調査の記録

### 1. 南台地 I 区の調査 (調査番号9141) (Fig. 2)

初年度の平成3年度は、台地の遺構範囲を確認するために、2本のトレンチを設定した。1号トレンチは、台地中央より北西端の南北に幅2.7m、長さ22.5m、2号トレンチは、これと直角の東西に幅1m、長さ25.5mである。

#### 1. 1号トレンチ Fig. 3, 4

南台地の基本的な土層の層序は、厚さ15~20cmの耕作土と地山である鳥栖ローム層の間に、厚さ

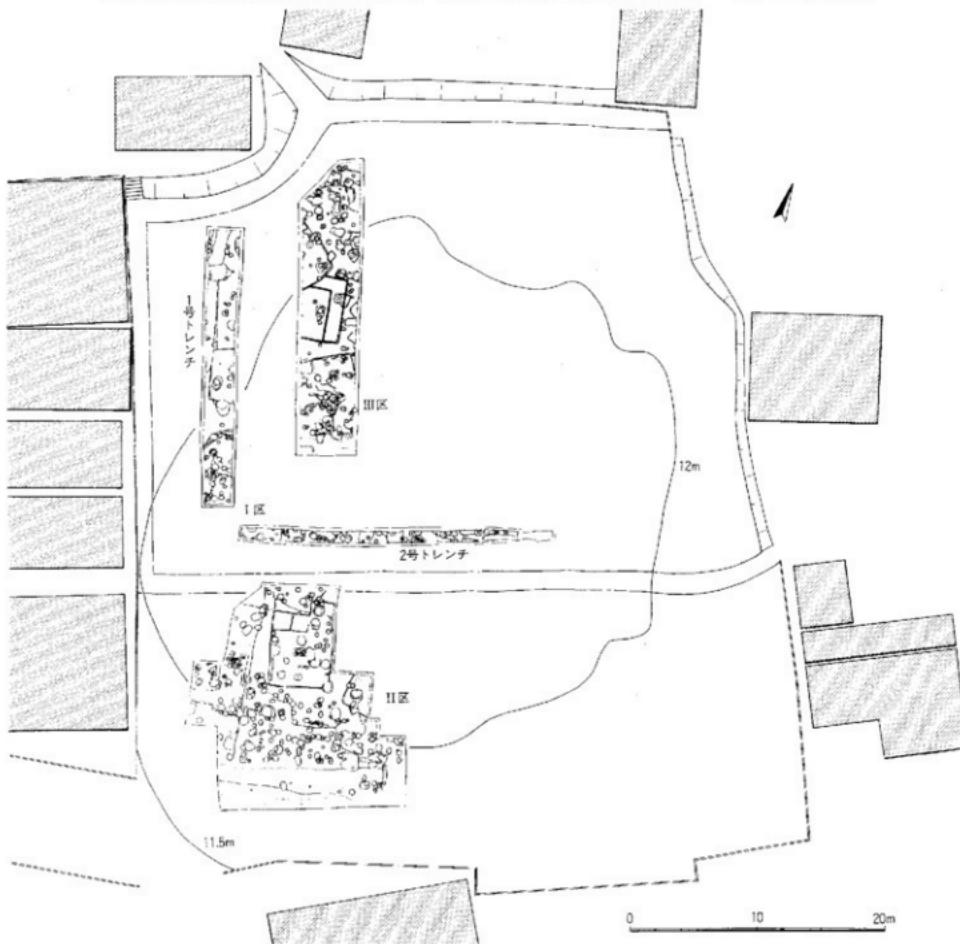


Fig. 2 南台地発掘区 (縮尺 1/400)

30~40cmの茶褐色土層が堆積している。この茶褐色土層は、II、III区でも認められ、近世の陶器や瓦類が出土した溝や昭和20年前まで栽培されていたという桑の根痕が掘りこまれていることなどから、早い時期に整地作業が行われたことが推測できる。この土層からは、弥生土器（1~4）、土師器（5）、石製穂摘み具、扁平片刃石斧などの石器（6~8）が出土（Fig. 3）したが、量は少ない。地山面は南に緩やかに傾斜している。確認した遺構は、堅穴住居、土壤、溝、ピットなどである。

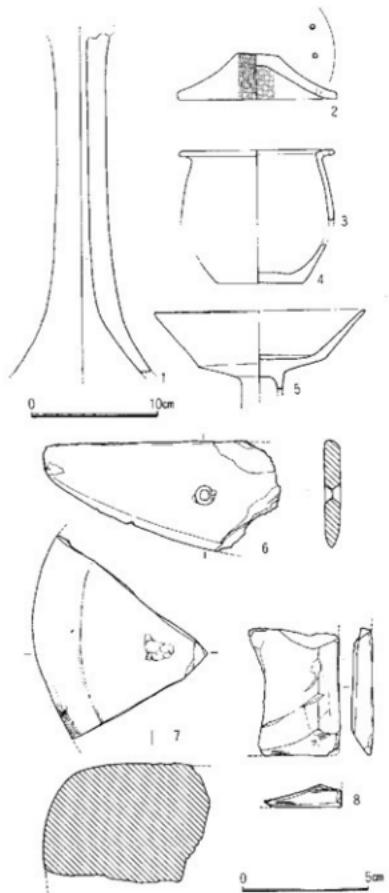


Fig. 3 1号トレンチの遺物 (縮尺1/4・1/2)

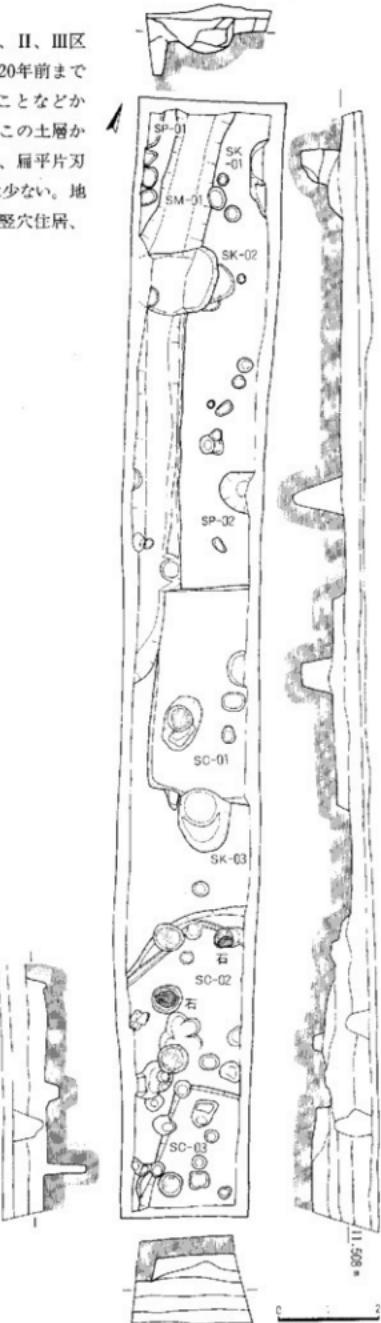


Fig. 4 1号トレンチの遺構 (縮尺1/100)

【竪穴住居跡】

1号住居跡 (SC-01) Fig. 5、6 1号トレンチのほぼ中央部で検出した。方形プランの住居であるが、大部分はトレンチ東側に隠れているために全形を知ることはできない。西壁の長さは、4.05mで、北西隅の一部は近世の溝で切られている。北壁は、長さ1.68m、南壁は、2.00mで、西壁に対して直角ではなく、やや角度があることから胴張りの平面形となるのであろう。壁の高さ約25cmが残っているが、壁溝はない。平坦な床面には、大小4個のピットがある。中央のピットは、焼土や炭など認められないことから炉ではなく、主柱穴の一つであろう。ここでは、一辺4m前後の方形プランと推測しておく。

出土遺物 Fig. 7 遺物は床面から出土するものが少なく、住居覆土から出土した4点を図示したにすぎない。9は広口壺の口頭部で、口径32cmを測る。表面磨耗が激しく丹塗り痕は残っていない。10と11は壺の底部で、丹塗りが施された10は、9と同一個体かもしれない。12は、口径32cmの甕で、L字形の口縁上面は湾曲し、内端部に小さく突出している。これらの遺物から1号住居跡の時期は、弥生時代中期後半頃と考えた。



Fig. 5 1号住居跡（北西から）

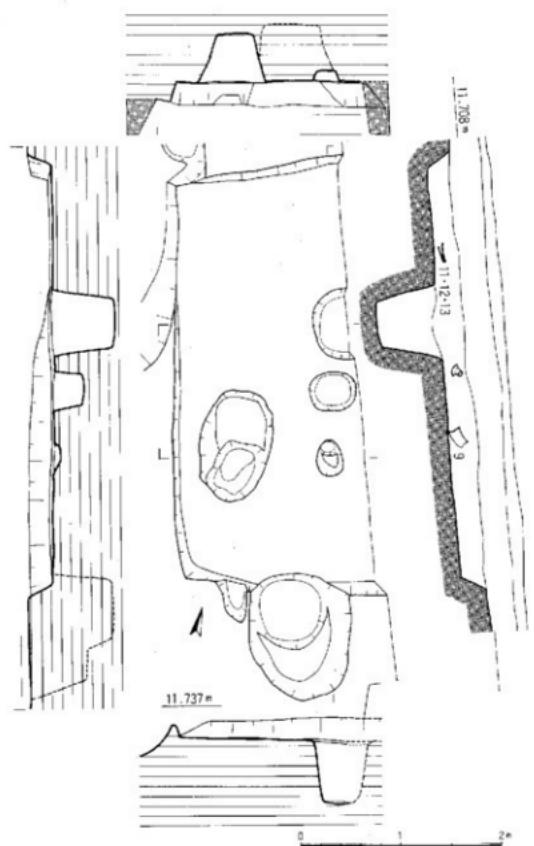


Fig. 6 1号住居跡 (縮尺 1/50)

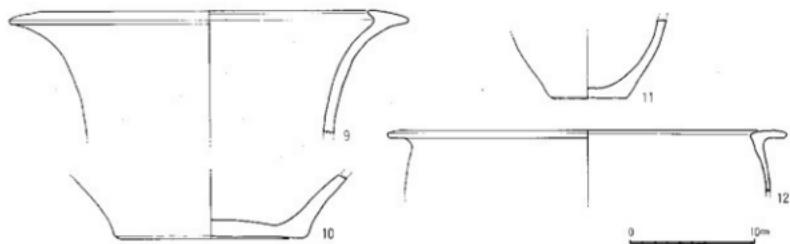
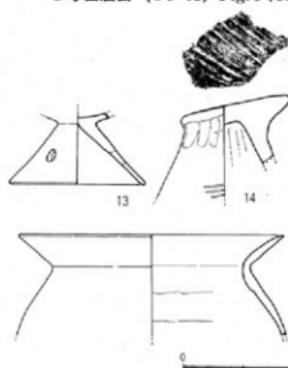


Fig. 7 1号住居跡の遺物 (縮尺 1/4)

## 2号住居跡 (SC-02) Fig. 9, 10



地山面は、1号住居跡より南に2m付近から傾斜が強くなり、第2土層の下部に土器片を多量に包含する土層が、長さ6mにわたって堆積している。これを掘り下げるに2軒の住居跡が現れ、北の住居跡を2号、南の住居跡を3号と呼んだ。2号住居跡は、北西隅の一部だけだが、幅15センチ、深さ13cmの壁溝が残っていることから竪穴住居跡と判断した。しかし、コーナーの角度が直角ではなく110度を開いていること、壁溝の外側に高さ20cmの壁があり、弧状に囲んでいること、コーナーより内側1mで壁と並行しない段があることなどから、もう数軒の住居跡が重複していることも考えられる。土層の観察では、住居の重なりを積極的に説明することはできないが、床面は凹凸があり、張り床されていた可能性もある。

Fig. 8 2・3号住居跡の遺物 (縮尺1/4)

## 3号住居跡 (SC-03) Fig. 9, 10

1号トレンチの南端で方形住居の北西隅を検出した。壁は高さ約30cmで、ほぼ直立している。2号住居の覆土よりも下部にあることから、先に営まれたことがわかる。



Fig. 9 2・3号住居跡 (南東から)

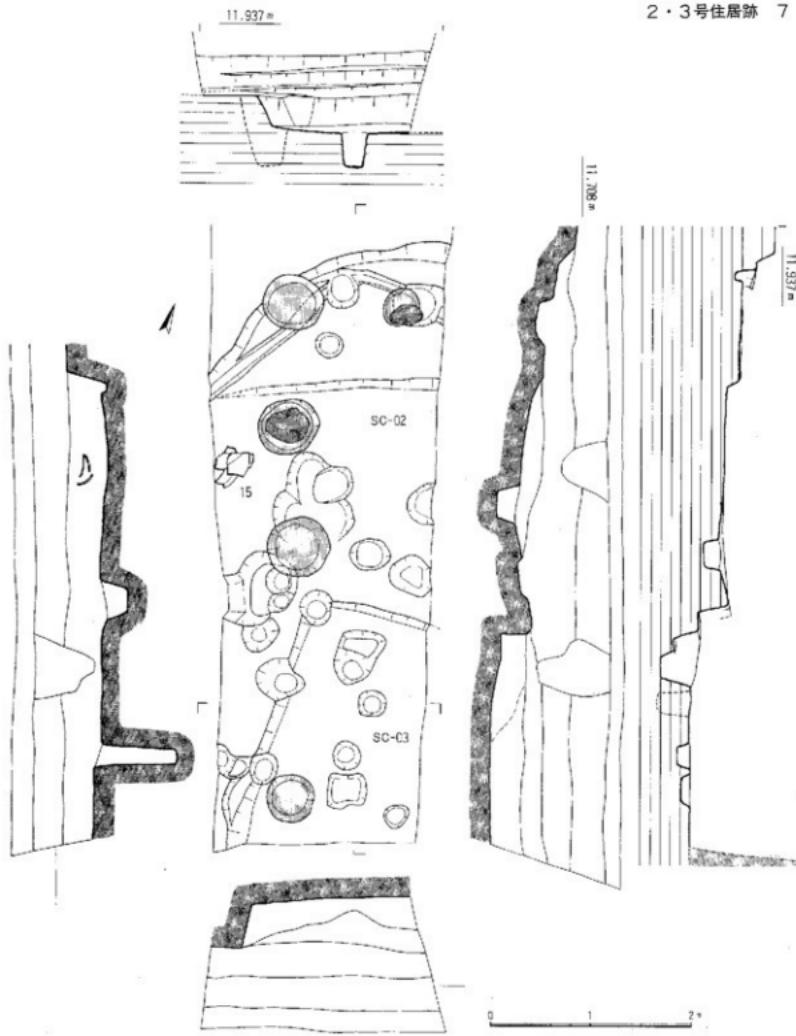


Fig.10 2・3号住居跡 (縮尺 1/50)

## 出土遺物 Fig. 8

2軒の覆土からは多量に土器片が出土したものの、床面では図化できるような遺物は発見できなかった。ここでは覆土より出土した3点を図示した。13は、脚付鉢の脚部で、小孔がある。14は鳥帽子形の器台、上部は叩き調整を加えている。15は、口径21.6cmの甕で、口辺はく字形に強く屈曲している。体部内面はナデ調整。床面で発見された遺物がないので、住居跡の時期を断定できないが、これらの覆土の土器から古墳時代前半としておく。

## 【土 壤】 Fig.11~13

ピットのうち直径が1mを超すものは、貯蔵穴の可能性があることから、断面を観察しながら掘り下げたが、貯蔵穴と断定するまでには至らなかった。

## 1号土壤 (SK-01)

1号トレント北東部で土壤の一部を検出した。2段掘りで、深さは76cm。16は、弥生時代後期土器の脚部である。

## 2号土壤 (SK-02)

近世の溝に切られているが、現在、1.35m×1.6mの隅丸長方形で、深さは82cmが残る。壁は直立に近く、断面は袋状ではない。17~22の6点を図示したが、21、22は上部で重なっているピットから出土した。

## 3号土壤 (SK-03)

1号住居跡の南壁で切られおり、いま長径1.28m、短径1.03m、深さ83cmを測る。弥生土器の小片が出土したが図化できなかった。大きめのピットであるSP-01から23が、SP-02から24の弥生土器が出土している。

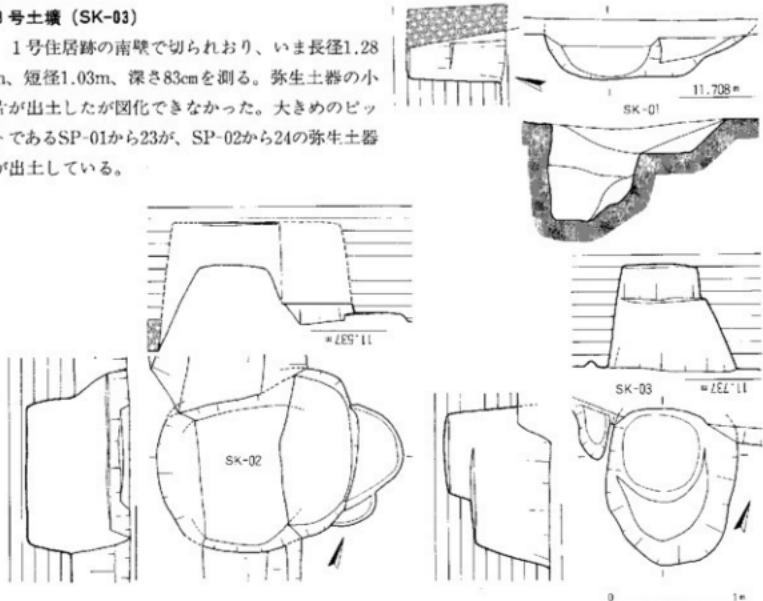
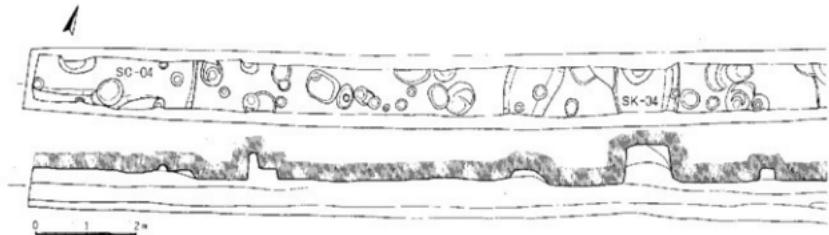


Fig.11 土壤 (縮尺 1/40)



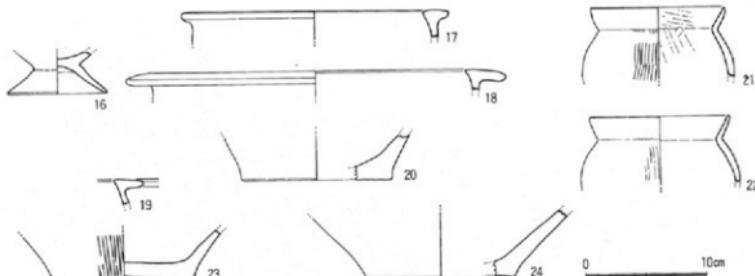


Fig.12 土壙の遺物 (縮尺 1/4)

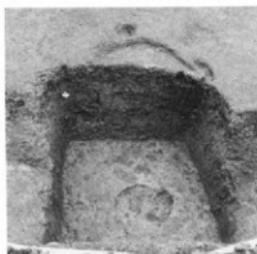


Fig.13 2号土壙 (西から)



Fig.14 1号溝 (南から)

## 【溝】1号溝 (SM-01) Fig.14

1号溝は、U字形に近い断面で、上幅95cm、底幅50cm、深さ40cmを測る。検出した全長は11.8mで、底部はほぼ水平である。その南端では1号住居跡の西壁を切り、やや西に湾曲しているようである。北端の土層によると、耕作土の下より掘りこまれ、数度の掘り直しが行われている。図化できなかったが、瓦片や陶磁器が出土した。

## 2. 2号トレンチ Fig.15,16

2号トレンチは、南台地の中央を東西に横切る。竪穴住居、土壙、ピットなどの遺構を検出した。また東端では、耕作土の下層から斜めに掘りこまれたような土層の堆積があり、中世の瓦が出土し注目された。

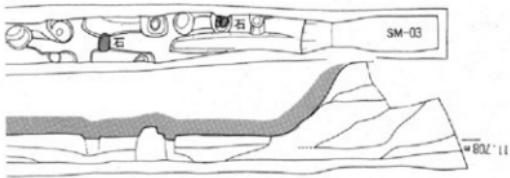


Fig.15 2号トレンチの遺構 (縮尺 1/100)



Fig.16 2号トレンチ (南東から)

## 【竪穴住居跡】

4号住居跡 (SC-04) Fig.17,18 2号のトレンチの西端にある。1号トレンチの2、3号住居跡と接近していること、直立する壁と地山を削りだしたようなベッド状の高まりがあることなどから住居跡とした。遺構配置図では3号住居跡東側の一部と思える位置であるが、3号住居跡の床面とレベルを比べると、約60cm高いので別の住居跡である。25~27の3点は、覆土から出土した小破片であることから、弥生時代後期前後の時期を推定するに止める。

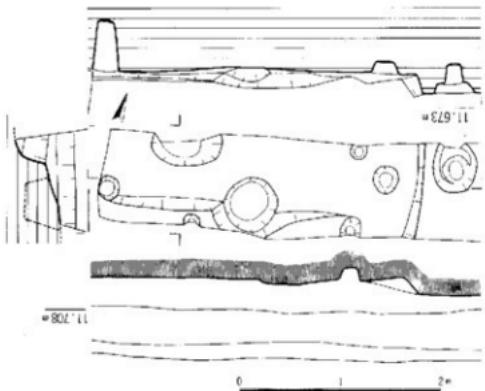


Fig.17 4号住居跡 (縮尺 1/50)

## 出土遺物 Fig.18

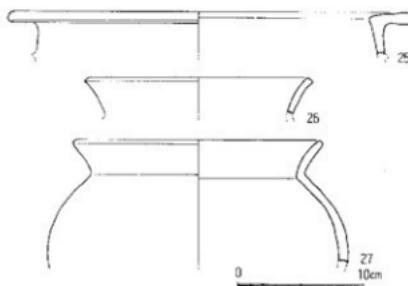


Fig.18 4号住居跡の遺物 (縮尺 1/4)

## 【土壤】

4号土壤 (SK-04) Fig.20,19 2号トレンチの中央部にあるが、全形は不明。壁は直立し、深さは96cmである。埋土は3層に別れ、東側から堆積した状況を示す。28~30の3点の出土遺物を図示した。30は、半球状の小形鉢で、小さく尖った底部がつく。

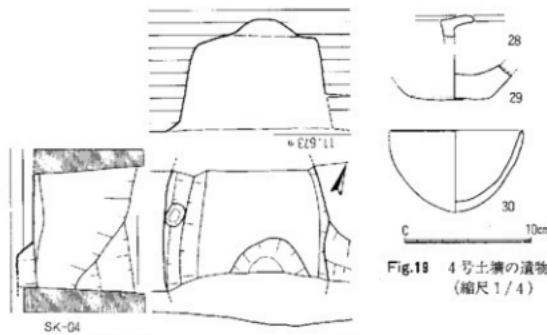
Fig.19 4号土壌の遺物  
(縮尺 1/4)

Fig.20 4号土壌 (縮尺 1/40)

## 【落ちこみ】(SM-02) Fig.21

2号トレンチの東端に竪穴住居跡や土壌の覆土層を、東側に切り込んだ落ち込みがある。地表から約2.2mの深さまで掘り下げたが、さらに深いようである。埋土は地山の鳥栖ローム土がブロック状に含まれ、西側から人工的に押し込んだような状況を示す。この落ち込みが溝状になるのか、あるいは台地の整形をしたのか明らかにできないが、II区南端でも同じような落ち込みがあることから、台地が区画されていた可能性が強い。埋土から31~33の瓦片が出土した。31の平瓦は、丁寧なナブ調整が加えられている。33は、灰茶色のやや軟質の丸瓦で、内面には布目痕が残る。南200mで発掘されている「高畠庵寺」の関連資料であろう。

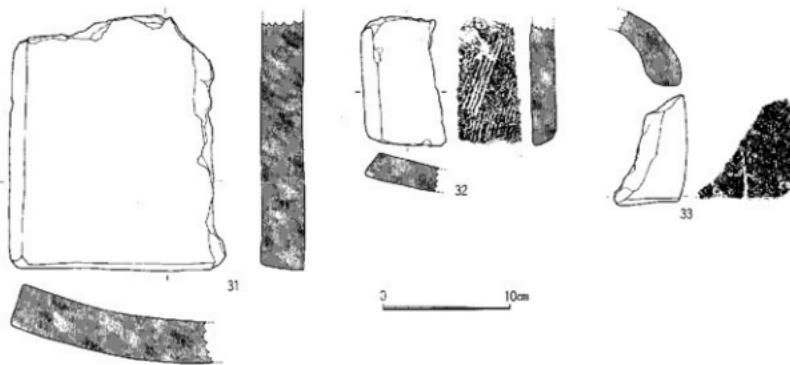


Fig.21 2号落ちこみの遺物 (縮尺 1/4)

## II区の調査

(調査番号9226) Fig.22~24

I区の2本のトレンチ調査で、弥生時代中期から後期の竪穴住居や土壙などの遺構が検出され、台地全体に遺構が広がっていることが分かった。また古墳時代の遺物や中、近世の瓦、陶磁器を出す遺構もあり、南台地の土地利用が弥生時代から現代まで途切れることなく続いていることが確認できた。このため台地南半分の状況を把握するために、面的に広げて200.5m<sup>2</sup>を調査した。主な遺構は、竪穴住居跡4軒、井戸1基、ピットなどで、南端では2号トレンチ東端で見つかった落ち込みに繋がると思われる段差がある。II区の土層は、I区のトレンチと基本的には変わらないが、耕作土下の茶褐色土層が厚く、また多量に遺物を包含している。確認遺構の前に包含層から出土した遺物について記す。



Fig.22 II区（南から）



Fig.23 II区（北から）



Fig.24 II区の遺構 (縮尺 1/100)

## II区包含層の遺物 Fig.25,26

**土 器** 1は平底の鉢で、口径13cm。薄手の器壁はナデ調整。2は球状の体部に直径6cmの平底がつく。底部の内面は盛り上がってい。る。体部上半を欠くが、直線的にのびる口頭部がつく壺になるのであろう。3は小型丸底壺、内面に粘土紐の接合痕が見られる。4は口径28.8cmの甕、器面は磨耗して砂粒が露出しており調整痕は不明。4は扁球状の鉢で、上半部は細かいハケ目、下半部はタテミガキで丁寧な仕上げをしている。平底の器形を考えたが脚がつく可能性もある。7は長い胴の甕で、上半部外面は細かいハケ目、内面は右上がりのケズリである。黒斑が胴上半部にある。6～8は高壺の壺部と脚部。6の口辺部は外反して、口径39cmと大型の壺部を作る。7の脚部には上下2個一組の小さい孔が3か所に開いている。器面は粗いハケ目をナデ消している。8は円柱から裾部の移行部に3個の小孔があり、内面はシボリ痕が観察できる。底径17.8cmで、端部は微妙に内湾している。

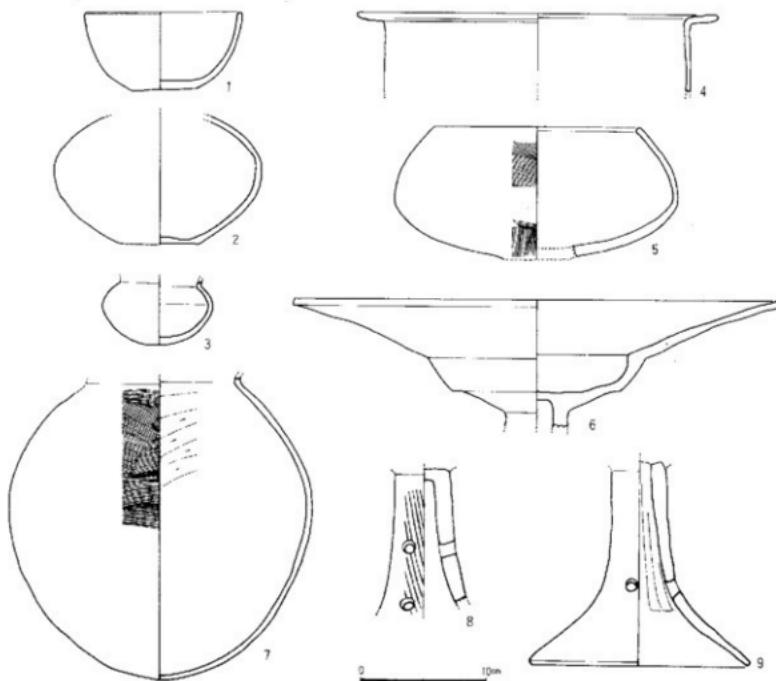


Fig.25 II区の遺物 (縮尺1/4)

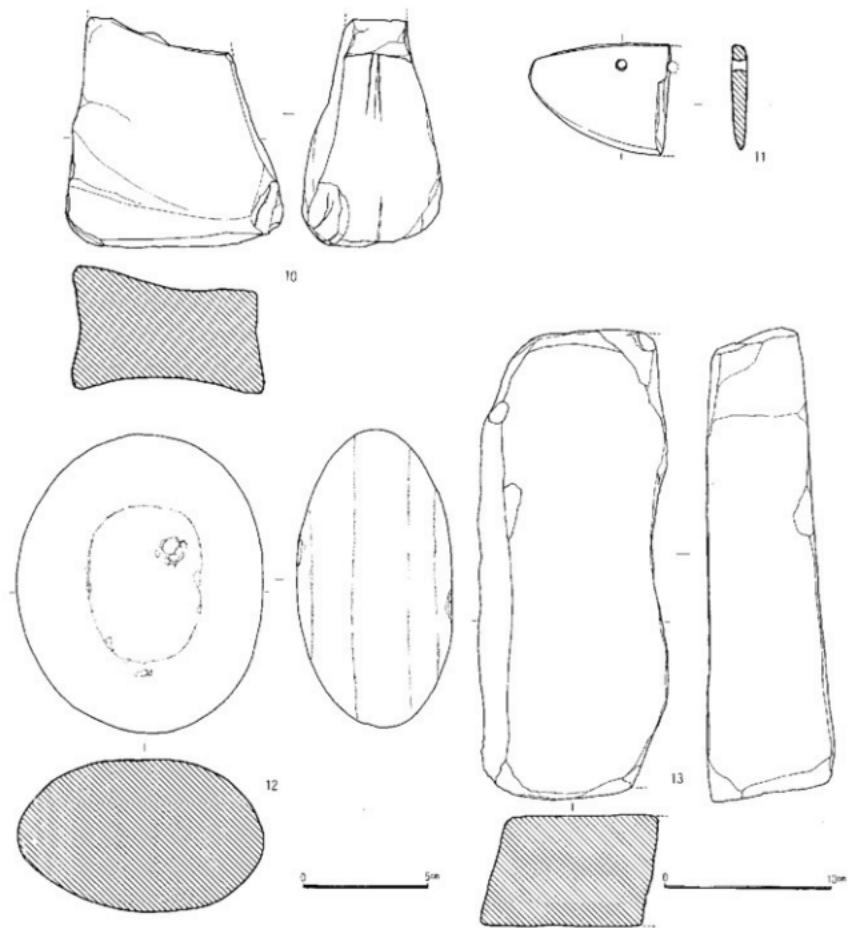


Fig.26 II区の遺物 (縮尺 1/2・1/3)

**石 器** 10と13は砥石、11は穂摘み具、12は磨り石。10は砂岩で、4面が研磨によって凹状となっている。11は頁岩で、2つの小孔は両面から穿孔されている。長さ8cmと復元できるが、手のひらに入るような小さな作りである。12は玄武岩質の円礫で、中心が窪み、周縁が磨耗していることから磨り石とした。13は花崗岩であるが表面が平滑であるとから砥石と考えた。工作台など別用途も考えられる。

## 【竪穴住居】

5号住居跡 (SC-05) Fig.27~30 発掘区の西端の表土から約1mの深さで検出した方形プランの住居跡である。I区1号トレンチの3号住居跡からは、南に9m離れている。壁は、南壁の一部と東壁が残っているが、北壁は明瞭な段がなく、南東コーナーもピットが集中しており旧形を留めていない。しかし東壁にはわずかながら壁溝が見られることから、竪穴住居の東壁と断定した。東壁の推定長さは6.5mを測る。この両方の壁に平行に地山を削り出したL字形のベッド状の高まりがある。東壁側は幅190cm、南壁側は90cmあり、中央床面からは約15cmの高さである。中央部で完形品の土器や、潰れたような土器片が多量に出土した。土器片のほとんどは、接合して完形品に復元できたことから、住居廃絶後に意図的に投棄、あるいは置かれたことが推測される。



Fig.27 5号住居跡



Fig.28 5号住居跡の土器出土

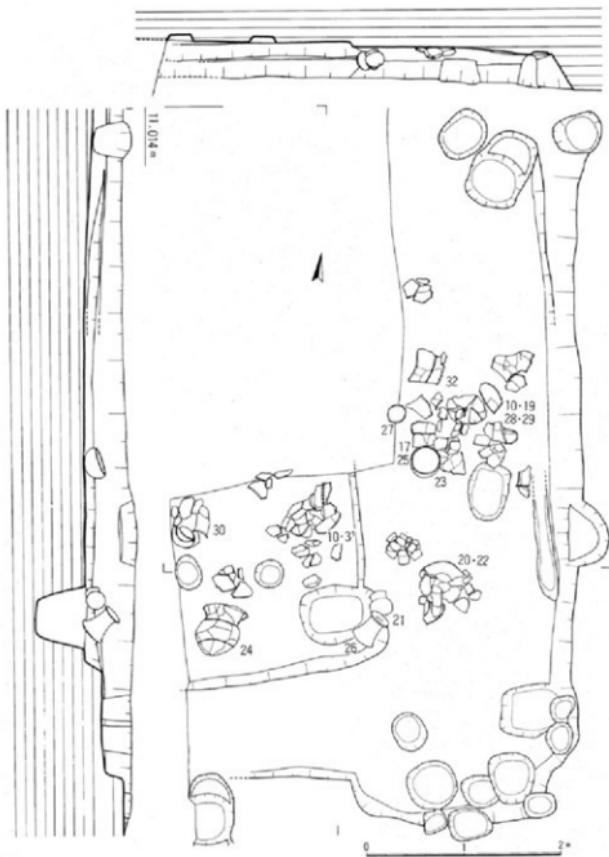


Fig.29 5号住居跡 (縮尺 1/50)



Fig.30 5号住居跡の土器出土

## 出土遺物 Fig.31~34

**土 器** 床面で出土した土器のほとんどを図化した。14は手捏ね土器、口辺部に指で摘み上げた痕跡が残っている。15は小型丸底壺で、口辺部を欠いている。器面は丁寧な仕上げだが、器形がややいびつとなっている。16は半球状の鉢。17は小さな不安定な底部から球形の胴部がのびている。18~20は同じような球形の体部に3cm前後の外開きの口辺部がつく。18の体部上半は粗いハケ目の後にナデ消しを加えている。19は内面にもハケ目が施されている。20は完形品である。底部から体部を積み上げる前に、体部胴下半内面をハケ目調整していることがよくわかる。外面は細かいミガキ。21は長頭の丸底壺、底部内面には板目が放射状についている。22は壺部口辺が大きく反転する高壺である。口径は34cm、脚部との接合部から外れている。23は半球状の鉢で、口径は25.2cmと大きい。口縁はわずかに内渋している。外面は粗いナデ調整、内面は粗いハケ目調整。24は二重口縁壺の完形品。口径26.6cm、器高37.5cm、体部最大径

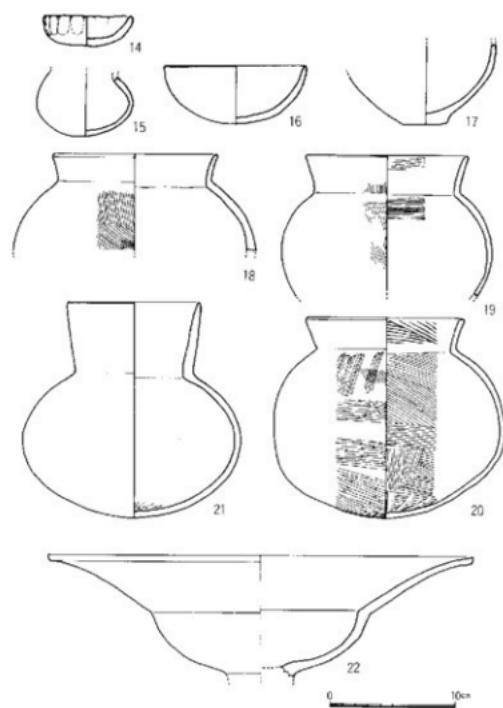


Fig.31 5号住居跡の遺物 (縮尺1/4)

26.2cm。凸帯が胴部の下半部と頸部への移行部に巡る。表面は風化による磨耗が激しいが、粗いハケ目痕が残っている。25~27は器台、25の底径は14cm、高さ12.7cm、内面は粗く指で押さえている。26は底径18.4cm、高さ21cm、上縁端に刻み目がある。内外面ともハケ目調整だが、粗いハケ目と細かいハケ目を使い分けている。長頸丸底壺の21と並んで出土したことから、おそらく丸底壺を乗せていたのであろう。27の上縁がややいびつなが、全体に整った器形をなす。28、29は同じように橢円形の長い胴部をもつ甕。28の口径は16cm、器高は17.8cm、体部上半は内外面とも粗いハケ目調整、下半部はナデ調整である。29の口径は15.6cm、器高は20.8cm、直徑4.4cmの小さな丸みのある底部がつく。30は同じような器形であるが、口辺部の外反が強く、20cmの口径が胴部最大径よりも大きくなっている。

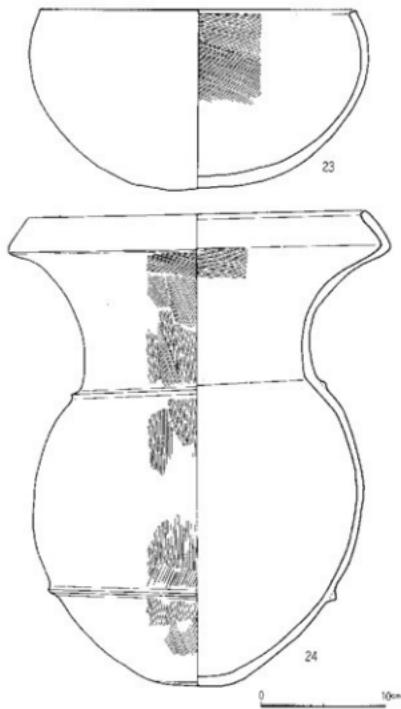


Fig.32 5号住居跡の遺物（縮尺1/4）

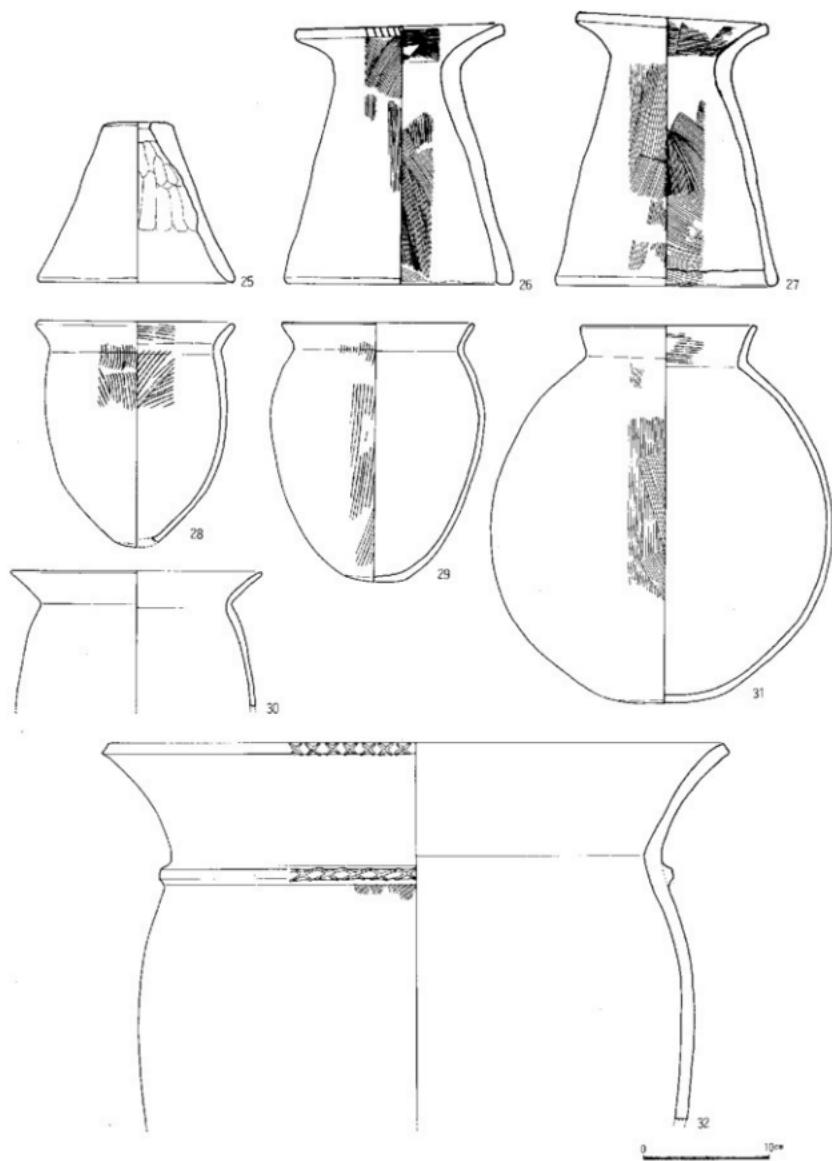


Fig.33 5号住居跡の遺物 (縮尺1/4)

る。31は頸部がしまり、球形に近い体部の壺、口径は14.2cm、器高29.9cm、体部最大径は27.4cm、外面はハケ目調整、黒斑がある。32は大型の甕。体部下半を欠いているが、倒卵形で丸底の器形になるのであろう。口辺部は外湾ぎみに外反する。頸部には断面台形の凸帯を張り付けて、口縁と同じようなX字の刻み目を入れている。

これら床面上から出土した土器から、5号住居跡は弥生時代後期終末期に廃絶されたことがわかる。



Fig.34 5号住居跡の遺物（縮尺1/4）

## 6号住居跡 (SC-06) Fig.35

5号住居跡の南0.5mに位置する方形プランの住居跡。いま、北壁0.9mと東壁2.55mだけが残っているにすぎないので、規模は明らかでない。また壁の高さも9cmしかなく、削平が激しい。床面には数個のピットがあるが、主柱穴と考えられるものはない。東壁は5号住居跡とほぼ同じ方向である。

## 出土遺物 Fig.36

33、34の弥生土器は、東壁に接して掘りこまれているピットから出土した。33の口径は33cm、L字形の口辺部は端部が下方に垂れている。34は壺の底部、外面は粗いタテハケ目調査。底径は8.4cm。このピットは東壁に接して掘りこまれているが、6号住居跡に伴うものか確認できないので、ここでは6号住居跡の時期を弥生時代中期から後期と幅をもたせておく。

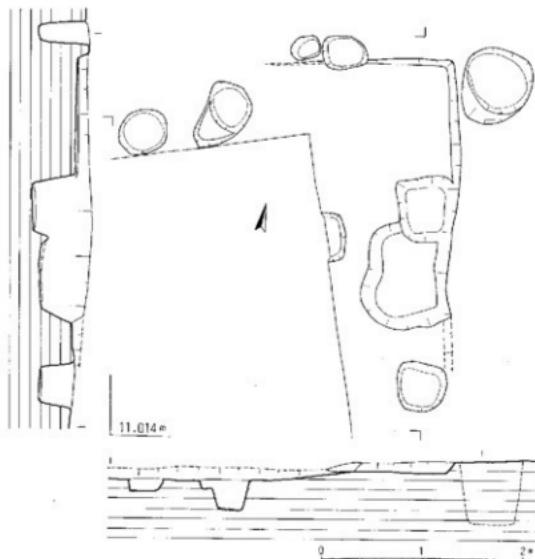


Fig.35 6号住居跡 (縮尺 1/50)



Fig.36 6号住居跡の遺物 (縮尺 1/4)

## 7号住居跡 (SC-07) Fig.37,38

II区のほぼ中央に位置する。東壁の一部が発掘区外に出るが、南台地で唯一全形がわかる住居跡である。北壁は4.65m、南壁は4.65m、東壁は5.6m、西壁は5.8mで整った長方形プランである。西壁の南寄りに幅15cm、床面からの深さ7cmの浅い壁溝がある。壁は最も残りのいい西壁で34cmある。北西隅には北壁に接して130×275cmのベッド状遺構がある。床面からの高さは10cmで、東側が一段低くなっている。床面には十数個のピットがあるが、中央で南北に並ぶピット1と2を主柱穴とし、2本柱で南北方向の棟を考えた。

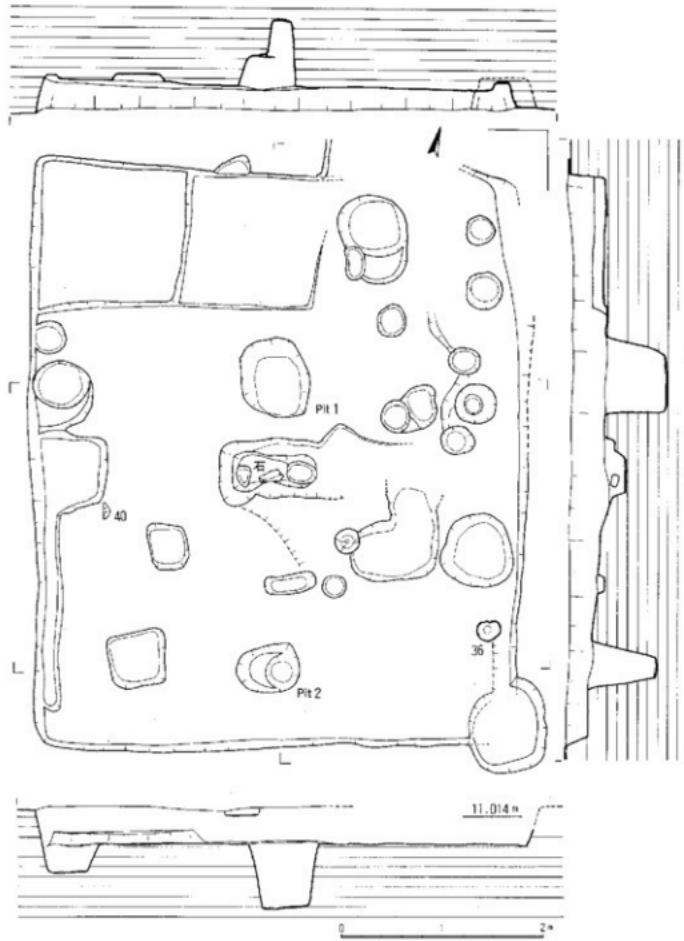


Fig.37 7号住居跡 (縮尺1/50)



Fig.38 7号住居跡

出土遺物 Fig.39

**土 器** 35は覆土出土、口径17.8cmの高環坏部。砂粒の少ない胎土が用いられている。

36は底部は丸みがあり不安定なつくりである。外面は逆時計回りのタキ痕がある。37は壺の胴部破片、35の下部より出土した。断面台形の凸帯には斜めの粗い刻み目がつく。この凸帯の上方は細かいハケ目、下方は粗いハケ目調整。内面には板小口でナデ上げた痕跡が残る。

**石 器** 砥石1点と穂摘み具4点が床面から出土した。38はきめの細かい粘板岩の砥石、断面三角形の3面とも研ぎ面に使われている。

39~42は穂摘み具。39は外湾刃で、端部は丸みがあり、使用時につけたと思われる条痕が見られる。

40は完形品、外湾刃は両面から研ぎだされている。図左端は直線的な刃となっており、この部分に条痕も多いことから右利きの使用が想定できる。

粘板岩製か。41と42は輝緑凝灰岩製、41は背が直線ではなく湾曲している。紐通しの孔は他に比べて小さく、両面ともよく研磨されている。

42は細長い作りで、背よりも刃部側が厚くなっている。

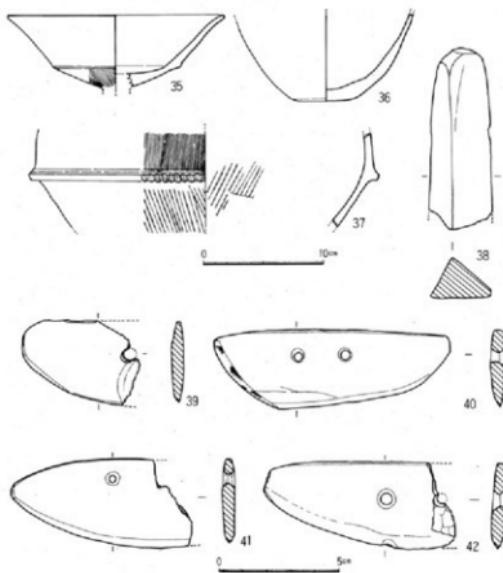


Fig.39 7号住居跡の遺物（縮尺1/4）

## 8号住居跡 (SC-08) Fig.40

発掘区の東端で西壁2.35m、南壁2.30mを検出した。大部分が発掘区外にあるので規模がわからないが、西壁が磁北と一致する方形プランの住居である。コーナー部分は、5cmほどの高まりとなっており、西壁沿いにベッド状造構が想定できる。

## 出土遺物 Fig.41

**土 器** 43~45は甕の口辺部の小破片、46は精良な胎土が用いられている。鋤先状口辺の高环か。47は西壁を切っているピットから出土した。口径13cm、外面は粗いハケ目、体部内面は細かい横ハケ目調整。

時期を決定するには遺物が少ないが、弥生時代後期としておく。

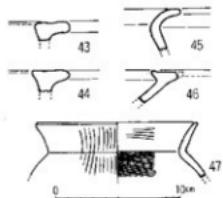


Fig.41 8号住居跡の遺物 (縮尺1/4)

## 【井 戸】 1号井戸 (SE-01) Fig.42, 43

発掘区の中央、6号住居跡と7号住居跡の間にある。上面は80cm×90cmの不整円形である。ほぼ垂直に掘りこまれており、安全のために深さ2mで掘り下げを中止した。井戸底は鳥栖ロームの下にある八女粘土層まで達しているのであろう。

48~50は、胎土は精良で丹塗りが施されている。51、52はく字形口辺部の甕、52の頸部には三角凸帯が巡る。完掘していないが弥生時代中期末前後の時期であろう。

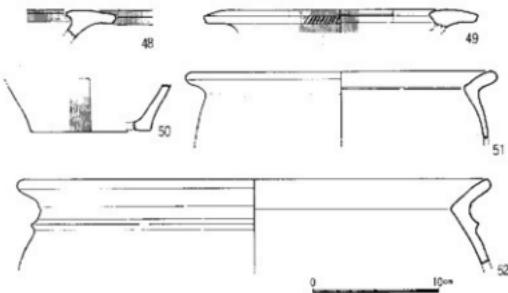


Fig.43 1号井戸の遺物 (縮尺1/4)

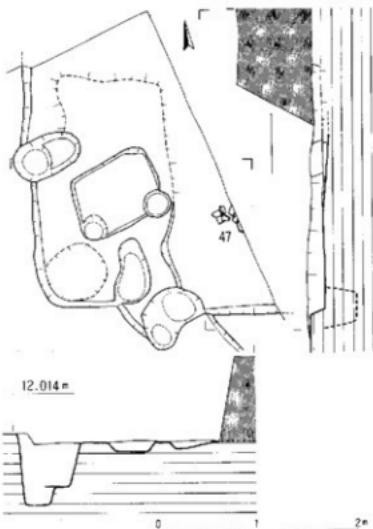


Fig.40 8号住居跡 (縮尺1/50)

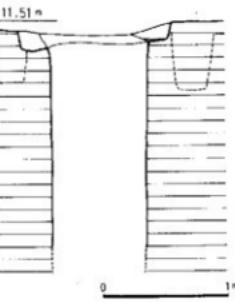
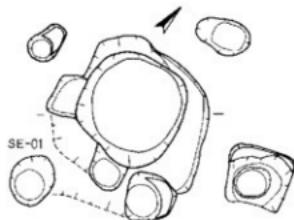


Fig.42 1号井戸 (縮尺1/40)

## 【溝】 3号落ちこみ

(SM-03) Fig.24

発掘区の南端は地山を整形したような落ちこみがある。埋土はI区2号トレンチ東端で検出した落ちこみと同じような鳥栖ロームがブロック状に入っている。南側で立ち上がって溝になるのではなく、そのまま斜面となる可能性が強い。I区1号トレンチの1分溝や根石状のピットが点在していること、さらに次のような出土遺物や江戸期の文献から、黒田藩閑連施設の存在が推測できる。

## 出土遺物 Fig.44

53と54は落ちこみではなく、ピットから重なって出土した。53は口径12.2cmの土師質の皿、底部は板目か。54は内面が黒みをおびた碗、ハ字形に聞く高台を張りついている。内底部に逆時計回りのクロ痕がある。55と56は、染め付け碗。両方とも見込みには四つの芽跡が残る。57~66は瓦類、57の瓦当文は、筑前国黒田藩の家紋である藤巴文である。瓦当の直径は15cm、丁寧な作りである。58~62は巴文の軒丸瓦。58は巴は尾の長い細身で、11個の珠文が取り囲んでいる。風化が進んでいるが、灰黒色で焼されていない。64、65は軒平瓦、どちらも彫りが鋭い。64の外縁には「塙□定平」の文字が刻印されている。66は側面に刻印があり、「上口佐 佐□・・」と判読できる。岡化しなかったこの他の瓦類には、江戸時代以降のものも含まれている。また刻印の瓦は明治時代以降のものであろう。

藤巴文の瓦の出土遺跡は、福岡城、別邸である友泉亭、菩提寺であった東長寺などに限られている。なぜ板付遺跡で発見されるか。出土した量もわずかなので、建物の存在をすぐに推測するのは早計であるが、黒田藩の国学者である青柳種信が責任編集した『筑前国統風土記拾遺』に次のような記述があり注意される。

高樹公（二代藩主黒田忠之、在位期間は元和9年 1623~承応3年 1654）が、板付村に寛永2年2月に「行館」を建てはじめ、寛永6年に完成した。その後正徳六年中三月に「行館」を廃されたが、享保7年丑正月になって功崇公（6代藩主黒田継高、在位期間は享保4年 1719~明和6年 1769）が再建したが、明和3年戊四月に三宅村（南区三宅）に移され、「行館」の跡は畠になってしまったと、記述されている。

「行館」の機能や規模がはっきりしないが、板付遺跡の地元では黒田藩の「馬屋」の伝説も残されており、御笠川や諸岡川の氾濫原となる台地周辺の低地を避けて、台地上にこのような施設があったことは容易に推測できる。

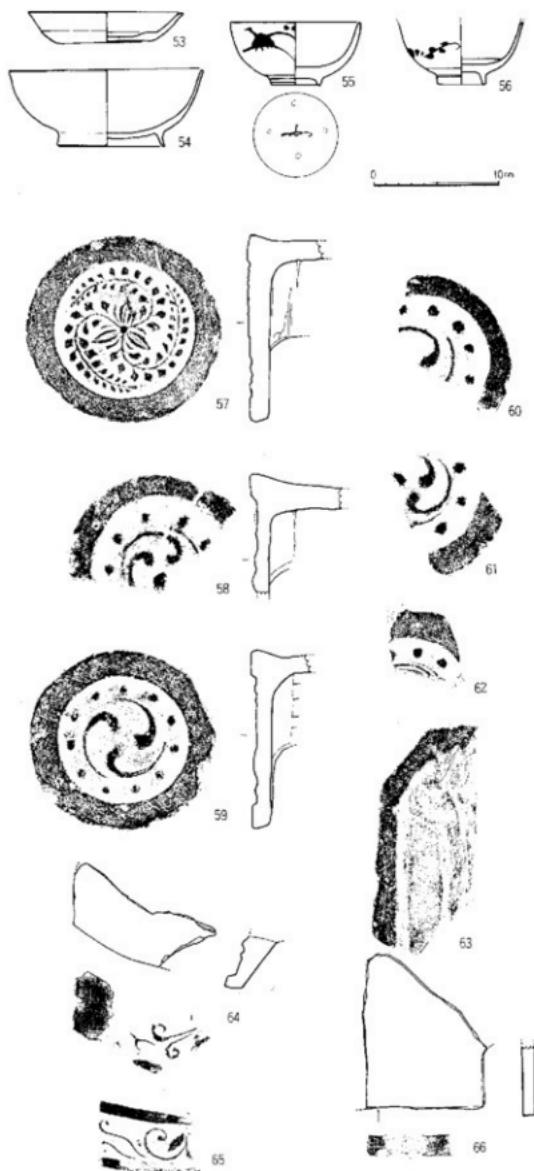


Fig.44 3号落ちこみの遺物（縮尺1/4）

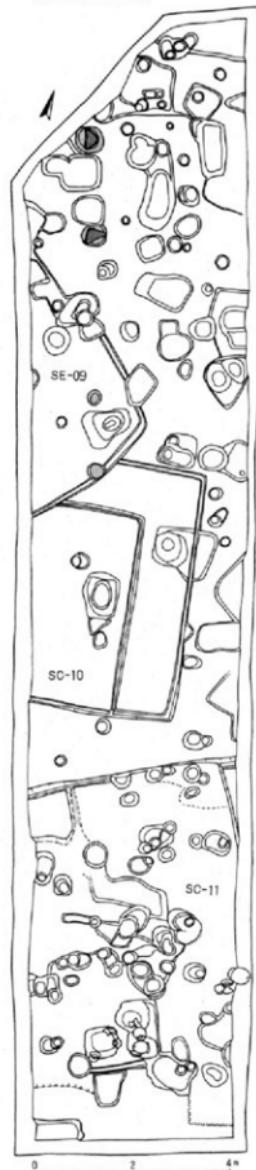


Fig.45 III区の遺構 (縮尺 1/100)

## III区の調査 (調査番号9331) Fig.45~47

I、II区では、9軒の竪穴住居が発見され、集落としてどのような広がりと構成をしているのかを把握するのが次の課題となった。3次目にあたる平成5年度は、台地中央部より西寄りに発掘区を設定して、集落の開始期や展開などを確認することにした。発掘区はI区1号トレンチに平行に幅5m、長さ24mの範囲である。III区でも堆積している土層は変わらない。また地山も同じように南に向かって傾斜している。遺構は発掘区の全面にあり、3軒の竪穴住居跡、数十個のピットなどを検出した。1～3は耕作土下の茶褐色土層から出土した。1は小型鉢、内面は時計回りに粗いハケ目調整。2は壺の胴部、中位の凸帯は張りつけした後に強く横ナデしている。3は砂岩の砥石。長さ8.6cm、図上面だけが研ぎ面になっている。

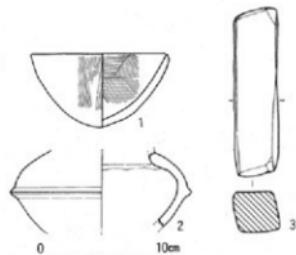


Fig.46 III区の遺物 (縮尺 1/4)



Fig.47 III区 (南から)

## 【堅穴住居】

## 9号住居跡(SC-09) Fig.48

発掘区の北よりに位置している。10号住居跡を切っている。半分以上が発掘区外にあり、検出した壁は、東壁が4.35m、南壁が3.10mである。コーナーは丸みがあり、壁も直線ではない。壁溝があるが、4cm前後ときわめて浅い。住居内の数個のピットのうちピット1は43cmと深く、主柱穴と考えた。2本柱が東壁に平行に並ぶ構造か。

## 出土遺物 Fig.49

凶化した4~7は、覆土から出土した。4、5はL字形口辺部の甕、5の内端部は小さく張り出している。3の口辺部はく字形で、口縁端は丸く肥厚している。7は底径32cmで、内外面とも丹塗り。出土遺物や10号住居跡を切っていることなどから弥生時代後期とした。

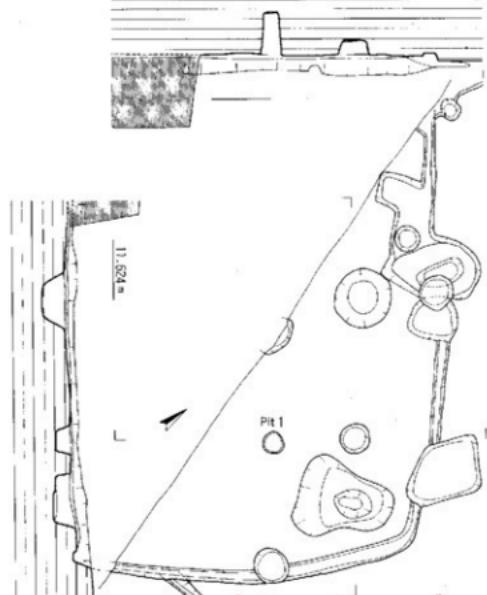


Fig.48 9号住居跡 (縮尺 1/50)

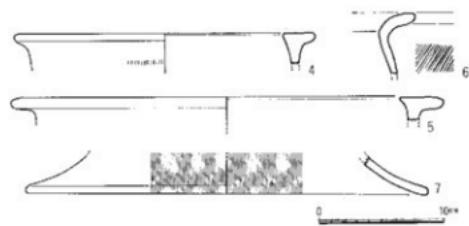


Fig.49 9号住居跡の遺物 (縮尺 1/4)

10号住居跡 (SC-10) Fig.50,52 発掘区のはば中央にあり、方形プランの整った住居跡である。壁はほとんど削られ壁溝だけが残っているが、平面形は推測できる。壁の長さは東壁が5.15m、南壁が2.88m、北壁が1.76mを測る。壁は直線的で、そのコーナーも直角に近い。東壁と北壁に沿ってL字形のベッド状遺構がある。床面よりの高さは16cmで、壁と同じように細い溝が掘られている。床面には主柱穴と思われるような深いピットはない。

出土遺物 Fig.51 覆土から出土した土器を6点図化した。8～11はL字形口辺部をもつ甕。8の口辺部下方には、1条の三角凸帯が巡る。9の口径は

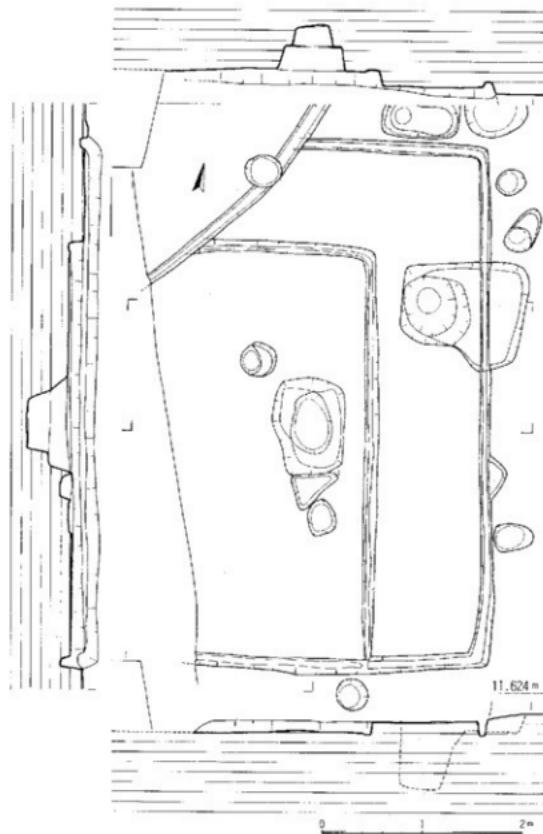


Fig.50 10号住居跡 (縮尺 1/50)

30.4cm、丁寧な横ナデ調整。10の口辺部はわずかに内傾している。11の口辺部は幅広く、胸部外面はタテハケ目調整。12の口径は22.2cm、底部を欠いているが長剣となるのであろう。13は壺の底部、底径6.6cm。削平された住居跡の覆土出土なので、時期幅があるが、ここでは弥生時代中期末から後期としておく。

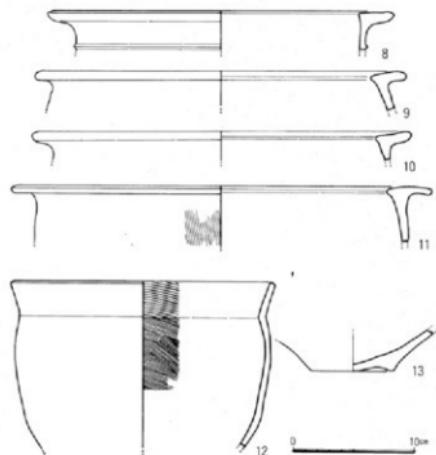


Fig.51 10号住居跡の遺物（縮尺1/4）



Fig.52 10号住居跡（北西から）

## 11号住居跡 (SC-11) Fig.53~56

10号住居跡より南に1mと接近して位置している。住居の中央部だけの検出なので、全形は不明。北壁は長さ4.25m、南壁は削平されているが、北壁より6mの位置にわずかに壁溝が残っており、住居の幅が推定できる。ベッド状の高まりが北壁の両端に認められる。西端のベッド状遺構は地山を16cmの高さに削り出している。また壁溝から浅い溝がのびているようである。東端は20cmの高さである。床面にはピットが多いが、壁に平行で方形に並んでいるピット1~4を主柱穴に想定した。床面の南よりで10数個体分の古墳時代前半の土器が集中して出土した。これらの土器には、穿孔されたものや意図的に折られたような高环などがあり、住居廃絶時の祭祀行為の結果と考えられる。

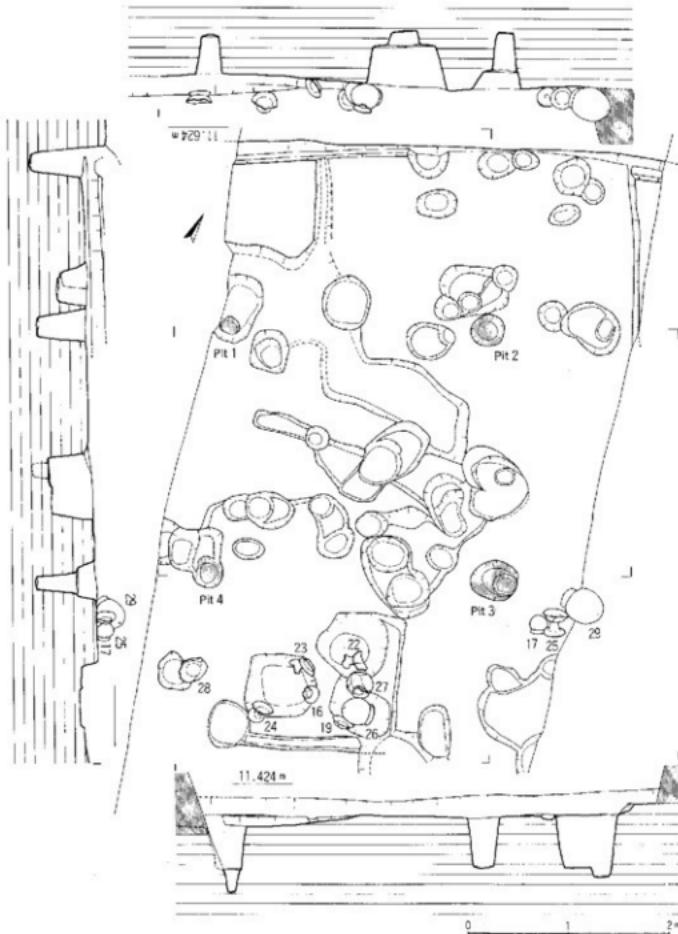


Fig.53 11号住居跡 (縮尺 1/50)



Fig.54 11号住居跡（南西より）



14 15



16



17



22



Fig.55 11号住居跡の土器出土



27



29

Fig.56 11号住居跡の土器

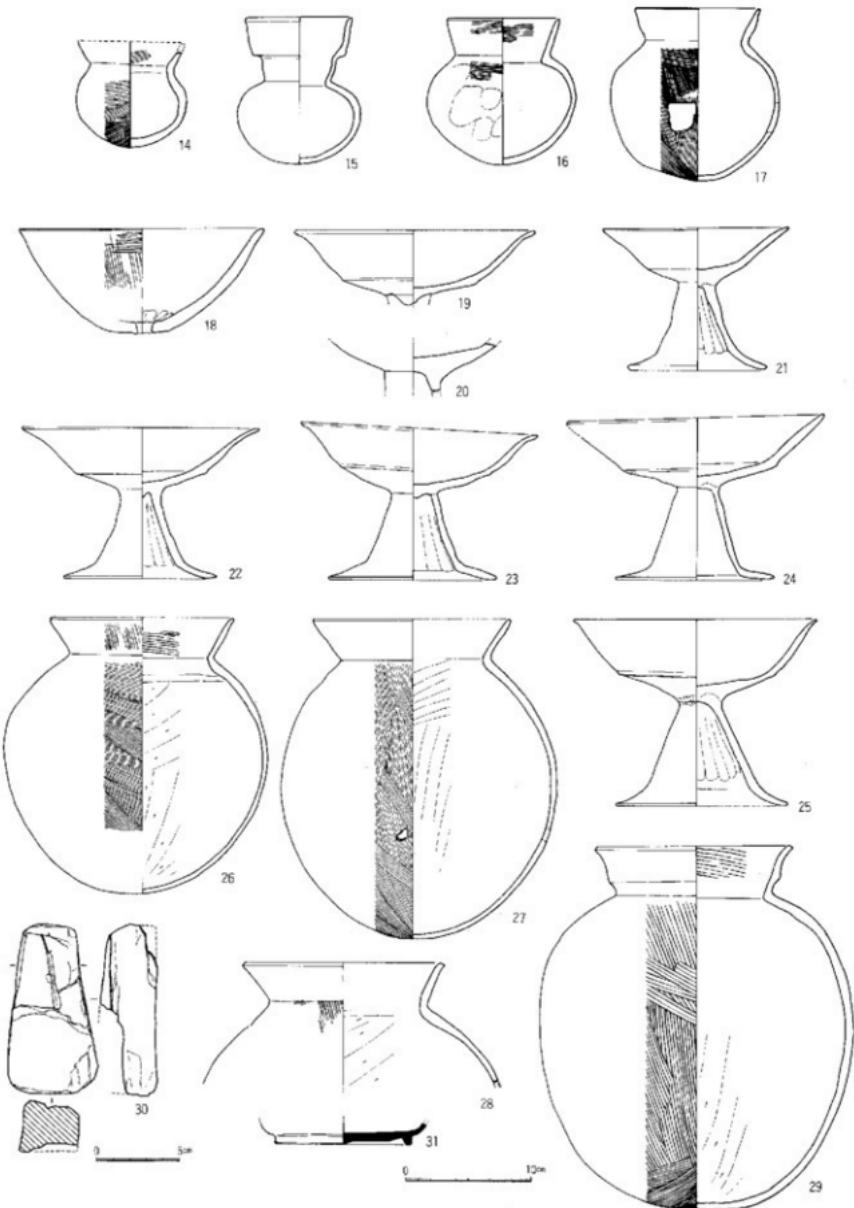


Fig.57 11号住居跡の遺物 (縮尺 1/3・1/4)

## 出土遺物 Fig.57

**土 器** 14~17は丸底壺。14と15は覆土出土、14は球状の体部に内湾ぎみにのびる口辺部がつく。口縁は正円ではなく、部分的に片口のように開いている。15は口径8.4cm、器高11.5cmで二重口縁の小型丸底壺。口辺内面に丹の痕跡がある。16の体部には表面を削り取った（？）ような剝離部が3か所ある。17は25と29と同じ位置で出土した。細かいハケ目調整の体部は、焼成後に外側から割られて穴が開いている。18は覆土出土の鉢破片。尖底には小さな穴があり、漏斗のように使われたのだろう。19~25は高環、19の環部口径は19.4cm、脚部との接合部で外れているが、これと接合する脚部は出上していない。ほとんどが完形品になる中で20のように環部の破片は珍しい。厚い作りや形状など他の高環とやや異なる。21と22は環部の口径が底径に比べて小さい特徴を持つ。23~25の高環の脚部はハ字形に大きく開いている。25は口径19.4cm、底径13.7cm、器高13.1cm。26~29は甕、26は球形の体部に直線的に外反する口辺部がつく。体部外面は細かいハケ目調整、内面は下半部が上方向のケズリ、上半部が右上がりの削り。外面に煤が付着している。27は26に比べてやや長めの体部で、器高25.3cm、口径16cm、体部の最大径は22cmである。体部の中程に焼成後の穿孔が見られる。28は体部下半部が接合できなかった。口縁端部が微妙に外に開いている。29は丸底だが器壁の厚い作りで安定感がある。口辺部の途中で肥厚し、頸部を強く横ナデしているので二重口縁のような形状となっている。体部外面は、粗いハケ目、内面はケズリ。31は覆土上面の出土。須恵質の壺で小さな高台が張りつけられている。高台径は11cm。

**石 器** 30は床面から出土した砂岩の砥石、4面が研ぎ面に使用されているが、断面は深み、条痕も見られる。

**小 結** 3次にわたる調査で、南台地の土地利用の変遷を時代ごとにある程度推測できるようになった。検出した遺構は、竪穴住居跡、土壤、井戸、溝、ピットなどである。竪穴住居跡は、弥生時代から古墳時代の11軒で、1、3、10号住居跡のように整った方形プランのものが多い。また4、5、7、8、10、11号住居跡の6軒がベッド状遺構を持っているのが特徴である。さらに5、11号住居跡では、多量の土器が出土し、住居廃絶に関連する祭祀的行為を推測することができる。この他の住居跡は、全形を掘り出したわけではないので時期決定の遺物を欠き、覆土やピットから出土した遺物で判断したが、南台地での住空間としての利用は、弥生時代中期後半から始まり、古墳時代前半まで続いたと推測した。その後、中世の遺物がわずかに出土するが、特別な遺構は認められない。次に江戸時代には、藤巴文の瓦や根石のあるピットなどから、黒田藩の関連施設があったことが予測できる。

当初の目的は、中央台地の環濠集落と同じ弥生時代前期にどのように利用されていたかを把握することであったが、残念ながら前期まで遡る遺物は、皆無であった。今回の調査で特に注目されたのは、耕作土と遺構面の鳥栖ローム層の間に遺物包含層が認められたことである。しかも、この土層に近世の遺物を主に出土する溝が掘りこまれていることから、南台地全体が早い時期に地上化され、区画、整地されていた可能性がある。この時期を文献に記録されている江戸期の施設と関連づけられるか今回は明らかにできなかった。

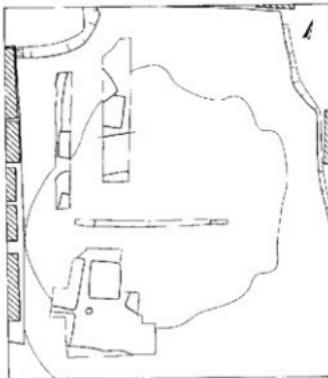
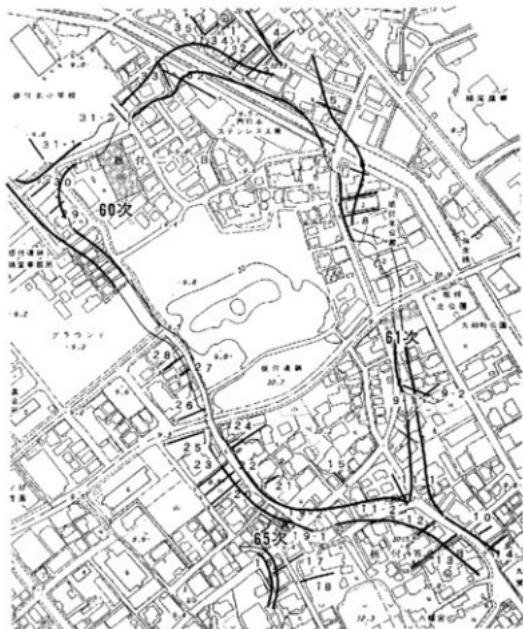


Fig.58 南台地の住居跡

## 2. 外環濠(65次)の調査

(調査番号9330) Fig.59、60

遺構確認調査は、「板付遺跡調査整備委員会」の提案と指導にそって実施したが、外環濠の推定地は民家が密集して空き地がなくなり発掘区の確保が難しくなった。このため先に物理探査を行い、その結果を利用して発掘区を選ぶことになった。外環濠が中央台地を巡ると推定すると、北、南台地との間での確認作業が不可欠である。物理探査は、電気探査（比抵抗映像法）と地ドレーダー探査の二つの方法で、39か所で実施した。夜臼式土器期と板付I式土器期の水田が検出されたG-7a区の南隣接地は、現在水田（Fig.59の20、22、23）として利用されており、ここには外環濠がのびていることが確實視されるので、この探査結果を基準にして、各地点の分析と検討が行われた。しかし、今回実施した他の探査場所が民家の間や道路などにあたり、期待したことが完全に満たされたわけではない。その後、物理探査を実施した第19地点で、所有者の協力により発掘の了解が得られた。物理探査の結果と実際の発掘結果との比較が可能ということばかりでなく、この地点が外環濠の湾曲部に当たることから大いに期待された。



出土遺物 Fig. 67, 68

**石 器** 1は石劍の切っ先部。全体に磨耗が激しい。2～5は穂摘み具。2は外湾刀部としたが、薄いつくりなので別の用途を考えるべきか。3は刃部と背が平行した長方形の石包丁で、小孔は両面穿孔。4は玄武岩質の石材、半月形で破片に小孔がないが20cm前後の大きさになるのであろう。5は粘板岩で、小孔の穿孔や背は粗雑なつくりである。6は最下層の砂層で出土した大型蛤刃磨製石斧の破片。玄武岩で表面はよく研磨されている。7は表面が細かく敲打されている。現長11.7cmなので、石斧の未製品としては小さすぎるようである。

**土 製 品** 8は紡錘車、直径は4.2×4.1cm、厚さ1.0cm、重量25g。中央の小孔を開けるときにその周辺部が盛り上がっている。

**土 器** 土器はコンテナ4箱の量が出土したが、うち15点を図示した。8は壺の蓋、外面は丹塗りで頂部より放射状の細かいヘラ磨きを施す。9は小型の鉢、体部の中位に凸帯が巡る。10は壺の肩部で2段の羽状文がつく。11も同じように壺の肩部、断面三角形の粘土紐を貼りつけ、全体にヨコ磨きを

加えている。12は壺の頭部と口辺部、口縁はわずかに厚みがあるが、段はない。13は口径18.7cm、広口壺か。内外面とも細かいヨコ磨き。14～18は甕。14、15はく字形の口辺部で、外面はタテハケ目。16、17はL字形の口辺部で、16の内端は突き出して平坦な口縁となっている。17は口辺部は厚い作りで、下方に三角凸帯がつく。18は倒卵形の体部となる。19～21は上げ底で、外面はよく縮まっている。

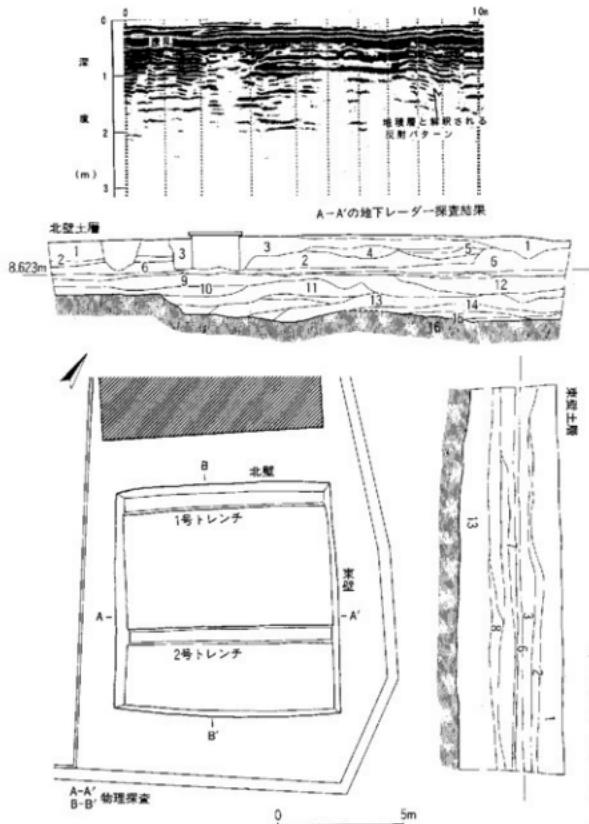


Fig. 68 65次発掘区と土層

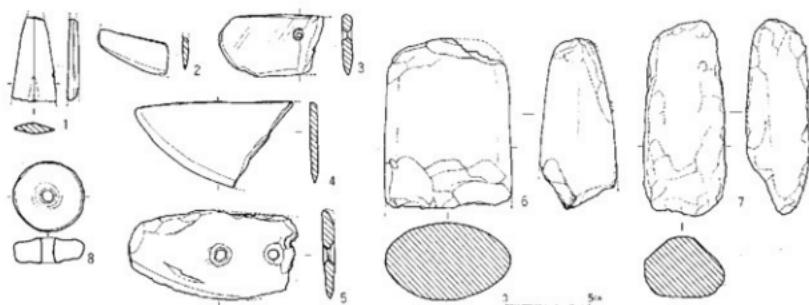


Fig.81 出土遺物 (縮尺 1/2)

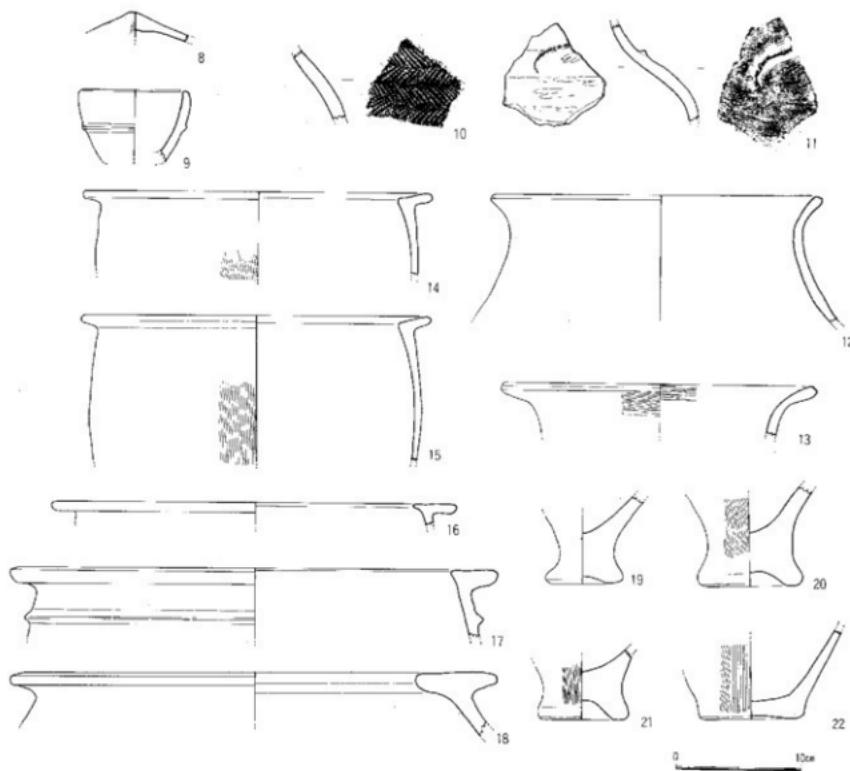


Fig.82 出土遺物 (縮尺 1/4)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第410集

環境整備施設確認調査

**板付 遺 跡**

1995年3月

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 泰田印刷所  
福岡市中央区人手門2丁目1-21

